

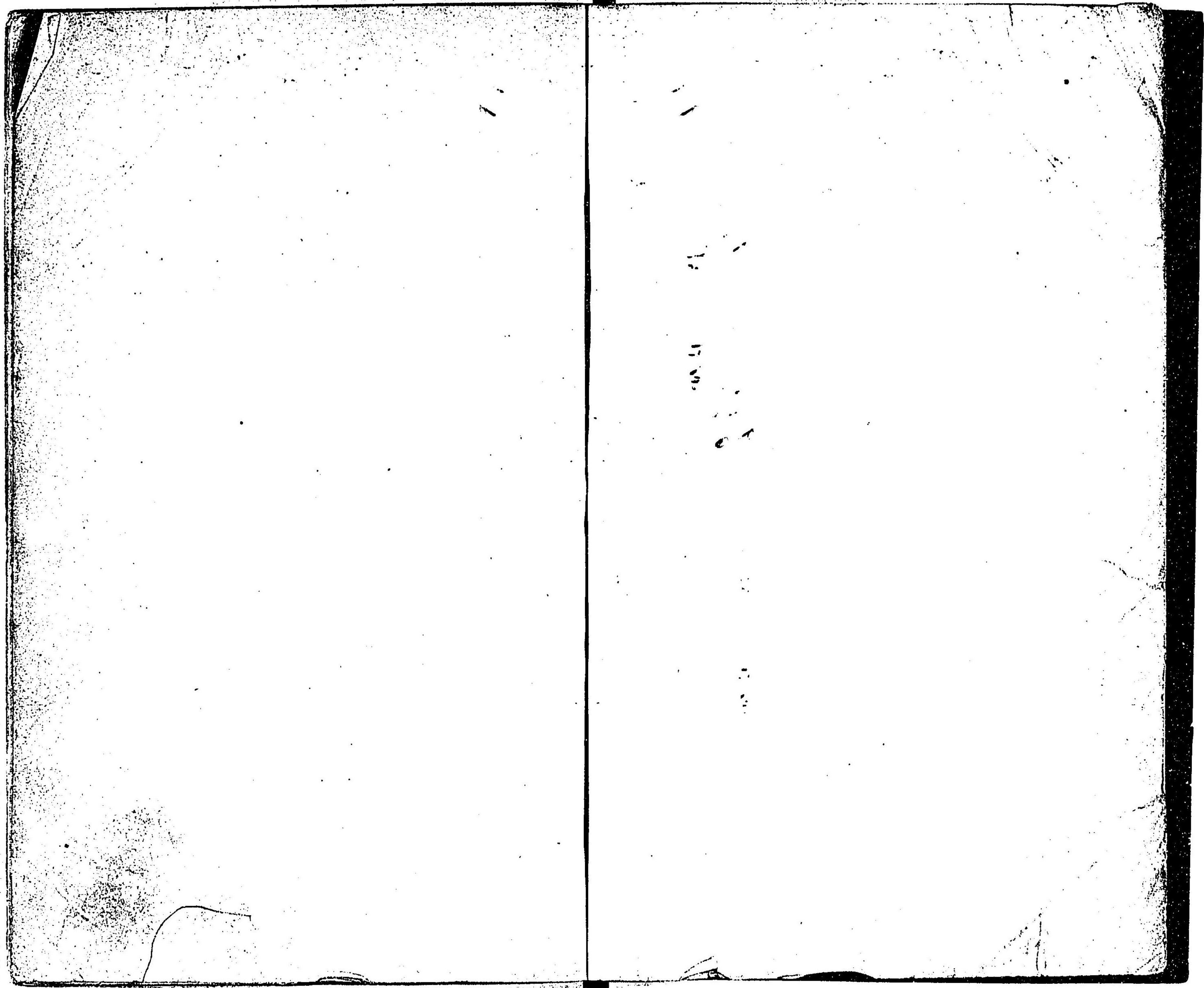
96
291

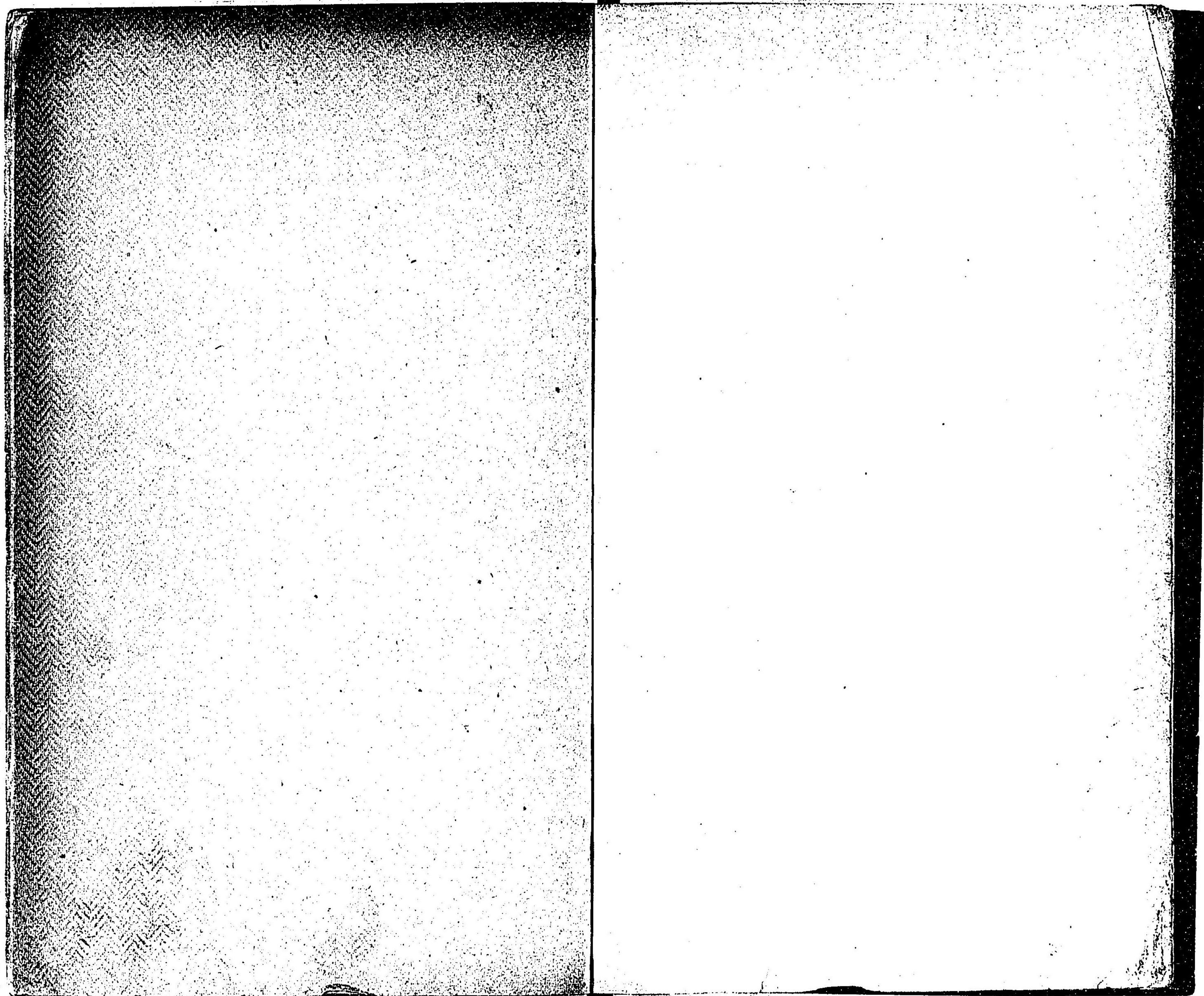
野口寧齋先生序
宮寄來城先生著

漢詩
自在
作詩術

東京

大學館發行



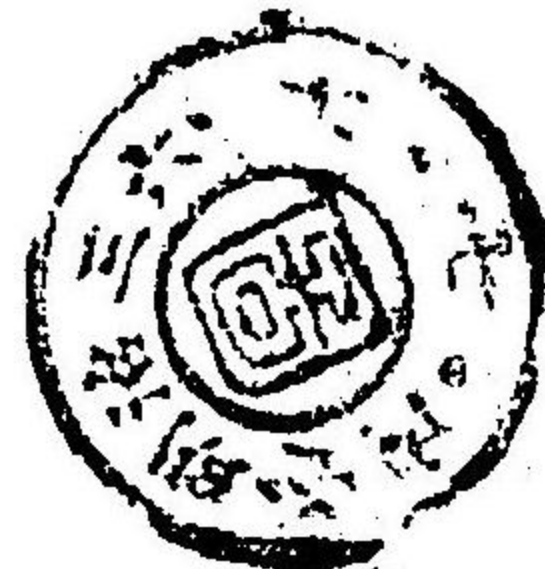


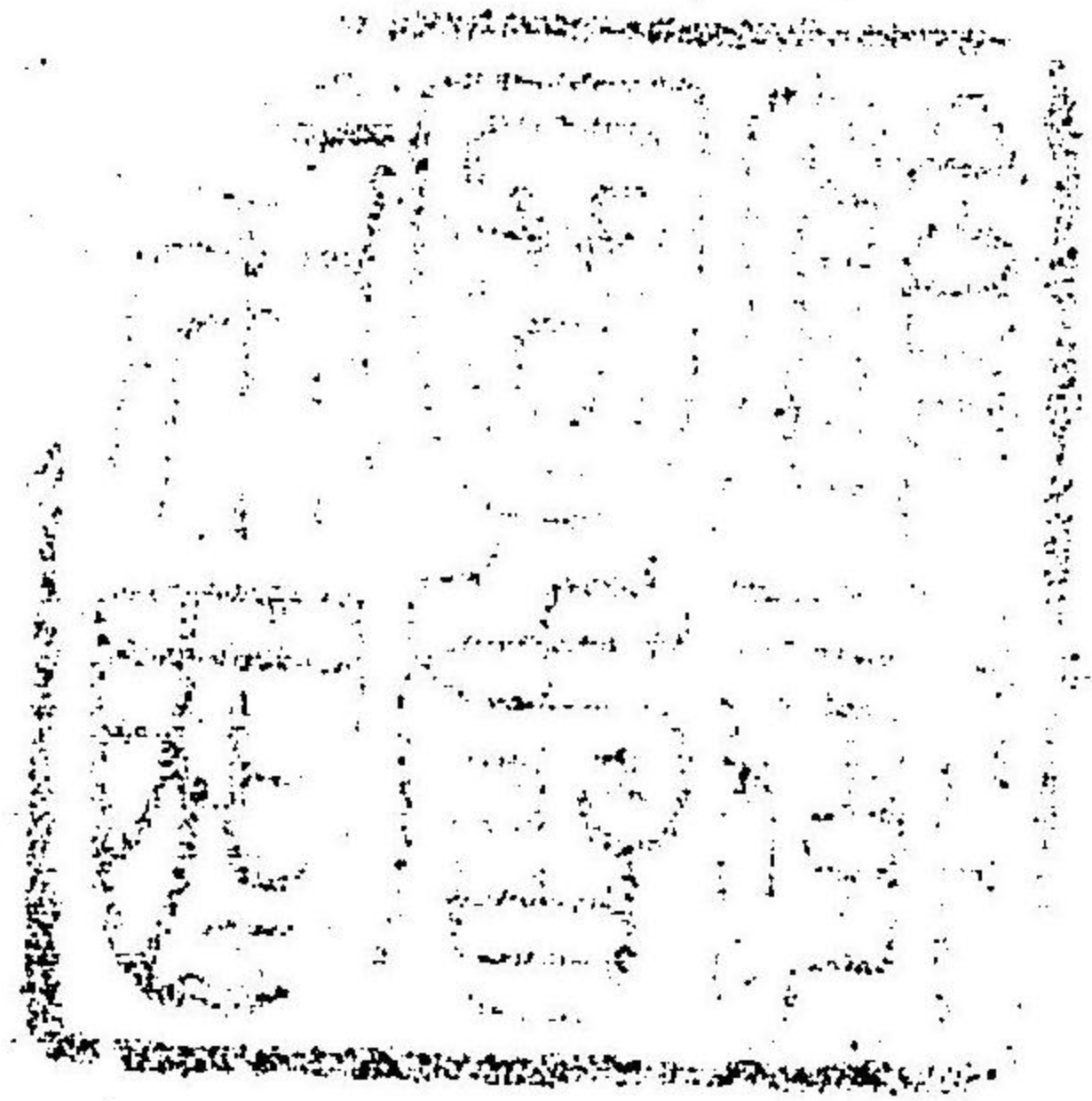
96-274



先生は、余が心を傾けて師事してゐる所である。今回、余が此著あるに就て、一部詩を寄せられた。次に掲げてあるもので、論ずる所は、所謂詩に於ける力論との批判、詩家に取つては、一議論で有るから、此書を繙くもの手紙から読み始むるが宜しい。

來城手記





來城仁兄足下

尊著作詩術一卷拜讀致し候、材は雅俗を兼ね、談は古今に涉りて、詩の詩たる所以を知らしめ、詩のいかに作るべきこと、詩の何故に作らざるべからざるかを知らしめ、併せて詩人をして詩人たらしむべき所以を知らしめたまへるは、流石に三たび意を致したまへる程有りて、流暢平易の中、直ちに人の肺腑に入るの心地致され候、詩を學ぶものに在りては、固きに彼岸に航せんとして先づ津筏を得たるやに考られ候事と存じ候

(一) 元來詩は果して學び得らるべきものに候や、或は又詩は天授にして人力にはあらざるもの可有之哉、古來種々の説、今に於て一定し

(二)

居り不申、中にも天才論の開山とも申すべきは、言ふまでも無く宋の嚴滄浪にて、其詩話に詩有別才非關于學と喝破致し居り候、滄浪は禪を以て詩に喩へ候もの故に、詩は悟るなり學ぶに非ずと斷定し、その悟は寧ろ先天に屬すべきものゝ如くに見へ候より、此説を奉ずるものは、其弊或は空疎に流れて、全く書卷の氣なきに至るものも之れ有り候、從て此説に反對せるものも少からず候、中に清の朱竹垞の如きは、其齋中讀書の詩に、詩篇雖小技、其源本經史、必也萬卷儲。始足供驅使、別才非關學、嚴叟不曉事、と公言致し居り候、詩を小技と抑へ候は、彼土の常習にて、感服致さず候得共、空疎の弊を救はんには、經史萬卷筆を下せば神有るの境に至らざるべ

(三)

からざるごと、理の當さに然るべき所に候、尤竹垞の此説をなし候には他に一原由有之、當時聲名一代を壓せるの王漁洋は、主として滄浪の議を持して、神韻の一派遐迹に遍く、克く之に當るもの無からしめたり、竹垞は之に頡頏して、即ち此詩有りたるものなるべく、其滄浪を攻撃したるは、取も直さず漁洋を辯難したるものと視て不可なかるべく候、事を曉らずと罵られし漁洋の影坊師は、迷惑の至りには候へども、後天の學問なくてかなはぬは其理明白に候、されど竹垞の説を奉ずるものは、書卷にのみ拘泥して其弊或は堆垛に陥りて、風趣の掬すべきものなきに至り可申候、かくて才を詫るも宜しからず、學を衒ふも宜しからず、從て論理の常として折衷説

(四)

は出でねば相成り申さず、清の錢竹汀は其甌北集序の内に、詩の大
家たるべき資格を論じて、有絶人之才有兼人之學と並稱致候、是
には誰しも異論あるべき筈無御座候

されど、僕は以爲らく、詩も作るものに才學兼具の要あるのみなら
ず、彼才なるものも、亦學なくんば發育し得べきものにあらざるべ
しと、之外ならず、假りに才は天稟なるものとするも、生れながらの
才は想ふに么微の一粒なるべく、そが他日の詩となるべき種子な
りて、直ちに之を以て此人即ち詩人と言はんは、餘りに輕率にて
卵を見て時夜を求むるにも似たるには候はずや

總ての生有るものは營養を要すべきものなること、僕の言を待た

(五)

ず候、同じ種子の牽牛花にても、其結果は去年と今年は同じからざ
るも有るべく、我家と彼家とは一つならざるも有るべく候、種子の
良きが上に良きを選びたる上にも、其輪の大ならんことを願ひ、其
色の麗はしきことを望み、其かはり種を得、くるい咲を得んことを
冀はんには、果して蒔種のまことに一任して、風饑雨虐、之を顧みずし
て可なるべきか、否とよ、必ず肥料をも施し、手入れを加へ、之を愛し
之を護すること惟日も足らずして、此時初めて玲瓏露を帯び輕婉
風に禁へざるの秋曉朶々の花を認め得るには候はずや、人の心も
固きに生有るもの、而して才は亦生有るものに候へば、詩には別才
ありとするも、之に與るに營養を以てせざれば、次第に枯死して、發

(六)

達し得べきの道無之候、されば詩才の肥料はと申せば、昔人の申候讀多に相當可致、かくして學を以て才を養ひつゝ、尙其手入れには、昔人の所謂作多改多の二法を行ひ、一步は一步より進み、一級は一級より昇り、最後に至處に到る事と存じ候、されば詩には別才は有り、されど之を成長せしむるは學問なりと申す方、穩當なるには候はずや。

此立脚地より觀察致し候得ば、滄浪の非關于學は詩人の初地にて、大悟徹底したるの境には有之まじく、竹汀の絶人之才兼人之學は、詩人の終局にて、最初の地は論じ及ぼしたるには無之、必也萬卷儲も、之を驅使するものは、學に非ずして才なること、竹垞と雖、首肯

して善と稱すべく、其實、三者とも盾の一面を見て他の一面に想及ぼさざりしに非ずやと存じ候

(七)

我れに別才無しと稱して學ばざるものは非なれど、我に別才有りと稱して學ばざるものは最も非なりと存じ候、蓋ぞ往て回向院の角力を觀ざるやと、更らに一喩を設けたく候、其相撲つは兩虎の風を生ずとも見るべく、其相争ふは雙龍の雲を拏すとも見るべく、叫へば山をも覆すべく、躍れば海をも翻すべく、彼等の體格と膂力とは全く天授にて、他人は之を羨ても企及すべきものには有らねど、彼等とても、始めよりして一躍して關取となりしにはあらず、必ずや稽古に稽古を重ね、進歩に進歩を積み、鍛へに鍛へ、鍊りに鍊り、

(八)
禪擔ぎより三段目二段目となり、貧乏神となり、幕の内となり、或は
三役となり、或は横綱となりたるまでに候若しそれ彼等にして、道
に入りて學ぶことなければ、體格良しと雖何か有らん、膂力强しと
雖何か有らん、意氣を以て勝れる常陸山も理詰を以て知らるゝ梅
ヶ谷も、荒岩の技も、大砲の勇も、將た又太刀山駒ヶ嶽の恠偉精猛な
るも、徒らに天物を暴殄して田野に駢死し、或は肥擔ぎとなり、土方
となり杜氏となり、馬方となり、而して素人角力の大關として、村祭
の餘興に喝采を博するが絶頂なりしも斗られず候、惟だそれ其道
に入れり、其力を鍊れり、かくして終に晴天十日の人氣を江東に攢
めて、土俵を一人にて脊負て立つに至りしにはあらずや、即ちまた

今日に在りても稽古を勤むるものは成績よく、稽古を怠るものは
成績あしくといふは、恰も好し學の才と如何んの關係あるかを眼
前に證するものに御座候

來城仁兄足下

尊著を讀みて、かゝる事までに論及するは、畢竟するに是釋迦に説
法するご一般に御座へ候共、佛も元は凡夫に候、其因果の哲理を闡
明して、千古の宗教を其上に定めたるは、是も亦非常の才と非常の
學たるに外ならず、今の詩を學ぶものは、詩を以て小技と見なすべ
きにあらざること勿論なれど、さればごて、人人皆専門に之を究め
得べきに非れば、初て詩を學ぶものは、先づ尊著の如きものにより

(九)

て開發せられ、次では文選にも遡り、唐宋以後の諸集を調べ、施きて經、史、子に至るべきこと、其道行なるべく候、かくて後、詩佛ともなるべく、詩仙とも詩聖ともなるべく、詩天子ともなるは、其才の大小、其學の淺深に在るべく候、是僕が特に尊著を初學者に推薦せんとする所以にて、况んや尊著の言ふ所は、獨り初學者の讀むべきに止らずして、世の所謂る詩人なるもの皆な宜しく熟讀翫味すべきものに候に於ておや、饒舌多罪、早早不具。

癸卯五月念五

寧齋生

來城仁兄足下

目次

第三 詩

一頁

詩の本體本質及び定義。 所謂る言志。 自然の音響節奏。 荊軻が詩。 項羽が詩。
漢の高祖が詩。 詩は則ち抒情の文字に外ならない。 智識、意思の上に構成せる科學、道德と同一のものでない。 科學と道德との詩に於ける關係。 西洋詩と漢詩。 叙情詩。 叙事詩。
戲曲。 抒情中の上乗に抵つべきもの。 今人は詩を學ぶべし。 詩の功用。 詩は人品人格を高めするもの。 備後三郎。 魏の曹操。 上杉謙信。 詩は禮儀の本源、廉耻を知るの階梯

第二 詩の起原と詩の變遷

一八

詩の起原。 伏羲氏。 神農氏。 少昊氏。 擊壤歌と康衢謠。 詩の正確なる古書に見えたるは舜と禹陶との唱和。 崩雲歌と南風歌。 禹の九歌。 五千歌。 殷の時に至りて詩歌の興るべきもの多し。 詩歌の發達は先づ周の時を推すべし。 采芣歌。 采芣歌。 體裁は四言を以て主とせるがごとし。 詩三百篇。 春秋戰國の際には殆んど詩人なし。 孔子の詩。 齊の寧戚が飯牛歌。 風原と楚辭。 宋玉。 垓下歌と大風歌。 漢の武帝。 聯句の祖。 古詩十九首。 蘇武、李陵の唱和。 五言の祖。 漢代の樂府。 孔雀東南飛。

裴迪と樊瑛。 三國。 魏の曹操と曹丕と曹植。 建安體。 晉代の詩人。 涇陽明。
 宋の謝靈運。 齊の謝朓。 梁の沈約。 木蘭詩。 沈約の四聲。 六朝の詩は古體といふものゝ其實は近體に近し。 詩は唐に入て大成した。 初唐。 陳子昂。 王楊盧駱の七言長篇。 沈宋の律詩。 杜甫。 李白。 王維。 中唐の詩風。 韓愈。 白居易。 易。 その時代の詩傑。 晚唐の詩人。 宋の初。 西崑體。 歐陽修。 蘇軾。 陸放翁。 その他の詩人。 宋詩は理に偏して風韻に乏し。 元道山。 元代の詩風。 四家。 楊銜厓の樂府と竹枝。 明詩。 劉基。 高啓。 李東陽。 李夢陽と何大復。 前七才子と後七才子。 優孟の衣冠。 袁氏の兄弟の詩。 宋末の詩風。 清初の詩風。 錢謙益。 吳梅村。 王漁洋。 清初の四家と六家。 乾隆の三家。 その他の作家。 今日支那の地では詩すでに亡びたりと謂ふべし。 我朝に於ける詩の發達と變遷。 物徂徠と山本北山。 梁川星巖。 我朝の詩は此れからだ。 少年才子のもの加緊一番すべし

第三 詩の流詩の派

八六

其年號及び時代に依て命ぜらるもの。 人名を以て命ぜらるもの。 選體を以て命ぜらるもの。

第四 詩學初步の概念

九三

詩は形骸の末技でない。 詩國の賦子。 詩界の革新は後進の子弟に待つ。 真師を擇ぶこと。 詩を學ぶものは汎く學問せねばならない。 杜詩の集めて大成する所以。 詩集ではいかなるもの

をか讀むが好いか。 蘇東坡の說。 嚴儀卿の說。 初學の徒に推舉する詩集。 初學の徒に適當なる韻本。 諸記する覺悟で讀むべし。 多作。 歸する所は深情美情の増進。 かに金聲玉振の文字を並べても詩人でない

第五 詩を作るの大意

九九

詩を作るには先後する所を知らねばならない。 命意を先にすべし。 看題。 天地間のもの一として詩題ならぬはない。 養氣。 朝庭、宗廟、聖賢、師父等の題。 山嶽、河海、軍旅等の題。 山林、隱逸、仙釋等の題。 宴樂、歌賦、花月、遊賞等の題。 神仙、豪俠等の題。 景勝、宮苑、富貴、美人等の題。 登高、眺遠等の題。 邊吊送別等の題。 細別せる詩題。 登。 覽。 遊。 宴。 尋。 訪。 送。 別。 逢。 迎。 寄。 酬。 贈。 答。 題意を觀るは易し文字にあらはず難し。 陳腐を化して斬新と爲す手段。 陳腐と斬新との比較。 山を詠するの例。 古人の詩意を偷むも亦作詩の一手段。 疏案。 俗を化して雅と爲すの注意。 卑俗の中より雅致を搜索すべし。 乞食の詩と文。 立意を超卓にすべし。 賦、比、興。 詩の意は言外に在るが宜しい。 古詩三百篇の含蓄。 先づ杜詩ぐらゐを標準とすべし。 腹稿。 物と物との配合。 疑神。 氣象と體面と血脈と韻度。 釋皎然の詩式。 四不。 四深。 四離。 六迷。 六至。 改寫修飾

第六 篇法

一三三

第七 句法

篇法とは詩の結構法。 曲折。 照應

一三六

句法總論。 初學の徒は先づ句法の變化を悟るべし。 二句を以て一句と成せる例。 三句を以て一句と成せる例。 問答句。 散句と對句。 所謂る六對。 所謂る八對。 朱飲山が對法の分類。 袁石公が中聯系句の法。 就句對。 折句對。 上應下呼の句。 上呼下應の句。 行雲流水句。 顧倒綜錯句。 倒裝の句。 上二下五の句。 上五下二の句。 一字四字の句。 句中對。 互體。 變對。 象外句法。 影略句法。 秘府論の二十九對。 奇對。 假對。 偏枯は避くべし。 合掌は忌むべし。 一聯の句同じやうなのは悪い。 一篇の中同じやうな句のあるのは悪い。 唐人の對句。 句勢の種類。 奇句險語の人を驚かすもの。 句勢は強きを貫く。 倫勢。 古句襲用の例。 集句。 聯句

第八 字法

一七一

一字は一篇一章の元素。 一字のために大失體を來せるの例。 黃鶴樓の詩と鳳凰臺の詩。 王貞白と釋貫休。 一字だも増減の出來ないやうに作らねばならない。 文字の照應。 舊字點出に就て注意。 一句中に於て兩字の映照。 地名を用ゆるについて。 字、字を生ず。 析字。 疊字。 詩中に同字を用ゆるは悪い。 双字の用法。 倒字法。 聯綿の字。 分け字の種類。 一字の工、即ち字眼。 蘇東坡と黃山谷、及び東坡の妹。 字眼の例。 一句の中に題目には一字の工を求む。 詩席に於ける時の注意。 虛字と實字。 蘇東坡

第九 詩語

の字法。 結論

一九五

詩語總論。 古人の語を截取せる例。 水拍天。 花經眼。 含情。 落花の語を絕句中十六様に用ひし例。 熟語。 何處。 無數。 熟語の一斑。 詩中の語の甚だ然するのば悪い。 陳腐なる語を截取するは悪い。 晉人と唐人との遺語。 初學の徒は先づ摘用に始むべし

第十 故事典故の用法

二二一

故事典故は使役すべきもので使役するべきものでない。 今の作家の詩に於ける故事典故。 故事典故を用ゆるの弊。 杜少陵の語。 少陵の故事を用ひし例。 故事典故を用ゆるは正確なるべし。 半面粧と題風雜。 李白が賈舍人に贈る詩。 楊炯が夜送趙縱の詩。 古人を引用するのについての注意。 點鬼簿。 廣輿記。 算博士。 散句に故事典故を用ゆる時。 對句に故事典故を用ゆる時。 謝靈運と杜子美

第十一 聲韻

二一九

聲韻總論。 韻は音節に依て文字を分類せるもの。 沈約の四聲。 平聲の性質。 上聲の性質。 去聲の性質。 入聲の性質。 四聲の一部に於て平字と仄字とを識別するの工夫。

第十二 平仄

二五五

古韻と今韻との別。 通韻と轉韻と叶韻。 今の所謂通韻。 古詩、樂府には古韻を用ゆ、近體には今韻を用ゆ。 近體の第一句に通韻を用ゆるの例。 兩韻のこと。 詩韻の結果に依て起れる八病。 平頭、上尾、蜂腰、回腰、大韻、小韻、正紐、旁紐。 双聲と疊韻。 蘇東坡の吃語詩。 上尾病と回腰病とは必ず避くべし。 詩に韻あるは家に礎あるがごとし。 陳腐なる詩韻。 韻脚鷓鴣。 韻脚輕浮。 啞韻。 一音通用の字を避くべし。 實字韻と虛字韻。 險韻難韻は力を費して益なし。 李商隱が龍池の詩韻。 題に依て韻字を用ゆるの例。 和韻のこと。 和章。 次韻と用韻と依韻。 分韻。

古體と今體とに於ける平仄の別。 正式と變式。 平仄の起原。 平仄は聲調節奏の必要より起る。 平仄の標符。 孤平。 孤平を嫌ふの程度。 孤仄。 大宰春隆が孤平論。 孤平孤仄相救ふの手段。 平三聯と仄三聯。 春隆が下三聯論。 初學の徒は下三聯を避くべし。 今體の平仄式を請んずる方法。 二四不同。 二六對。 一三五不論、二四六分明。

第十三 絶句

二七一

絶句の總論。 絶句の起原。 絶とは如何んの意味。 絶句の作法。 起承轉結。 王安石か、孟嘗君傳。 今樣。 絶句は第三句を主とすべし。 轉句の構想着筆。 承句の下三字に力を用ゆべし。 起承轉結の概論。 五言絶句。 五言絶句の平仄式。 正格と偏格。

仄起式。 平起式。 平仄に對する注意。 側韻式。 失粘式。 その他の變格。 各種の詩體中に在りて尤も作り難きものは五言絶句。 初學は先づ五言絶句を學ぶべし。 七言絶句。 平起式。 仄起式。 平仄に對する作者の注意。 踏落し。 仄韻式。 古詩格絶句。 失粘格。 全散格。 全對格。 前對後散格。 前散後對格。 問對格。 四句一意格。 四句四意格。 遞文格。 竹枝と柳枝。 六言絶句と其平仄式。 絶句作法の結論。

第十四 律

三〇八

律詩の總論。 律詩の變體。 聲律對偶の由来は古い。 沈佺期と宋之間。 律詩に二種ある。 律詩には起承轉結の名稱なし。 首聯。 頷聯。 頸聯。 尾聯。 中聯。 沈佺期の説。 律詩の作法。 各聯の氣勢と着筆。 變則なる作法。 律には律の音節。 五言律。 五言律の平仄。 仄起式。 平起式。 第一句の末字は仄字を用ゆるが宜しい。 律には律の音節。 仄韻格の仄起式と平起式。 失粘格。 五言律の首聯は對句を用ゆるが宜しい。 七言律。 七言律の平仄。 平起式。 仄起式。 七言律の踏落し。 仄韻格の平起式と仄起式。 律詩の格律。 措辭より起れる諸格。 起句結句對せず中聯對を用ゆる格。 起句對を以て起し唯だ結句のみ對せざる格。 起句對せず。 中聯及び結句對する格。 全句總對格。 八句對せず一意順下の格。 偷春格。 蜂腰格。 接頂格。 交股格。 織腰格。 續腰格。 歸風格。 藏頭格。 單拋格。 雙拋格。 單提格。 双提格。 一意格。 前開後合格。 疊字格。 字、字に應ずる格。 句、句に應ずる格。 首尾吟格。 迴文格。 仄起格。 四聲格。 五仄格。 進退韻格。 平仄兩韻格。 周伯弼の所謂虛實格。

四寶。 四虛。 前實後虛。 前虛後實。 情に景を托し、景に情を寓すべし。 六言律
を其平仄式。 小律。 律詩作法の結論

第十五 排律

三五九

排律の總論。 十二句の詩。 首聯、頷聯、頸聯、腹聯、後聯、尾聯。 排字の意味。 首聯の着
筆。 明點。 暗點。 句の變化。 蜂腰、鶴膝、馬迹の三字法。 五言排律。 仄起
式。 平起式。 五言排律の平仄は森嚴なるべし。 五言排律の首聯は對句を用ゆるかよろし
い。 七言排律。 平起式。 仄起式。 排律の篇法。 鋪叙隊仗について注意

第十六 古詩

三七三

古詩の總論。 五言古詩と七言古詩。 長古と短古の別。 五言短古。 五言六句の詩につ
いての注意。 五言五句の詩。 五言長古。 作法に就て四要。 分段、過脈、回照、發歎。
七言古詩。 唐代に於ける歌行。 詩風の一變。 歌。 行。 引。 七言古詩といへ
ば唐の歌行、唐の歌行といへば七言古詩。 七言短古。 七言長古。 作法に就て八要。
分段、過脈、突兀、字貫、發歎、再起、歸題、送尾。 出句と對句。 古詩の平仄。 闕振。
種音。 闕振と種音とは古詩平仄の尤も嚴なるもの。 古詩の平仄は寬にして宜しい。 古詩
に用ゆる平仄寬嚴の程度。 韓文公と高青邱の詩。 律句を用ゆるは惡い。 古詩の韻法。
二韻到底格。 毎句用韻格。 換韻の詩。 古詩の換韻法は解を逐ふて韻を換ゆると、段を逐

目次 畢

ふて韻を換ゆるとの二様。 逐解換韻格。 逐段轉韻格。 二句一轉格。 三句一轉格。
起二句一轉格。 結二句換韻格。 結四句換韻格。 用單句格。 換韻句數長短不定格。
五七言綜錯格。 長短句綜錯格。 用君不見字格

漢詩作詩術

第一詩

宮崎來城著

詩

詩の本體本質及び定義。 所謂る言志。 自然の音響節奏。 荊軻か詩。 項羽か詩。 漢の高祖か詩。 詩は即ち抒情の文學に外ならない。 智識、意思の上に構成せる科學、道德と同軌のものではない。 科學と道德との詩に於ける關係。 西洋詩と漢詩。 叙情詩。 叙事詩。 戯曲。 抒情中の上乗に抵つべきもの。 今人は詩を學ぶべし。 詩の功用。 詩は人品人格を高ふするもの。 備後三郎。 八幡太郎。 魏の曹操。 上杉謙信。 詩は禮儀の本源、廉耻を知るの階梯。

(一)

詩、即ち今人の所謂る漢詩の本體本質は如何なるもので有う歟、將た又その定義は如何に下じたらば好いので有う歟、むかし孔門の子夏が詩三百篇の序則に幾字を

題してより以降、今に至るまで列世の碩學大儒は、彼れ辯じ、此れ論じ、中には數千言を述べたるものも有つて、少しく漢籍に涉獵すれば、殆んど煩雜に堪えないほど目に附くので有るから、余は復た茲に贅辯を費さない、之れを要するに詩の定義は、今を距ること三千年の前に在て、尙書に特筆大書したる三字、詩言志の範圍を出でないやうにおもはるゝ、尤も茲に志といふものは、四方の志、經國の志、遠志、宿志、大志などのやうな狹隘な意味に解釋すべきものでない、たゞちに感情の發動する所を指していつたもので有る、で有るから、古人の詩を論じて、詩は事を述べて以て情を寄するもので有るといつたのも、詩は以て性情を道ふもので有るといつたのも、煎じ詰むれば、皆な此言志の二字を換言せるまでの文句に外ならない。

余は一般に人を指して感情の塊りで有るといふことを斷言して憚らない、而かも其感情は、外物の刺激、または内部の奮興に挑發せられて、處に依り、趣を殊にし、歡樂を爲す、悲哀を爲す、怒を爲す、喜を爲す、寸刻分鈔たも靜定してゐないで、

常に五内の中より飛出やうとしてゐるので有る、ソレも或部分までは理想、または意志を以て防遏することの出来ないにも限らないが、内に在るものは必ず現はるゝ習ひ、何處にか鋒を出すにさうゐない、中にも其一喜、一怒、一哀、一樂の思が、舉止動作にも、言語にも盡すことのないで、咨嗟咏歎の餘に發するものが有る、ソレが則ち詩の本質で、また其本質には必ず自然の音響節奏の備つたものが有る、ソレが則ち詩の本體。

所謂る自然の音響節奏とは如何なるもので有るかといふに、一般に人の事に接し、物に觸れ、其感情を鼓動して、喜んだり、怒つたり、哀んだり、樂んだりする時には、猶ほ彼の市井の小兒輩が、けんくわ口論に聲を荒らげ、促迷藏カクレンボウに聲を潜めるやうに、喜怒には喜怒の音響があつて字面に現はるゝ、哀樂には哀樂の節奏が有つて句中に浮ぶ、此れ一に感情の聯結に歸因するもので有るから、作者も亦自ら其然る所以を知らないものが多い、而して詩は實に其自然の音響節奏に依つて森羅萬象を包

含するもので有る、今其一例を擧げんに、燕の荆軻が易水の歌。
風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還。

此れ誠に刺客荆軻が燕丹の知遇に感じ、匕首を挟み、死を決して、虎狼を秦に使ひする時、易水の漕で、高漸離が哀筑を撃つのを聞きながら、涙を流して歌つた二句で有る。唯だ二句では有るが、全身哀と怒とに打たれた時に作つた詩だけ有つて何處までも激昂悲壯の節奏を含有し、一讀すれば、青天に秋霜の飛ぶやうな心地がするもので有る、また楚の項羽が垓下の歌。

力拔山兮氣蓋世、時不利兮驍不逝、驍不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈何。

此れ誠に項羽が一世の豪傑、暗啞叱咤すれば千人皆な瘳るゝの意氣を有しながら、江東八千の子弟を亡ひ、四面楚歌の中に、美人虞氏と訣るゝ時に作つた歌で有る。其時すでに悲壯、其事も亦悲壯、四句の中、何處までも悲壯の音節を含有し、一讀すれば今に涙の落つるやうな心地がするので有る、また漢の沛公が大風の歌。

大風起兮雲飛揚、威加四海兮歸故郷、安得猛士兮守四方。

此れ誠に沛公が布衣より起つて天下を平定し、龍衣金冠、身は天子と爲つて故郷に歸り、舊知の父老を聚めて置酒高會しながら歌つた歌ではないか、流石に大得意な時に作つたものだけ有つて、寥寥三句では有るが、何處までも悠揚迫らざるの音節を含有し、一讀すれば、自身までが英雄になつたやうな心地がするので有る、その他、近く例を我朝に取れば、出雲八重垣の歌、紀の國蜜柑船の俗謡に至るまで、句の巧拙は知らないが、一として咨嗟咏歎の餘に發して、自然の音響節奏に合へるものでないことはない。

すでに斯くの如く咨嗟咏嘆の餘に發して一に性情を道ふものが詩で有るとすれば、詩は則ち抒情の文字で有る、抒情の文字が詩で有るとすれば、詩は則ち彼の一般に智識の上に樹立せる科學、または意志の上に構成せる道徳とは、必ずしも其軌道を同じくするものでない、換言すれば今こゝに玲瓏たる月と窈窕たる花とを見ては、

唯だ其感と情とに觸るまゝを把つて、玲瓏で有る、窈窕で有ると詠するまでのこと、物理學、植物學でも修究するかのやうに、顯微鏡で見たる用世界の山谷氷霜、または花の雄蕊、雌蕊をまで持出して、其理を論ずるは、必ずしも其主眼とする所でない、魁梧の丈夫と、妖艶の女子とを見ては、唯だ其感と情とに觸るまゝを把つて、魁梧で有る、妖艶で有ると詠するまでのこと、人相學、手相學でも研究するかのやうに、貴相、貧相、多姪の相、早死の相をまで判じて、其容貌骨格をたゞすは、必ずしも其主眼とする所でない。

しかし余は智識と道德とを以て全然詩以外の地に立たしむるやうにはいはない、イナ智識と意志とは、實に詩人としては一日も缺くことの出来ない要素で有るから、余は寧ろ之れを取るもので有る、そは又なせかといふに、詩は、すでに言志、即ち抒情の文字ではないか、情には、俗情も有る、劣情も有る、悪情も有る、醜情も有る、つて、必ずしも潔情、美情ばかりでないから、詩、即ち情といふのを盲信し、一に

意馬心猿の奔馳する所に放任し、情の俗、劣、悪、鄙なるをも問はないで、一切之れを文字に現はしたるものなら、其文字は必ず浮薄と爲り、浮猥なり、俗と爲り、劣と爲り、悪と爲り、醜と爲りて、音響節奏までが下卑し、殆んど讀むに堪えないやうなものが出来るので有る、で有るから、詩人たるものは、平素此點に注意し、先づ其俗情と、劣情と、悪情と、鄙情とを掃除して、潔情と美情とを涵養することを務めねばならない、而かも其最好の手段としては、學術を以て智識を増すので有る、道德を以て見地を進むるので有る、換言すれば學術によつて得たる智識と、道德によつて得たる見地とを以て情の好惡を分析し、取捨するので有る、論じて此に至れば、智識も道德も、詩に對しては、唯だ間接の關係を有するまでのもので、直接の關係は矢張り感情が有してゐるといふことが判るで有る、詩の本體本質は、何處までも抒情のものたるを免れない。

幾度びも反覆するやうでは有るが、詩、即ち今人の所謂漢詩は抒情の文字で有る、

余は本來西洋の詩、即ち西人の所謂るポエトリーなるに通曉してゐないから、之を論ずることは出来ないが、今其知れる所、または人に聞ける所のものを以て彼此相比較せんに、西洋の詩には三體あつて、一をリリック即ち抒情詩と稱し、二をエピック即ち叙事詩と稱し、三をドラマ即ち戯曲と種するので有るさうな、猶ほ之れを詳解すれば、抒情詩とは、讀んで字のごとく、作者が自己の感情を抒ぶを主とするものに相違はあるまいが、其叙事詩といふのは、作者が作者自己を離れて事を叙したるもので有るさうな、また其戯曲といふのは、叙事詩に同じく作者自己を離れて事を叙したるものでは有るが、一事相異なる所は、作者自ら言はずして、篇中の人に言はしむるので有るさうな、西と東と、地を隔つること幾千里、其風俗習慣、學問、文章を殊にしてゐるから、形と影とに於て、其の趣を殊にするもの有るは、數の免れざる所、ソレは致方ないが、髮の黒い人種も、眼の青い人種も、今來古往、喜、怒、哀、樂の感情に於て變つたことは有るまい、殊にグヱット、ブライドが詩を論じて、

詩は心靈の發展が、音樂または律呂の形に出現したもので有るといつたのより之れを推せば、東洋人と西洋人とが詩に對する觀念には、殆んど大差のないやうにおもはるので有る、其觀念にして既に大差なければ、其現はるものにも亦非常なる差ひの有う筈はない、我が所謂る詩、即ち漢詩は、一に言志を以て本體本質と爲し、別に叙事、抒情などの名を附して、其體を分けてはゐないが、今其形に依て之れを求むれば、西洋の所謂るエピック即ち作者自己を離れて事を叙したる叙事詩もないではない、即ち江山遊覽の間、自己の身上には一字だも説及ばないで、一に山の翠、水の碧、月の景、花の致を寫したものは叙事詩では有るまいか、勇將、名士、美人、才子の品格、容貌、昨往今來の性行閱歷を詠じたものは叙事詩では有るまいか、此等の作を求むれば、歷代詩家の集中、千篇、百篇、殆んど數ふることさへ出来ない、殊に漢代に在て専ら述作された樂府のごときは、多くは叙事詩のやうにおもはるゝ、今其例として短篇一二を擇んで左に録せんに、唐の李白が烏棲曲。

姑蘇臺上烏棲時、吳王宮裏醉西施、吳歌越舞歡未畢、青山欲啣半邊日、銀箭金壺漏水多、起看江月墜江波、東方漸白奈樂何

此詩は、當時玄宗皇帝が楊貴妃を携へて日夜宴樂に耽るを諷刺して作つたもので有るとの説を成すものも有るが、ソハ別問題として、今其文字より之れを観れば、單に吳王夫差が絶世の美人西施を得て、姑蘇の臺上に長夜の飲を張つた模様を寫したまゝで、半句一字だも作者自己の感情を舒べた所はない。此れ所謂る叙事詩では有るまい歟。李白が采蓮の曲。

若耶溪傍採蓮女、笑隔荷花共人語、日照新粧水底明、風飄香袂空中舉、岸上誰家遊冶郎、三三五五映垂楊、紫騮嘶入落花去、見此踟躕空斷腸。

此の詩は、單に若耶溪上の少年輩が、紅袖を翻へして、蓮を采る女を一見し、神魂ともに飛蕩せる模様を寫したまゝで、半句一字だも作者自己の感情を舒べた所はない、此れ所謂る叙事詩では有るまい歟、また例を我朝に取れば、賴山陽が作つた彼

の有名な前兵兒謠。

衣至肝、袖至腕、腰間秋水鐵可斷、人觸斬人、馬觸斬馬、十八結交健兒社、北客能來何以酬、彈丸硝藥是膳羞、客若不食餐、好以寶刀加渠頭。

此れも亦叙事詩では有るまい歟、その他、長篇大作を以て之れを論ずれば、唐の白樂天が長恨歌、清の吳梅村が永和宮詞なども、西詩の例に倣つて禮を分ては、同じく叙事詩の部に入れて妨げは有るまい、また西詩の所謂るトラヤ即ち戯曲に至つては、後世、元、明、清間に發達したる傳奇を以て比較して好いとおもふので有る、けれど傳奇は、いづれも長篇の續きもので有るから、茲に一二の例として引くことは出來ないが、その名作として、西廂記、桃花扇、玉茗堂四傳奇、紅雪樓十種など、その數も亦多し、中にも桃花扇のごときは、全部六卷、六十餘節の長篇で有つて、最初は宮中で演せられ、續いて民間に在つては、彼の劇場でも、此劇場でも、殆んど虚日ないやうに演じたもので有るさうな、此に依て之れを観れば、我が所謂る詩、

即ち漢詩は、幾多の星霜を経て、幾多の變遷を來すとも、其時代、時代に於て、各の其特種の聲色を擅まゝにしてゐることが判る、また隨つて其風貌骨格に於て多少の差異は有るにさうゐないが、必ずしも西詩の所謂の叙事詩、戯曲の類のないといふことの出來ないのも判るで有う、イナ、もしも一雙の靈眼を以て、眞成に研究し、兩兩相比較したものでなら、西詩の所謂の叙事詩、戯曲よりも或は勝つたものがあるかも知れない。

しかし我が所謂の詩、即ち漢詩の本體本質は、何處までも抒情で有る、さらば其抒情詩の中でも、如何なるものが上乘で有るかといふに、ソハ他なし、物を寫し、景を描いては、讀むものをして一般に目睹耳聞の想あらしむる、情を述べ、思を寫しては、讀むものをして一般に同情を寄せしむるまでになれば、余はソレに對して、詩の能事畢れりといふことを斷言して憚らない。

之れを惟ふに今の時は人事多端で有る、隨つて、今の人が滔々として功利の一點に

のみ傾心するとも、一般に閑文字などは學ばずとも宜いなどいつて、殆んど詩を度外視してゐるやうなものも亦頗る多いやうにおもはるゝが、ソレは非常なる誤解で、余は斯る時勢だから、ますく詩を學ばねばならないとおもふので有る、けだし我國の文學に貢獻するがために、専門の詩人と爲ることに志すやうな有心の人に對しては、余も復た茲に一言を費すの必要もないが、其餘の人に對し、ごく近い所で其機能を數ふれば、心の快樂を求めんと欲するもの、旅行の慰を得んと欲するもの、文章の巧みなることを欲するもの、支那の地に於て支那人を敵手に一事業を成さんと欲するものなどは、殊に學んでおくが宜しい。

しかしソレよりも猶ほ大なる功用が有る、人いやしくも自家の品格を高めんと欲するものに至つては、必ず其助を此に得るが宜しい。

前段にも痛論せるやうに、詩を作るには劈頭第一に潔情と美情とを増進し、俗情と、劣情と悪情と、鄙情とを掃除せねばならない、換言すれば、詩は喜、怒、哀、樂の

正を得て徳性を涵養するもので有るから、之れを學んでゐる中には、知らず識らず自家の品格を高むることは、今さら多辯を費すを要さない、ヨシ又そこまでゆかすとも、風流韻事の一つも話し、詩、歌の一つも作るものに逢へば、其詩、その歌の巧拙いかんは兎に角、その人の潔情、美情、劣情、俗情は兎に角、眼に一丁字ないものに逢つたのよりは、尊敬の意を表し、従つて愉快に感ずるではないか、また交際のごときも、文字の交りと、聲色の交りとは、どちらが高尙であるかといふ問を起せば、其内幕いかんは兎に角、大概の人は、文字の交を以て答ふることに躊躇せぬではないか、此れ既に詩、歌の徳が其人の品格地歩をして一段高からしめてゐるので有る、けたし人自ら品格の高さを望まないならば、如何でもよいが、此品格ばかりは、一時のものでない、身後萬世に涉つて非常な關係を有してゐるから、貴顯富豪になつても、貧乏しても、事業を成しても、成さぬでも、之れを小にしては郷黨、之れを大にしては天下に名を残すやうな人は、猶ほ更ら品格を高めておかね

ばならない。嘗て誠みにおもふべし、行宮の風雨に櫻樹を削つて詩を題じたものは備後三郎ではないか、古關の落花に鐵馬を停めて歌を咏じたものは八幡太郎ではないか、八幡太郎は戦將で有る、備後三郎は介冑の士で有る、一に歴史に依つて其才幹武略を論ずれば、必ずしも歴世の猛將烈士に比して後人の眼を驚かすほどのこともないので有るが、一たび讀んで十字の詩、三十一字の歌に至れば、餘韻千秋、今からでも、何んぞなく、おくゆかしくおもはるゝので有る、詩、歌、文章の人品人格を高く見するのは、先づ此様なもので、魏の曹操が、朔を横へ、詩を賦した逸話が、八十萬の大軍を覆へした赤壁の戦よりも、嘖嘖として後世に傳はれるも亦此理に外ならない。上杉謙信にしたところが、矢張り其流で、瀟灑たる襟度、敵國に鹽を送つたやうな美談も、煎じ詰むれば、春日山頭に馬を立て、越山能州の夜景を詠じた詩情の、其まゝ動作に現はれたもので有る、俗謠に戦をしたり、花を植えたりといふことが有るが、

いかに佳言で、すでに花を植ゆるくらゐに優美なものなら、戦をしても残忍でない、残忍は戦の本色で有る、本色の残忍をさへせなくらゐなものなら、その他の舉止動作に卑吝なことの有う筈はない、而して花を植ゆるも、詩を作るも、韻事たるに於ては同じ、詩は、何處までも人をして潔情、美情を増進せしむるものにならぬ。

誠とに詩は人、人の品格を高むるもので有る、而して其品格は、禮儀の本源で有る、廉耻を知るの楷梯で有る、けだし今の社會は物質的文化のために、殆んど道德的秩序を破壊せられてゐるから、いかに劣情、我慾を恣まよしても、人が怪まねば、我れも亦自ら耻づるを知らない有様、之れを矯正するには、先づ其破壊せる道德的秩序をたゞすより外によい手段はない。

之れを惟ふに社會に於ける道德的秩序は禮で有る、彼此の間に禮を設け、所謂非禮なことは一切相容れぬといふことになれば、いかに物質的文化が熾んにあつたから

とて、社會に於ける道德的秩序は決して亂るゝものでない、さらば其禮は如何にして設くるかといふに、他なし、先づ人をして各の其廉耻の尙ふべきを知らしむるの
 有る、さらば其廉耻は如何にして知らしむるかといふに、他なし、先づ人をして各の其品格を増進せしむるので有る、約言すれば今日の頽風を一洗し此社會に井然たる道德的秩序を立つるには、人人の品格を高かしむるより外に好い手段はないといふので有る、詩の枝は小さいが、詩の道は天地萬物を包容してゐる、其潔情、美情を増進し、徳性を涵養する點よりすれば、社會の秩序を維持するものは、唯だ此詩學の有るばかりで、法律だの、政治だの、經濟だの、纔かに一局部に齟齬してゐるやうな學問と同日に論すべきものでない。

第二 詩の起原と詩の變遷

詩の起原。 伏羲氏、 神農氏、 少昊氏。 擊壤歌と康衢謠。 詩の正確なる古書に見たるは舜と皋陶の唱和。 卿雲歌と南風歌。 禹の九歌。 五子歌。 殷の時に至つて詩歌の概るべきもの多し。 詩歌の發達は先づ周の時を推すべし。 麥秀歌。 采芣歌。 體裁は四言を以て主とせるがごとし。 詩三百六篇。 春秋戰國の際には殆んど詩人なし。 孔子の詩。 齊の齊威が飯牛歌。 屈原と楚辭。 宋玉。 核下歌と大風歌。 漢の武帝。 聯句の祖。 古詩十九首。 蘇武、李陵の唱和。 五言の祖。 漢代の樂府。 孔雀東南飛。 蔡邕と蔡琰。 三國。 魏の曹操と曹丕と曹植。 建安體。 晉代の詩人。 陶淵明。 宋の謝靈運。 齊の謝朓。 梁の沈約。 木蘭詩。 沈約の四聲。 六朝の詩は古體とはいふものゝ其實は近體に近い。 詩は唐に入つて大成した。 初唐。 陳子昂。 王楊盧駱の七言長篇。 沈宋の律詩。 杜甫。 李白。 王維。 中唐の詩風。 韓愈。 白居易。 その時代の詩傑。 晚唐の詩人。 宋の初。 西昆體。 歐陽修。 蘇軾。 陸放翁。 その他の詩人。 宋詩は理に偏して風韻に乏し。 元遺山。 元代の詩風。 四家。 楊鐵厓の樂府と竹枝。 明詩。 劉基。 高啓。 李東陽。 李夢陽と何大復。 前七

才子と後七才子。 優孟の衣冠。 袁氏兄弟の詩。 宋末の詩風。 清初の詩風。 錢謙益、 吳梅村。 南施北宋。 王漁洋。 清初の四家と六家。 乾隆の三家。 うの他の作家。 今日支那の地では詩すでに亡べりといつてよろしい。 我朝に於ける詩の發達と變遷。 物徂徠と山本北山。 梁川星巖。 我朝の詩は此れからだ。 少年才子のもの加繁一番すべし。 詩の起つたのは非常に古いことで、ザツト指折敷へても三千餘年、その後には變遷した歴史を擧げて一一記述するは容易なことでない、しかし一般に詩に作るものは、いかに初學の子弟だからとて、其大略ぐらゐは承知しておらねばなるまい、嘗試みにおもへ、今こゝに詩を作るものが有つて、天授の才質、朝に廻鳳舞鸞の字を並べ、夕に彫金鏤玉の句を吐いたところが、一朝人から、歴代の詩人では、誰れが大家だ、誰れが名家だと問はれて、其名さへ答ふるこゝの出來ないやうでは、我父母の年齢を知らぬも同じやうなもので、此れに越したる耻辱はない、だから余は茲に此一篇を特筆しておくので有る、簡略では有るが、一讀すれば必ず其變遷の大略だけは判るにさうもない。

けだし樂と詩とは、文字のない時代から存生してゐるにはさうゐないが、その時代がすでに渺邈にして、事事皆な信することの出來ないやうなものばかり有るから、詩も亦從つて之れを稽ふることが出來ない、しかし口碑に傳ふる所に依れば、伏羲氏に網罟の歌が有つたさうな、神農氏に豐年の詠が有つたさうなが、その詩は逸して傳はらない、傳はつてゐるものでは、少昊氏の父母に皇娥白帝の二歌といふのが有るけれども、後世の定論は、全く偽選に係るものとして取るものはない。詩は通例、擊壤の歌と康衢の謠とを以て起原として有る、今の學者も多半は爾かおもつてゐるらしい、けだし帝堯の時、天下大に和し、百姓に事がなかつたので、一個の老人が壤を擊ちながら歌つてゐた、その歌

日出而作、日入而息、擊井而飲、耕田而食、帝王子我何有哉。

此れが所謂の擊壤歌で有る、また同じく帝堯の時、堯自ら天下に君臨すること五十年、億兆が果しておのれを戴いてゐるか、ゐないか、天下が治まつてゐるか、ゐないか、

いかゞ判らないので、ソレを驗めすために、一日微服して康衢の間に遊んだ、處が途に兒童が頻りに歌を歌つてゐる、その歌

立我蒸民、莫匪爾極、不識不知、順帝之則。

此れが所謂の康衢謠で有る、擊壤、康衢の二歌が果して詩の發端で有るとすれば、詩は實に帝堯の時代に始まつたといはねばならない、しかし擊壤の歌は帝王世紀に出てゐるばかりで他の古書には見えてゐない、康衢の謠は列子に出てゐるばかりで他の古書には見えてゐない、其傳ふる所、すでに斯くのごとくに後世の書で有るから、其出處を正確とすることの出來ないのは勿論、余の見るところでは、擊壤も、康衢も、其思想といひ、其文字といひ、決して帝堯時代のものではない。

詩の正確なる古書に見へたるは尙書を以て始めとせねばならぬ、即ち虞書益稷の篇に舜と皋陶との唱和が載せてある、その詩

舜 股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉。

● 臯陶

元首明哉、股肱良哉、庶事康哉。

元首叢脞哉、股肱惰哉、萬事墜哉。

此唱和を一讀すれば、當時の詩なるものが如何に單純で有つたか想像されるであろう、また彼の傳へて帝堯時代の詩といへる擊壤、康衢の二歌と相較へたならば、其思想、其文字といひ、思ひ半に過ぎるものが有るで有う、故に余は此舜と臯陶の唱和を以て今日傳はれる詩の最む古いもので有るといふことを斷言して憚らない。

また帝舜の時に、卿雲の歌あり、南風の歌あり、今に傳はつては有るが、舜と臯陶の唱和に比すれば、其思想、其文字、また當時のものでないやうにおもはるゝ、しかし此れは余の私見で有る、他の詩人は何んとおもつてゐるか知らない。

夏の時、禹に九歌といふのが有つたが、世に傳つてゐないから、其の事を論ずるものさへ少い、今の書經の大禹謨は學者の定論のやうに、よし僞作で有るとした所が、周禮の大司樂に九德の歌、九韶の舞とある註に左氏を引いて九功の德、みな歌

ふべし、之れを九歌といふと見えてゐる點より之れを推せば、禹に所謂る九歌なるものも存じてゐたことは疑を挾む餘地がない、その後、有名な詩では五子の歌で有う、しかし今の書のは信ずることが出来ない。

殷の時に至つては、一般の風氣も頗る聞けたので、詩歌にも亦觀るべきものが多し、中にも湯が作つた桑林騰辭などは、其傑作の一で有る、その他、大學に引ける盤之銘のごとき、詩經に見ゆる尙頌の諸什のごとき、般人豪勵の氣象が躍然として堵幅の表に現はれてゐるので有る、しかし詩歌の發達は、一般に文化の進歩とともに、古代に在つては、先づ周の時を推さねばなるまい。

周の初に於て、尤も流傳して今に人口に膾炙してゐるのは麥秀の歌で有る、麥秀の歌は、殷の箕子が、殷の亡んでから、周に朝する時、途に其故城を過ぎ、宮殿の皆な毀れて、あとに麥の秀で、草の生へてゐるのを見て、感慨悲傷に堪えないで作つたもので有る、その歌。

麥秀漸凋兮、禾黍油油、彼狡童兮、不與我好兮。

また伯夷叔齊に采薇歌といふのが有る、伯夷叔齊は殷の遺民で、殷すでに周に亡ぼされ、天下は皆な周と宗とすれど、夷齊ひとり之れを耻ぢ、義、周の粟を食はず、薇を首陽山に採つて歌つた歌が即ち采薇の歌で有る、その歌

登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽焉没兮、余安適歸矣、吁嗟徂兮、命之衰矣。

周の盛なるに及んでは、詩もあまじ體裁を備へ、四言を以て主となしたもので、い、史の稱する所に依れば、いにしへは詩三千篇餘り有つたが、孔子に至りて、其重複せるを刪り、禮に協へるを取り、周詩三百、商頌五にして、都合三百六篇だけを留めたので有るさうな、それが即ち今の所謂詩經で、詩經は、和歌にていへば、先づ萬葉集のやうなもので、其作者には、周公、召公、尹吉甫のやうな聖人賢人も有る、また名も知れない村娘野人も有る、けだし周詩の模様は、詩經を一讀すれば

判ること有るから、余は茲に贅せない。

春秋戰國の際に至つては詩人なしといつてもよろしい、尤も此際に在て、宴飲の席などでは、古人の詩を誦して志を言つてはゐたが、つまり作者がない、しかし孔子だけは流石は天下後世に聖人と稱せられ、萬世の師表と仰がるだけ、詩に於ても、去魯歌、蟋蟀歌、臨河歌、楚聘歌、獲麟歌、龜山操など有りと稱せられ、その歌は各書に散見し、其才力に富めるを見ることが出来るので有る。

誠に戰國時代には詩の作者がない、其ない中でひとり珍とするに足るのは、齊の威寧で、威、微なる時、齊の桓公へ仕へやうと思つたが、其つてがないので、牛の角を攀ちて歌三章を歌つた、處が、桓公は聞いて偉人と爲し、迎へて國に歸り、政を授けたさうな、其歌が即ち所謂飲牛歌で今に人口に膾炙し、誰れひとり知らぬものはない。

戰國の末に至つては、戰亂の餘、國土衰亡の怨は漸く人心を動かじ、燕の荆軻が易

水の歌を爲りて慷慨の音を出し、楚の屈原が離騷となつて怨誹の言を漏した、しかし荆軻は一介の刺客で有る、其歌、いかにも感激の至情に成つて、百世の下、人を動かすので有るが、終生唯だ二句の短歌あるばかりで有るから、稱して詩人と爲すことは出来ない。

屈原、名は平、楚の同姓で、懷王に事へ、治蹟も大に擧つたので有るが、後ち同列大夫の讒訴に逢ひ、憂心遣るかたなくして離騷を作つた、離は別で有る、騷は愁で有る、身は放たれ、逐はれ、離別され、中心愁思に惱んでも、猶ほ君を風諫して正道にかへさうとおもふのが、全篇の寄托で有るから、内容の義理の高明正大なること、殆んど其比を見ない、しかし屈原は、遂にコレに依つて懷王の心を醒すこと出来ないので、汨羅の淵に身を沈めた、哀れな詩人。

また離騷は、其内容たる寄托の意味を一切排除し、唯だ文章として誦したところ、千古の至文なるを失はない、而かも其妙趣は解不解の間に在つて、崑崙縣圃、詭異

譎怪、殆んど尋常繩墨で律することは出来ない。

屈原が離騷の出でてから、殆んどソレと同時代、または漢の時代になつて、其意を推し、其調を奉じて辭を綴つたものが有る、その人は、宋玉、景佐、賈誼、淮南、東方朔、嚴忌、王褒、劉向、王逸など、中にも劉向は、ソレを編して一部の書を作つた、即ち今の所謂る楚辭で、楚辭の作者は二三子を除くの外は、いづれも漢人で有るのに、稱して楚辭といふのは、其旨が楚でなければ、其辭が楚で有るからで有る、此れ以て屈原が辭賦の如何に後世を動かしたか、察せらるゝで有らう、猶ほ一言しておかねばならぬのは、詩は離騷に至て一變したことで有る、詩を學ぶものも亦此事は能く記憶しておかねばならない。

屈原の博學宏辭なる、其門下にも亦秀出の士が多い、中に尤も世に知られてゐるものは宋玉で有る、宋玉の賦の楚辭中に見えてゐるのは九辨、招魂、文選に見えてゐるのは風賦、高唐賦、神女賦、登徒子好色賦。

秦漢の際に至つて、項羽に垓下歌が有る、高祖に大風歌が有る、いづれも絶調では有るが、詩人として傳ふべきものでない。

漢の武帝の時に至つて、文學は蔚然して起つた、中に武帝にも亦非常なる詩才が有つたらしい、その作として今に存してゐるものには、秋風辭が有る、瓠子歌が有る、蒲梢天馬歌が有る、李夫人歌が有る、落葉哀蟬曲が有る、いづれも絶唱、また栢梁臺を築いて置酒高會し、群臣二千石に詔し、能く七言の詩を作るものは、坐に列するを許し、人ことに一句を賦して、各の其志を言はしめ、所謂栢梁體と稱して後世聯句の祖となること、其嗜好と、才氣との尋常でなかつたことが想はる。

漢の時に、古詩十九首といふのが有る、誰れの作つたもので有るやら、今其作者を詳にすることは出来ないが、中には武帝の時に枚乗が作つたものも雜つてゐると言ひ傳へられてゐる、險句警語の人を驚かすものはないが、いづれも能く情を述べ、思を寫し、復た風人の遺響ならぬはない、今左に其一二を摘録すれば。

元

涉江探芙蓉、蘭澤多芳草、采之欲遺誰、所思在遠道、還願望舊鄉、長路漫浩浩、同心而離居、憂傷以終老。

迢迢牽牛星、皓皓河漢女、織織擢素手、札札弄機杼、終日不成章、泣涕零如雨、河漢清且淺、相去復幾許、盈盈一水間、脉脉不得語。

古詩十九首は、いづれも五言詩で有る、從來の詩のやうに、長きは八九言、短きは三四言、その口を衝いて出づるがまゝに篇を成したのとは大に異つてゐる、此一點だけには、詩の變遷史を讀むものは大に注意せねばならない、また司馬相如が妻の卓文君に白頭吟といふのが有る、蘇武、李陵に唱和の詩が有る、いづれも五言で、殊に蘇季の唱和に至つては、其の格といひ、其思といひ、優に正宗と爲すべきものが有るので、後の學者は此の唱和を目し、直ちに五言の祖と稱してゐるので有る、しかし余の見る所を以てすれば、彼の古詩十九首の中に枚乗の作が雜つておれば猶ほ更らること、ヨシ雜つてゐないにもせよ、現に卓文君が此唱和に先ち、白頭吟で

此體を賦してゐるからには、一概に蘇李の唱和を目して五言の祖と爲すことは出来ない、之れを要するに、漢の武帝前後に在て、句格の混雜せし從來の詩よりして一定の規律を定め、單純より複雑に移り、五言古詩の一體を創作した、而かも其一體は、詩の正格なりとして唐代に及んだことは、復た争はれぬ事實で有る、此れ離騷のついで、詩道の一大變遷といはねばならない。

漢代には、また別に樂府體の五言詩も有つた、その作は廬江小吏妻、羽林郎、陌上桑の類で有る、今樂府のことを述ぶるに先ち、蘇李以後の作を擧ぐれば、李延年が北方佳人歌、王昭君が怨詩、班婕妤團扇歌、梁鴻が五噫歌、張衡が四愁歌、蘇伯玉の妻が盤中詩などは、いづれも名高い作で、たれ知らぬものはない。

漢代に於て一大奇觀を呈したのは樂府で有る、樂府とは、詩を樂に合はせて、歌奏するのをいふたもので、郊祀に用ゐるも有る、軍中に用ゐるも有る、今之れを細別すれば、郊祀の曲、即ち祭儀の歌辭に用ゆるものには、練時日、青陽、朱明、西頤、

玄冥、維秦元、天馬、錢吹の曲、即ち軍中に用ゆるものには、戰城南、臨高臺、有所思、上邪、相和の曲、即ち通常相互に唱和するものには、笠篋引、江南、薤露歌、蒿里曲、鷄鳴、陌上桑、平調曲には長歌行、君子行、清調曲には相逢行、瑟調曲には善哉行、西門行、東門行、孤兒行、艶歌行、隴西行、舞曲歌辭には淮南王篇、雜曲歌辭には、傷歌行、悲歌、枯魚過河泣、古歌、古八變歌、猛虎行など、一一擧ぐれば、殆んど指を屈するに暇ないか、さて其詩は誰れが作つたので有るかといふに、ソレは今詳にすることが出来ない、尤も史傳の記する所に依れば、漢の武帝樂府を立て、李延年を以て協律都尉と爲し、司馬相如等數十人を擧げて詩賦を造爲し、律呂を畧論し、以て八音の調に合はしめたといふことも有るから、多くは當時官府に於ける知名の作手に出たもので有うが、中には閭巷の士女が咏歎の餘に發したるものも有るにさうゐない。

漢代の古詩で、今一つ記憶して忘るゝことのないのは、孔雀東南飛の一篇で有

る、初め漢末の建安中、廬江府の小吏に焦仲卿といふものが有つた、その妻の劉氏、岳母の氣に入らないで、離縁せられ、實家に歸つて、落花の再び枝に上るの期あらんことを待つてゐると、時の縣令は其艶名を聞き、其子の嫁にと再三望んだ、劉氏は、もとより節を守つて聞かなかつたので有るが、兄に迫られ、據らなく承諾まではしたもので、如何うしても行く氣にならない、一日、門に出で、仲卿に逢つた、仲卿は劉氏が時期の來るのを待たないのを怨んだ、劉氏の心は碎くるやうで、はては意を決し、その夕、池に身を投げて死んだので有る、ソレを聞いた仲卿も亦悲憤の情に堪えないで、庭樹に縊れて死んだので有る、時の人が、憫然におもつて其事を述べたのが、即ち此孔雀東南飛の一篇で、全篇一千七百四十五、字五言詩の長篇大作、その事實すでに此様に悲哀なるのに、其筆は平常に超越し、微に入り、細に涉り、情を寫し、語を述べ、聲あり、色あり、一讀すれば、千歳の下に生れても猶ほ其時、其事を觀たやうな心地がするので有る、支那上代の詩としては誠に珍らしい。

その後の詩人としては、先づ蔡邕を推さねばなるまい、邕は一代の詞宗を以て目せられてゐた、而かも後世からは、能く思婦の情を寫して纏綿排側の致をつくしてゐるといふので推されてゐる、其作つた詩も頗る多いが、中にも飲馬長城窟行などは、流傳せること尤も廣い、その詩

青青河邊草、綿綿思遠道、遠道不可思、夙昔夢見之、夢見在我傍、忽覺在
他鄉、他鄉各異縣、輾轉不可見、枯桑知天風、海水知天寒、入門各自媚、
誰肯相爲言、客從遠方來、遺我雙鯉魚、呼兒烹鯉魚、中有尺素書、長跪
讀素書、書上竟何如、上有加餐食、下有長相思。

その女の蔡琰も亦作家で有つた、身は亂離に際して、自ら持することの出來ないで、胡地の婦と爲り殆んど人生の悲酸を嘗悉してゐるので、其筆に成れる胡笳十八拍辭、悲憤詩を始め、その他の諸篇、深刻の語を成し、悽愴の音を發し、一として涙ならぬはない。

三國の時に至つては、魏の曹操、製を横へて詩を賦す、固より一世の奸雄で有つたことは、三尺の童子も知つてゐるが、また一世の詩人で有つた、其詩調の悲壯にして激越なる、後世詩人の夢にだも企つる所でない、今その短歌行

對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多、慨當以慷、幽思難忘、何以解憂、唯有杜康、青青子襟、悠悠我心、但爲君故、沈吟至今、呦呦鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓、鼓瑟吹笙、明明如月、何時可掇、憂從中來、不可斷絕、越陌度阡、枉用相存、契調談讌、心念舊恩、月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依、山不厭高、海不厭深、周公吐哺、天下歸心。

語氣の沈雄なる、意想の博大なる、曹操は偉なる詩人で有つた、操の子の曹丕も亦作家たるを免れない、しかし其詩調は父と異つて娼媚婉約、もし夫れ其弟の曹植に至つては、八斗の才、即ち天下に一石の才が有れば、其八斗だけは此曹植が占領してゐると稱せられたけあつて、居然たる大家、天下後世の之れを仰ぐことは泰山北斗

も替らない、

曹植字は子建、嘗て兄曹丕のために七步の中で詩を作れと命せられた時、聲に應じて左の六句を作つた

煮豆持作羹、漉豉以爲汁、箕在釜下燃、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急。

此れ名高い話で、誰れ知らぬものはないが、此一事よりするも、曹植にこれだけの才が有つたか、殆んど推測することが出来ない。

曹植の詩は、華麗で有る、朗暢で有る、その七哀詩

明月照高樓、流光正徘徊、上有愁思婦、悲歎有餘哀、借問歎者誰、言是宕子妻、君行踰十年、孤妾常獨棲、君若清路塵、妾在濁水泥、浮沈各異勢、會合何時諧、願爲西南風、長逝入君懷、君懷良不開、賤妾當何依。

此れ一意君を思ふの辭で有る、漢代の古詩十九首に較べて秋毫も遜色はない、其美

女篇は、美女を以て君子にたとえ、君子時に遇はざれば、いやしくも節を屈せざるの意を述べたもので、また傑作

美女妖且閒、採桑岐路間、柔條紛冉冉、落葉何翩翩、攘袖見素手、皓腕約金環、頭上金爵釵、腰佩翠琅玕、明珠交玉體、珊瑚間木難、羅衣何飄飄、輕裾隨風還、願盼遣光彩、長嘯氣若蘭、行徒用息駕、休者以忘餐、借問女安居、乃在城南端、青樓臨大路、高門結重關、容華耀朝日、誰不希令顏、媒氏何所營、玉帛不時安、佳人慕高義、求賢良獨難、衆人徒嗷嗷、安知彼所觀、盛年處房室、中夜起長歎。

猶は五言中に佳句甚だ多い、今其二三を摘めば

大夫志四海、萬里猶比隣。

權家雖愛勝、全國爲令名。

孤獸走索群、啣草不遑食。

重陰潤萬物、何懼澤不周。

在貴多忌賤、爲恩誰能薄。

爲君既不易、爲臣良獨難。

利劍不在掌、結交何須多。

生存華屋處、雲落歸山丘。

八方各異氣、千里殊風雨。

曹植と時を同ふしての詩人には、劉楨といふのが有る、王粲といふのが有る、陳琳といふのが有る、徐幹といふのが有る、應璩といふのが有る、之れを名けて建安體といふのは、其時の年號を取つて稱したもので、みな各其特色を以て相下らない、中にも劉楨は後世から曹劉といつて、曹植と並び稱せられ、尤も名高い。

晋の時に及んでは、阮籍といふのが有る、張華といふのが有る、陸機といふのが有る、嵇康といふのが有る、傅玄といふのが有る、潘岳といふのが有る、左思といふ

のがある、郭璞といふのが有る、いづれも一世の作家たるにさうゐないが、晋人の詩は、一般に氣力が足りない、中に唯だ彼の半夜に鶏を聞いて起舞したことで有名な劉琨ばかりは、蒼涼悲壯の語を成したので有る、誠に異數といつてよろしい。しかし晋の時代は、古今を壓倒するやうな一人の大詩人を出した、ソレは餘人でない、即ち陶潜で有る、陶潜、字は元亮、又の字は淵明、自ら號して五柳先生といつた、六朝第一品の人で有つたことは、今更ら論ずる必要もあるまい、身は名臣の後で有りながら、易代の時に遭逢してゐるので、其感、其慨は、常に胸臆の際に往來し、時に筆墨に托して外に露はるゝので有る、其境遇の然らしむる所、其詩も純然たる田園的では有るが、清遠開放の中に淵深朴茂の趣を成し、能く性情を陶寫して、一に自然を以て出してゐるのに至ては、誠に千古に獨歩するに足るものといはねばならない、淵明が作つたもので、尤も人口に膾炙してゐるのは歸去來辭で有う、また其飲酒

結。處。在。人。境。而。無。事。馬。嘯。問。君。何。能。爾。心。遠。地。自。偏。采。菊。東。籬。下。悠。然。見。南。山。山。氣。日。夕。佳。飛。鳥。相。與。還。此。中。有。真。味。欲。辨。已。忘。言。
秋。菊。有。佳。色。裊。露。掇。其。英。泛。此。忘。憂。物。遠。我。遺。世。情。一。觴。雖。獨。進。杯。盡。壺。自。傾。日。入。群。動。息。歸。鳥。趨。林。鳴。嘯。傲。東。軒。下。聊。復。得。此。生。
また其移居

昔。欲。居。南。村。非。爲。卜。其。宅。聞。多。素。心。人。樂。與。數。晨。夕。懷。此。頗。有。年。今。日。從。茲。役。弊。廬。何。必。廣。取。足。蔽。床。席。鄰。曲。時。時。來。抗。言。談。在。昔。奇。文。共。欣。賞。疑。義。相。與。析。
春。秋。多。佳。日。登。高。賦。新。詩。過。門。更。相。呼。有。酒。斟。酌。之。農。務。各。自。歸。閒。暇。輒。相。思。相。思。則。披。衣。言。笑。無。厭。時。此。理。將。不。勝。無。爲。忽。去。茲。衣。食。當。須。紀。力。料。不。吾。欺。

陶詩の五言は、後ち唐に入つて、王韜川、孟襄陽、韋蘇州、柳柳州が唯だ口を揃へ

て激賞したばかりでない、手擬し、心追ひ、はては閒適詩の祖とまで仰がれ、其飲酒のごときも、宋の蘇東坡以降、追和するもの一二に止らない、亦以て陶淵明が如何に後世詩林に重をなしたか、想はるゝで有う。

宋にも亦、陶淵明と雁行して、さまで遜色のない一大作家を出したので有る、ソハ謝靈運で有る、謝靈運、字は康樂、性尤も遊覽を好み、暇さへあれば山顛水涯に登臨し、時に山賊とまで疑はれたといふほどの詩人で有るから、その詩も亦遊覽閒適の作が殊に面白い、その石壁精舍還湖中の作、

昏旦變氣候、山水含清暉、清暉能娛人、遊子澹忘歸、出谷日尚蚤、入舟陽已微、林壑歛暝色、雲霞收夕霏、菱荷迭映蔚、蒲稗相因依、披拂趨南逕、愉悅偃東扉、慮澹物自輕、意愜理無違、寄言攝生客、試用此道推。

靈運の詩は釣深索隱、淵明の詩を把つて兩兩比較するに、いづれも自然にはさうでないが、淵明の自然は合下の自然で有る、其及ぶべからざる處は、眞に在る、厚に

在る、靈運の自然は追琢して自然に返つた自然で有る、其及ぶべからざる處は、新に在る、俊に在る、對句を用ゐないのは淵明の高處で有る、對句を用ゆるのは靈運の長處で有る、大概を論ずれば、先づコンなものだが、之れを要するに淵明と靈運とは、各その特色があつて、輕卒に其優劣を定むることは出來ない、従つて後世の詩家が、此兩家を並び稱して陶謝といつておるのも、亦偶然でない、謝靈運に續いて顏延之といふのが有つた、謝惠連といふのが有つた、鮑昭といふのが有つた、いづれも一時の選で有る、中にも鮑昭が代東門行、代出自薊北門行、行路難などの諸篇は、古樂府中の佳作として、今に名高い。

齊の作家として推すべきものは謝朓一人で有る、謝朓、字は玄暉、後世宋の謝靈運に對して小謝といふほど有るから、佳句も亦多い、今其詩品を論ずれば、能く清俊には有るが、深厚の處が少いから、靈運に較ぶれば、二三段は、たしかに下に在るといはねばならない、しかし唐の李太白は後世詩人から一生低首謝宣城といはる

とまでに傾倒してゐたので有る。

北周に庾信といふのが有つた、少しの痕迹をも留めないやうに故事故典を使ふのが此人の長處で、字句も亦鍛練を経て新婉のものが多し。

梁に、沈約、任昉、江淹などいふ作家が有つたが、此時の詩は、一般に風雅の遺音として取るべきものはない、中に唯だ一首、誰れの作つたものやら、今詳にすることは出来ないが、木蘭詩といふのが有る、通篇警挺奇抜にして、少しも時習に染んでゐないところは、梁時の珍として取らねばならない、其詩。

唧唧復唧唧、木蘭當戶織、不聞機杼聲、唯聞女歎息、問女何所思、問女何所憶、女亦無所思、女亦無所憶、昨夜見軍帖、可汗大點兵、軍書十二卷、卷卷有爺名、阿爺無大兒、木蘭無長兄、願爲市鞍馬、從此替爺征、東市買駿馬、西市買鞍韉、南市買轡頭、北市買長鞭、旦辭爺娘去、暮宿黃河邊、不聞爺娘喚女聲、但聞黃河流水鳴濺濺、且辭黃河去、暮宿黑山頭、不聞爺

娘喚女聲、但聞燕山胡騎鳴啾啾、萬里赴戎機、關山度如飛、朔氣傳金柝、寒光照鐵衣、將軍百戰死、壯士十年歸、歸來見天子、天子坐明堂、策勳十二轉、賞賜百千強、可汗問所欲、木蘭不用尚書郎、願馳千里足、送兒歸故鄉、爺娘聞女來、出郭相扶將、阿妹聞姊來、當戶理紅粧、小弟聞姊來、磨刀霍霍向豬羊、開我東閣門、坐我西閣床、脫我戰時袍、着我舊時裳、當窗理雲鬢、挂鏡貼花黃、出門見火伴、火伴皆驚惶、同行十二年、不知木蘭是女郎、雄兔脚撲朔、雌兔眼迷離、雙兔傍地走、安能辨我是雄雌。

また陳に徐陵といふのが有つた、江總といふのが有つたけれども、みな琢句を以て勝るばかりで殆んど取るべきものはない。

之れを概するに漢魏の時代までは、古を距ることも餘り遠くなかつたから、一般の詩風も、亦自ら健邁雄渾にして風雅の遺音を備へてゐたので有るが、六朝、殊に齊梁以下陳隋となつては、詩道日に卑下して、漢魏の遺軌には愈よ遠つた、しかしソ

ても亦無理ならぬことで、萬事、物の單純より複雑に進むが順序で有るやうに、詩も亦最初性情の迷るがまゝに、三言なり、四言なり、八言なり、九言なり、不規律に歌ひ出してゐたのが、段段に進んで一定の詩形を形づくるとともに、其中に一定の音律の出來ねばならぬは、理の當に然るべき所で、梁の沈約が、平、上、去、入の四聲を分ち、聲病を論じたのも、全く此趨勢に促された結果にさうゐない、六朝はすでに斯くのごとく韻學をまで研究する時代で有つたから、文字の雅不雅、古不古などは第二の仕事として、先づ音律のことはかりを研究したにさうゐない、物に一得あれば一失ある習ひ、一般の詩風或は之れがために下卑したのでは有るまいか、また既に其音韻を究めたからには、ソレを用ひて、尤も好き詩調を定めんとするの、亦理の當に然るべき所で有るにさうゐない、さらば言はん、六朝の詩は、其形こそ古體とはいふものゝ、其實は今體に近い、一例を擧ぐれば、遠く漢代に在て蘇李唱和の中にも、征夫懷遠路、遊子戀故郷などの對句も有り、降つて魏晉に至ては

駢儷排偶漸く多く、さらに降りて齊梁に至つては、殆んど純然たる律詩と見て宜しものが百篇二百篇でない、其詩すでに斯くのごとく近體に近ければ、よじ艶情を寫して綺靡に流れぬにしたところが、彼の古詩と自ら風貌骨格を殊にするも亦勢の免れない所で、一般の詩風は或は之れが爲めに漢魏の遺軌に遠ざかつたのでは有るまいか、今の詩家者流の多くは、六朝といへば、一概に排斥するので有るが、余は賛成することは出來ない、尤も六朝の詩風の綺靡で有つて、詩格の卑下で有るのだけは、余も取らない、しかし其綺靡なる所以、卑下なる所以も前に述ぶる通りで有るし、殊に唐の時代に入つてから、沈佺期、宋之問の輩が此等六朝の駢儷排偶を律するに法度を以てし、一定の詩體を作つたものか、所謂律詩ではないか、而かも其律詩は、近體と稱し、今に専ら流行してゐるではないか、此に依て之れを觀れば、六朝の駢儷排偶は、今の律詩を生んだ父母で有る、父母のことを子どもとして悪口いふは、餘り感心したことでない。

詩は唐に至つて始めて大成したといはねばならない、前節にも述べたやうに、六朝の詩人謝朓、王融、沈約の徒は、韻學を研究し、聲病をまで建てたので、その詩は古體とはいひながら、漸くにして今體に近い平仄を帯び、遂に唐の初めに至つた、處が唐には沈佺期、宋之問等の作家がゐて、さらに規律を定め、平に宜い處を平とし、仄に宜い處を仄とし、一定の句、一定の韻を用ひて最良の音節を奏することにしたので有る、詩こゝに到つて長短に法が有るやうに爲つた、平仄に式が有るやうに爲つた、韻字の轉換も許さぬやうに爲つた、之れを從來の詩の長篇、短篇、長句、短句意に従せ、轉韻を自在にし、平仄に拘泥せぬで變化多趣なるものに比較すれば、全然其面目を一新してゐるので、新たに出來た詩を近體と稱して正格とし、從來の詩を古體と稱して變格とし、正變相須て天下の節奏を具備することに爲つたので有る。

此様にして先づ出來た近體が則ち所謂律詩で有る、さうして絶句も亦出來た、け

だし絶句は、もと古樂府として六朝時代に漸く盛行つたもので有るが、嚴格なる平仄の下に法度を建て、獨立の詩體と爲したのは矢張り唐人で有るから、近體の中に入れてねばならない。

詩は、斯のごとく唐に入つて始めて古體、近體の別が出來たので有る、前人の所謂詩、四變して沈宋の律詩と爲るとは、之れを指したもので、實に最大變遷といはねばならない、一新紀元といはねばならない。

唐の時には、朝廷の文官武官試験の科目にも詩を入れたから、いかに詩が流行したかと思はるゝ、また前人も唐の時は、人として詩人ならぬはなしといつたくらゐだから、いかに詩人が多かつたかと思はるゝ。

漢文、唐詩、宋詞、元曲とは、最早動かすことの出來ない定評、誠に唐は詩の全盛期で有つた、後人は全唐の詩を分つて、初唐、盛唐、中唐、晩唐の四と爲し、時代に依りて其人を分つてゐるので有る、其人もとより各自の特色は有るが、時代に

も亦時代の特色が有るから、之れを分つのは、徒らに搜索に便宜なるがためばかりではない。

初唐は、陳隋の後を承けて、綺靡の餘風、猶ほ未だ除かない、殊に漢魏以來の古詩歌行も、齊梁を経て全く荒蕪してゐるので、顯慶龍朔年間には殆んど觀るに足るものがない、處へ陳子昂は出た、陳子昂、字は子玉、尤も力を出したのは五言古詩で、齊梁の綺靡を一掃し、建安の風骨を追ひ、一異移を放たので有る、その感遇の詩

深居觀元化、排然爭衆頤、群動相啖食、利言紛嘒嘒、便便夸毗子、榮耀更相持、務光讓天下、商賈競刀錐、已矣行采芝、萬世同一時、

吾愛鬼谷子、青溪無垢氛、囊括經世道、遺身在白雲、七雄方龍鬪、天下亂無君、浮榮不足貴、道養晦時文、舒之彌宇宙、卷之不盈分、豈徒山水壽、空與麋鹿群。

また燕昭王

南登碣石臺、遙望黃金臺、邱陵盡喬木、昭王安在哉、霸圖懷已矣、驅馬復歸來。子昂起つて、漢魏の遺軌、重ねて世に出でたので、清の沈德潛などは、其詩に於ける功を偉とし、韓文公の文に於ける功と並び稱してゐるので有る、陳子昂の五言は、斯くのごとく初唐の一異彩で有る、しかし其時を代表したものは王楊盧駱である、沈宋である、王楊盧駱とは、王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王のことで、別に一體を成し、絢爛なる七古の長篇で、事を叙し、情を叙してゐる、彼の有名なる廬の長安古意、駱の帝京篇などを一讀すれば、其全豹を推測することが出来るで有う、沈宋とは、即ち沈佺期、宋之問のことで、此れも亦別に一體を成し、自身に近體を始めたるだけ、多くは應制の長短律詩を以て、莊麗の中に、新意を出し、巧思を運らしてゐるので有る、また此れと同時に杜審言といふのも有つた、李嶠といふのも有つた、張說といふのも有つた、張九齡といふのも有つた、文字の風裁は、各の異つてゐるが、いづれも當時の詩傑。

盛唐といふのは、玄宗、肅宗に涉つた暫くの時代では有るが、今來古往、此時のやうに有名な詩人を出したことはない、従つて一笑一哭、此時のやうに絶調の詩を出したことはない、けだし其詩人に天稟の才氣が有つたからに歸因するでも有うが、また玄宗の朝は、前は開元、後は天寶、初唐の貞觀につぐやうな治平の時も有つた、漁陽の鞞鼓に社稷山河殆んど覆亡しやうとした亂離の時も有つた、其治、其亂に依つて起れる萬般の事變と境遇とは、多感なる詩人の性情を刺激し、或時は喜ばせもした、或時は怒らせもした、哀しましめもした、樂しましめもした、さうして其咨嗟咏嘆を發せしめたる結果で有るにさうもない、さらば此時に出した詩人は誰れで有るかと問ふに、先づ指を屈すべきは、詩といへば、三尺の童子までが直ちに聯想を惹起す杜甫、李白。

杜甫、字は子美、學問は該博で有る、性情は眞摯で有る、一飯未だ嘗て君を忘れないほどの人で有るから、詩も亦至誠の流露したもので、北征の詩、赴奉先縣の詩の

やうな長篇は勿論、前後出塞詩、三吏三別、哀王孫、哀江頭、秋興八首、諸將五首、詠懷古五首など、君を思ひ、國を憂ひ、讀めば覺えず襟を正すやうなもの計、其他の諸作にしたところが、十の八九までは時事に關してゐる、後世の人が目して詩史といつたも亦偶然でない、けだし杜甫の詩は百代を籠絡してゐる、群倫を包括してゐる、沈痛眞摯、體完く、氣厚し、今其例として左に録せんに七古では哀江頭

少陵野老吞聲哭、春日潛行曲江曲、江頭宮殿鎖千門、細柳新蒲爲誰綠、憶昔
 霓旌下南苑、苑中萬物生顏色、昭陽殿裏第一人、同輦隨君侍君側、輦前才
 人帶弓箭、白馬嚼嚼黃金勒、翻身向天仰射雲、一笑正墮雙飛翼、明眸皓齒今
 何在、血汚遊魂歸不得、清渭東流劍閣深、去住彼此無消息、人生有情淚沾臆、
 江水江花豈終極、黃昏胡騎塵滿城、欲往江南望江北。

五古では登慈恩寺塔

高標跨蒼穹、烈風無時休、自非曠士懷、登慈翻百髮、方知衆效力、足可

追○冥○搜○、仰○穿○龍○蛇○窟○、始○出○枝○撐○出○、七○星○在○北○戶○、河○漢○聲○西○流○、羲○和○鞭○白○日○、
 少○吳○行○情○秋○、泰○山○忽○破○碎○、涇○渭○不○可○求○、俯○視○但○一○氣○、焉○能○辨○皇○州○、迴○首○叫○
 虞○舜○、蒼○梧○雲○正○愁○、惜○哉○瑤○池○飲○、日○宴○崑○崙○邱○、黃○鵠○去○不○息○、哀○鳴○何○所○投○、君○看○
 隨○陽○雁○、各○有○稻○梁○謀○。

七言律では登高

風○急○天○高○猿○嘯○衷○、渚○清○沙○白○鳥○飛○迴○、無○邊○落○木○蕭○蕭○下○、不○盡○長○江○滾○滾○來○、萬○里○悲○秋○
 常○作○客○、百○年○多○病○獨○登○臺○、艱○難○苦○恨○繁○霜○鬢○、潦○倒○新○停○濁○酒○杯○。

五言律では岳陽樓

昔○聞○洞○庭○水○、今○上○岳○陽○樓○、吳○楚○東○南○拆○、乾○坤○日○夜○浮○、親○朋○無○一○字○、老○病○有○孤○舟○、
 戎○馬○關○山○北○、憑○軒○涕○泗○流○。

七言絕句では逢李龜年

岐○王○宅○裏○尋○常○見○、崔○九○堂○前○幾○度○聞○、正○是○江○南○好○風○景○、落○花○時○節○又○逢○君○。

五言絕句では復愁

萬○國○尙○戎○馬○、故○園○今○若○何○、昔○歸○相○識○少○、早○已○戰○場○多○。

古體より律、絶の近體は至るまで、華實兼有、一として宜しからぬはなし、所謂る
 百代の師表たるに負かない。

李白字は太白、自ら號して青蓮居士と稱し、人からは謫仙人と呼ばれてゐた、超逸な
 る天才に任せて詩を作るので有るから、詩も亦飄逸奇肆、風に隨ふて變滅する雲の
 やうに、空を行く天馬のやうに、殆んど端睨することが出来ない、その遠別離、蜀
 道離、天姥吟の諸篇も一讀すれば、其一般が窺はるゝ、また李白は絶句に妙を得て
 ゐた、稱して古今獨歩と爲すも亦決して溢美でない、その早發白帝城

朝○辭○白○帝○彩○雲○間○、千○里○江○陵○一○日○還○、兩○岸○猿○聲○啼○不○住○、輕○舟○已○過○萬○重○山○。

此一絶のごときは、其絶句中でも、尤も傑出したもので、千古の絶唱といふべし、
 また游洞庭湖

洞庭西望楚江分、水盡南天不見雲、日落長沙秋色遠、不知何處昂湘君。

峨眉山月歌

峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州、山中答俗人、

問余何意樓碧山、笑而不答心自閒、桃花流水杳然去、別有天地非人間。

聞王昌齡左遷龍標尉、遙有此寄

楊花落盡子規啼、聞說龍標過五溪、我寄秋心與明月、隨風直到夜郎西。

與史郎中飲聽黃鶴樓上吹笛

一爲遷客去長沙、西望長安不見家、黃鶴樓中吹玉笛、江城五月落梅花。

靜夜思

牀前明月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故鄉。

玉階怨

玉階生白露、夜久侵羅襪、却下水晶簾、玲瓏望秋月。

その他、清平調三首、望天門山、蘇臺覽古、越中懷古、黃鶴樓送孟浩然之廣陵、巴陵贈賈舍人の諸篇、一として絶句の上乗なりらぬはなし、胡應麟は、陳子昂の古詩、林拾遺の律詩、李白の絶句、みな此れ天授、人力の及ぶ所でないといつたが、いかにも確評、動かすことは出来ない。

韓文公は李杜を並びして李杜文章在、光焰萬丈長といつた、李と杜とは絶代の詩才で有つたにさうゐるはないが、李の詩は飄逸で有る、杜の詩は豪勁で有る、李の才は天で有る、仙で有る、杜の才は地で有る、聖で有る、其詩才は、斯やうに反對してゐるが、其妙に至つては則ち一で、いづれも千古の大詩宗。

李杜の外に立つて、一家を成したものは王維で有る、王維の詩には一段の悟境がある、けだし禪三昧に得たるもので、理趣を以て勝り其妙味は皆な文字の外に有るやうにおもはるゝ、また王維と同時に孟浩然といふのが有つた、その詩の風格、頗る王

維と相育てゐるので、世に稱して王孟といった、儲光義の詩も亦悠然として塵表に出で、風調殆んど王孟に同じ。

王孟に先後した詩人には高適が有る、岑參が有る、才思は雄縦にして氣力は老健、邊塞の詩、感慨の語などは、殊に金鐵の音を發してゐる、また崔署といふのが有つた、張謂といふのが有つた、賈至といふのが有つた、常建といふのが有つた、品格高し、遠韻多し、詩の正聲で有る、その他、李頎の七律、王昌齡の七絶も亦一代に雄視してゐると稱せられ、今に名高い。

中唐の詩は、穩秀平和が一般本色の語で有つた、劉長卿を始め、所謂大曆十才子に有るまで、一として然らぬはない、びとり韋應物と柳宗元とは、主として陶淵明を學び、冲澹を主とし、盛唐の王維、孟浩然と其軌を齊ふしてゐるといふ點より、後世に王孟章柳と並び稱せられたので有るが、大家ではない、大家と稱して宜いのは韓愈で有る、白居易で有る、けだし韓の詩は雄大で有る、白の詩は暢達で有る、

韓は専ら奇傑を尙んだ、白は一に平易を主とした、韓は學力で詩を作つた、白は才情で詩を作つた、韓は人の言はない所ばかりを言ふので、同列さへ和するものが無かつたさうな、白は人の言ふと思つてゐる所ばかりを言つたので、村婆さへ解したさうな、韓と白とは、飄逸なる李白と沈鬱なる杜甫とのやうに、全然其詩情詩風を殊にしてゐるので有るが、颯然として相對峙し、千歳の下に一大偉觀を成した。

韓愈、字は退之、身を挺して古文辭を唱へ、八代の衰を起して、居然文章の正宗と仰がれてゐることは、誰れも知つてゐるが、其詩名は、却て其文名のために掩ふはれて、我邦人間には、纔かに雲横秦嶺一家何在、馬擁藍關馬不前的の一律が傳唱されおるくらゐなことでは有る、しかし韓愈は、詩に於ても亦大家たるに愧ぢない、中にも其述作に係る元和聖德詩などは、中唐中の獨壇で、典重峭奥の致、尤も賞すべし、南山の詩は、杜甫の北征と並び稱せられた五古長篇の最で、叙事尤も妙、今左に其一例として汴州亂の二章

汴州城門朝不開、天狗墮地聲如雷、健兒爭誇殺留後、連屋累棟燒成灰、諸侯咫尺不能救、孤士何者自興哀。
 母從子走者爲誰、大夫人留後見、昨日乘車騎大馬、坐者起趨垂者下、廟堂不肯用干戈、嗚呼奈汝母子何。

漢魏に擬せないで、自然に古韻が有る、此れ韓愈の本色かとおもはるゝ、之れを惟ふに、詩は李杜に至つて極つてゐる、天下以て加ふるなしとしてゐるのに、韓愈は其後に生れて其徑路に由らないで、颯然卓立、此れ殊に尋常の及ぶべきでない。
 白居易、字は樂天、樂天が李杜の後に生れて、優に一頭地を出した所以は、全く平易を以て主と爲したからにさうゐない、しかし杜甫には頗る私淑してゐた所が有つたらしい、其一生に作る所、三千八百四十篇餘、五古の長篇には遊悟眞寺の詩が有る、滾滾一千三百字、叙事の名篇には長恨歌が有る、琵琶行が有る、我邦でも、三尺の童子までが能く傳誦してゐるから、茲に紹介する必要もあるまい、けだし樂天

は自家の詩を諷諭、閒適、感傷の三體に分ち、重を諷諭詩において、其本領を發揮し、畢生の心血を灑いた、秦中吟十首、新樂府などが全くソレで有る、また其新樂府といふのは、古樂府に對して立名し、樂府に一生面を開いたもので、彼の有名な新豐折臂翁の篇なども亦その一で有る、之れを要するに樂天の詩は我邦にも夙に流傳してゐるから余は茲に録せない。

韓愈は孟郊等と聯句を中興した、白樂天は元稹と次韻を創成した、元と白とは本と同調で、其唱和の盛んなること古今に絶してゐるので、後世稱して元白といつた、また韓の門下に張籍といふのが有る、李賀といふのが有る、張は王建と樂府で知られ、李は盧同と鬼體で知らる、猶ほ白樂天と唱和せるものでは、元稹の外に劉禹錫といふのが有つた、いづれも中唐中で有名な詩人。

晩唐に在つては李義山、杜樊川を以て第一流におかねばなるまい、李は杜子美を學んで、跌蕩空靈の中に、一種清婉な處が有る、杜は才思横縦、後世、子美にわかつ

ために小杜と呼んだ、また揚州の狂杜牧といふので、詩家以外のものにまで其名を知られてゐるので有る、つぎが許仲誨、仲誨の詩は格調で取らねばならぬ、つぎが温飛卿、飛卿は文字の新麗なる處で取らねばならぬ、皮日休、陸龜蒙は實に四唐のしんがりで、其詩は孤峭、羅隱、韋杜で五代に入つた、しかし愈よ下つて愈よ卑くし、第一、詩に氣力がない。

詩は、唐末より五代に至り、纖佻薄弱に流れて、復た觀るに足るものなし、宋の初に至つて西崑體といふのが世に行はれた、西崑體は楊億、劉大年などの一輩流が、文字の鮮麗ならんことを力め、専ら李義山を學んだまではよかつたが、其弊は徒らにみばの宜い字句ばかりを剪裁し、我れ能く義山に擬したりなど自惚るゝやうな始末になつたので有る、而かも此體は當時を風靡したので有るさうな、しかし中には時習に染まない林和靖、魏野のやうな作家も有つたけれど、規模が小さい、殊に其身は隱者で、其詩のごときも朝吟、暮詠、心を慰むるだけに止め、詩壇の表面に立た

なかつたから、今詩學史に特筆するだけのこともない、しかるに歐陽修は出た、修は文章にでも、詩にでも、一生の心力を復古に注いで、其學問と、識見とで一枝の健筆を馳使したので、唯だ文章に彼れほど成功したばかりでない、詩に於ても亦長篇大作、觀るに足るもの頗る多し、固より宋朝の詩豪たるにさうゐはないが、其詩の風格は、さながら韓文公で、別に一格を成すことは出来なかつた、歐陽修と同時代に生れて、略ぼ其名を齊ふしたものに梅聖俞といふのが有つた、蘇舜欽といふのが有つた、梅聖俞の詩思は精微で、能く至つてゐるが、全體よりいへば蘇舜欽には及ばない、蘇舜欽は、酒の肴に漢書を讀んだといふくらゐに、風變りの男で有つたから、筆を下すことにも豪俊で、其詩には霸氣が有る、梅聖俞に較べて詩名の高く、今に不朽で有るものも、全く此れがため有う、また彼の新政で有名な王安石も作家で有つた、當時執拗夫と呼ばれたが、いやしくも人と合はない點も多いが、鍛鍊を以て知られ、後世人口に膾炙してゐる詩も亦頗る多い。

歐陽修といひ、王安石といひ、梅聖俞といひ、蘇舜欽といひ、いづれも作家たるに負かないが、神明變化の功を逞ふたものは、續いて出でた蘇軾で有る。

蘇軾、字は子瞻、東坡と號す、其器識學問の政治文章に見はれ、雄名の赫赫たるは、誰れ一人知らぬものはないが、詩も亦杜子美、韓退之以後の作家で、獨立千古、一人一代の詩ではない、その神女廟のごとき、石鼓歌のごとき、いづれも人口に膾炙してゐるもので有る、中にも奇氣の横絶して、別に自ら一格を闢いたのは、郭祥正家、醉畫竹石壁上、郭作詩爲謝、且遺二古銅劍と題する一篇

空腸得酒芒角出、肝肺槎牙生竹石、森然欲作不可回、吐向君家雪色壁、平生好詩仍好畫、書牆瀆壁長遭罵、不嗔不罵喜有餘、世間誰復如君者、一雙銅劍秋水光、兩首新詩爭劍芒、劍在牀頭詩在手、不知誰作蛟龍吼、絶句も亦別に自ら調を成し、妙なるものが多い、其澄邁驛通潮閣

餘生欲老海南村、帝遣巫陽招我魂、杳杳天低鶻沒處、青山一髮是中原。

望湖樓醉書

黑雲翻墨未遮山、白雨跳珠亂入船、卷地風來忽吹散、望湖樓下水如天。

題李世南所畫秋景

野水參差落漲痕、疎林欹側出霜痕、扁舟一棹歸何處、家在江南黃葉村。

蓮崇春江晚景

竹外桃花三兩枝、春江水暖鴨先知、蒹葭滿地蘆芽短、正是河豚欲上時。

之れを惟ふに東波には、唯だ器識學問ばかりでなく、空前絶後の才が有つた、殊に自家の境遇は、一喜一憂の波瀾に浮沈してゐたので、感情の變化とよもに口を衝いて出づるものは篇を成した、章を成した、議論も有る、譬喩も有る、莊語も有る、諧語も有る、直叙、側寫、長吟、短咏、萬解の泉の地を釋ばずして湧出るやうに、形に隨ひ、物に賦して、少しも遲滯する所がない、げたし唐人は詩に於て一格を開いた、處か宋人は後に、一種の氣概、前人の牙後を襲ふて満足するやうなことが

出来ない、別に一新機軸を出すことに力めた、其結果として縦横自在、意の往く所に随つて、確かに其用墨を新たにしたので有るが、一得あれば一失、宋人の詩には唐詩のやうに含蓄が少い、蘇東坡も亦ソレで、一つとして唐詩に類したものはない、固より宋調にはさうゐないが、別に自ら一家の調を成してゐるので、他の宋詩のやうに読んで嫌味を感じない。

蘇東坡と時を同ふして黄山谷といふのが有つた、所謂る江西派の祖で、蘇東坡には師として事へてゐたが、東坡は友とし、常に堆賞した、一凡語を着けない、一平語を吐かない、後人並びに稱して、蘇黃といふ、その他、陳無已、秦觀なども、當時屈指の詩人。

趙宋南渡の後に在て斯道の大家は陸游で有る、陸遊、字は務觀、號は放翁、地覆天翻の際に處した身生の境遇より、學問、情性に至るまで、唐の杜子美に近いものが多い、作る所の詩、凡そ四萬首、半ば時事を慷慨し、半ば田園を歌詠し、大は大で

妙、小は小で妙、篇汗の多いだけ、中に瑕も見ゆるが、龍泉大阿たるに妨げなし、

風雨中望峽口諸山奇甚、戲作短歌

白鹽赤甲天下雄、拔地突兀摩蒼穹、凜然猛士撫長劍、空有豪健無雄容、不令氣象少停瀆、常恨天地無全功、今朝忽悟始歎息、妙處元在煙雨中、大陰殺氣橫、慘憺、元化變態含空濛、正如奇材遇事見、平日乃與常人同、安得朱樓高百尺、看此疾雨吹橫風。

此れ短篇では有るが、横出せる奇思、放翁が大作手として別に一格を成した一般が見らるゝので有る、また其五七律中にも取るべきもの殊に多し、今煩を避けて佳句二三を摘まんに。

四海一家天歷數、兩河百郡宋山川。
山重水復疑無路、柳暗花明又一村。
小樓一夜聽春雨、深巷明朝賣杏花。

故人不見暮雲合、客子欲歸春水生。
近傳下詔通言路、已卜餘年見太平。

絶句としては、冬初出遊

蹇驢渺渺涉煙津、十里山村發興新、青旂酒家黃葉寺、相逢俱是畫中人。

建安遺興

建安酒薄客愁濃、除却哦詩事事慵、不許今年頭不白、城樓殘月寺樓鐘。

鄰曲有未飯被追入郭者、惘愁有作

春得香杭摘綠葵、縣符急急不容炊、君王日御金華殿、誰誦周家七月詩。

劍川道中遇微雨

衣上征塵雜酒痕、遠遊無處不消魂、此身合是詩人未、細雨騎驢入劍門。

劍門の詩、ことに風神多し、また其絶筆、示兒の詩

死去元知萬事空、但悲不見九州同、王師北定中原日、家祭無忘告乃翁。

陸遊は何處までも尋常の詩人でない。

陸遊と時代を同ふして、范石湖といふのが有つた、楊誠齋といふのが有つた、餘り巧めやうしたので、詩格が下つて思構が淺い、後人或は蘇陸と併せ稱して宋の四家などいふものも有るが、余は取らない、しかし律絶の中には、清俊の處のないでもない、之れを外にしては劉克莊と方秋厓が名高い、尤延之、蕭東夫、姜白石なども、亦南渡以後の作手で有つた、降つて宋末に至れば、文天祥は、流石に、滿腹の忠誠、身を殺して國恩に報ゆるほどの名臣だけ有つて、其詩も亦雄偉を以て推されてゐる、もし夫れ眞山民に至つて、其高潔の意志は別として、文字の間、猶ほ巧に衍ふのきらひが有るから、余は名ほどのものではないと思ふ、之れを要するに宋人の詩は、多くは理に偏して趣味に貧しい、風韻に乏しい。

しかし茲に一言しておかねばならぬのは詞で有る、詞とは所謂る詩餘で有る、宋の時代には一般に此詩餘が流行した、而かも後世から、漢文、唐詩、宋詞、元曲と呼

ばるゝまでに名作も出た、作家も出た、婉麗芊綿の中に、情を寫して微を穿ち、細を鑿ち、穩に、秀に、趣味尤も多し、前段に列擧したる歐陽修、王安名、蘇軾、陸遊を始め、歴代の詩家のコレを作らないものはなかつたので有る。

宋の時に、金といふ國が有つたが、宋に先つて、元の爲めに亡ぼされたことは、誰れも知つてゐるで有う、その金にも、趙秉文、王庭筠など呼ぶ詩人がゐたが、茲に論するだけのこともない、しかし元好問は東坡、放翁以後の一作家で有つた。

元好問、字は裕之、號は遺山、金の末造に生れ、元の世まで生きてゐたので有る、蘇東坡、陸放翁のやうに學問はなかつた、才はなかつた、従つて家數も大きくはないが、氣象が豪健にあつて、深く丘墟麥秀の痛を抱いてゐるので、無限の感慨は發して詩と爲り、詩の廉悍沈摯の處などは、確かに東坡、放翁に勝つてゐること、其作る所の放言、送李參軍北上等の諸篇は、遺山の面目が想見さるゝので有る、中にも七言律は殊に悲壯で、車駕遁入歸德、出京等の諸篇は、いづれも字の血ならぬ

はない、句の涙ならぬはない。

元代の詩は、一般に輕揚にして穢艶にあるかはりに規模が小さい、今其作家を列擧すれば國初に趙孟頫といふのが有つた、所謂る子昂の書といつて筆札に妙を得てゐる人で有る、もと宋の王孫で、元に降つたもので有るから、人物は取るに足りないが、其出身が賤しくないだけ、詩も亦儒雅風流、少しも迫つた所がない、元の盛時には、虞楊范揭の四家が出て、虞の名は集、楊の名は載、范の名は樽、揭の名は僕斯、詩品相敵せるが、中にも虞集は一段飛抜けてゐるやうにおもはるゝ、其他、吳淵穎の兀幕、廼易之の流利、薩天錫の清艶倪瓚の古淡いづれも多少の名はあるが、矢張り規模が小さい、尤も元末の楊鐵厓ばかりは別調で有つた、其詩は唐の二李、即ち李長吉と李義山より出で、樂府と竹枝が長處で、熾んに神魂をとらかすやうな語を吐いたから、文妖とまで譏られたので有るが、横逸せる才情は、他家の及ぶ所でない。

けだし元季の時は、一般に詞華を尙んで靡蔓に流れた、明に入つて、此風を一洗したものが劉基で有る、高啓で有る、此二人は實に明代詩賦の先聲とせねばならない、劉基は明の開國の功臣で、其人物の偉大なるだけ、詩も亦杜韓を規撫して、能く高に、能く古に、骨力自ら卓然としてゐたので有るが、高啓には及ばない。

高啓字は委廸、號して青邱といふ、明代の巨擘で、才氣は超邁で有つた、音節は響亮で有つた、唐人を宗としてゐたけれども、遠きは漢魏六朝、近きは宋の詩家にまで出入して自ら新意を出し、一たび筆に涉れば博大な氣象が現はるゝ、その面目の一斑を知らんと欲するものは、其作たる所の長篇青邱子歌を讀むがよい、また青邱は律詩に巧みで有つた、其一例を擧ぐれば送謝恭の五言律

涼風起江海、萬樹盡秋聲、搖落豈堪別、躊躇空復情、帆過京口渡、砧響石頭城、爲客歸宜早、高堂白髮生

謁甫詞の七律

衣冠寂寞半塵絲、想見江湖獨臥時、遁跡虛煩明主詔、感懷猶賦散人詩、釣魚船去雲迷浦、鬪鴨閑空草滿池、芳藻一杯誰爲奠、鼓聲只到水神祠

その他、大樹無枝向北風、月明林下美人來などの詩は、誰れ知らぬものはない、絶句は長處でなかつたらしいが、観るべきものは猶ほ多し、其逢吳秀才、復送歸江上江上停舟問客蹤、亂前相別亂餘逢、暫時握手還分手、暮雨南陵水寺鐘

その頃、楊基といふのが有つて、遒麗な詩を作つた、張羽といふのが有つて、雄拔な詩を作つた、徐賁といふのが有つて、清潤な詩を作つた、世並び稱して高楊張徐といふけれども、高青邱は數段を飛抜けた作家で、とても較べものにならない、イナ後出の詩人に李夢陽、何大復などいふ大家もたけれど、詩の純粹中正を論ずれば、朱明一代の涉つて一青邱を取るより外はない。

明の永樂以降は、一時専ら臺閣の詩が流行した、李東陽も亦大家である、大雅の音を發し、清澈の聲を出して休明の運を鼓吹するの外、擬古樂府といふのを作つて、

忠孝義烈のことは勿論、千般の奇聞逸事を取り、一種の文字で歌詠したので有る、次で李夢陽は出た、何大復は出た。李夢陽字は献吉、作る所の詩は、杜少陵を學んで雄渾魁偉、中に一種廉悍の氣の有る處が此人の獨擅の長處で、其格調を正高にするために、唐以後の書は讀まない、唐以後の事は典故に取らないといふのが此人のたてはで有つた、其七言古詩は、殊に力を用ゐたものと見え、縦横變化限りなし、石將軍戰場歌などを一讀すれば、其全鼎が判るで有う、また近體は古法に拘らないで作つたやうにおもはるゝ、何大復も亦李夢陽に劣らぬ作家で有つた、豊富なる才を以て魁麗なる文字を驅使し、李夢陽と相對峙して、一世を搖撼したので、後人並び稱して李何といふ、李何には及ばないが、除昌穀といふものも亦尋常の手腕でない、猶ほ同時に吳體といふのが有つた、邊貢といふのが有つた、王子衡といふのが有つた、康對山といふのが有つた、李、何、除を加へて七才子といつたが、其實質は李何に及ぶべくもない、李何一たび

起つて復古を唱導し、天下を風靡してより、一時風騷の士は之に雷同したる弊として、所謂る英雄人を欺くの語を爲して自ら喜ぶやうなものが澤山に出た、嘉靖七子、即ち李于麟、王元美、謝茂榛、梁有譽、宗臣、徐中行、吳國倫なども亦ソレで、前の七子に對して後七才子と稱し、此七子に對して、前の七子は前七才子と呼ばるゝことに爲つた、之れを要するに後七才子の詩は、唯だ謝茂榛が少し別調で有るばかりで、多くは優孟の衣冠、徒らに唐詩の面貌を襲ひ、語句を剝脱して自家の詩を飾つたまでのことで、殆んど取るに足らない、また力量も前七才子には及ばない。此嘉靖七子に少し後れて徐渭といふのが出たが、觀るに足りない、續て袁氏の兄弟が出た、袁氏の兄弟といふのは宗道、宏道で、中にも宏道は七子の流したる弊害を看破し、之れを一洗するがために、性靈を唱へ、唐は唐、宋は宋、詩は時代の變遷とともに變遷するもので、字句の剽竊、風格の襲踏は悪いといふ議論を立てた、議論は至極御尤で、見識も人より高きこと一等では有るが、さて自家の詩は如何といふに、

鄙俚に傾き、諧謔に流れたので、革新の志を達することの出来ないばかりか、後人の笑を招いたので有る、しかし詩は此時より一變し、さらに變じて、鐘伯敬、譚友夏が亡國の昔を爲り、陳仲醇、程孟陽に至つて明詩は振はない。明末の詩風は、一般に僻澁でなければ穢佻で有つたが、ひとり錢謙益のみは、夙に其弊を看破し、之れが革新に志したので有る、しかし未だ幾ならずして國亡んだので、清に入つて清詩の祖と爲つた、けだし錢謙益の學問は該博で有つた、其作る所の詩は、力を蘇東坡に得て、氣象雄偉、卓然として時流に拔出してゐるので有る、唯だ其失節の臣といふので、後世或は人を以て言をまですつるものも頗る多いが、詩に於ては大家たるにさうゐない、吳梅村も亦明末に於てすでに名を成してゐたもので、國亡んで、身殉することの出来なかつたのは、一に母あるがためで有つたから同じく清朝に仕へはしたもので、唯だ一身の禍福をのみ計較して失節の臣と爲つた錢謙益と同日に貳心傳に列するのは酷で有るといはねばならない、其贈蘇崑生の詩

樓船諸將碧油幢、一片降旗出九江、獨有龜年臥吹笛、暗潮打沈泣蓬窓、西興哀曲夜深聞、絕似南朝汪水雲、回看岳侯墳下路、亂山何處葬將軍。

亡國の臣、感慨想ふべし、その他此生所_レ缺止一死、死生總負侯羸諾などいふ句を讀まば、其心事が知らるゝので有る、また其古詩は元白記事の體より脱化して初唐に參してゐる、中にも永和宮詞のごときは、一篇七百五十六言、明の末、崇禎皇帝の寵妃田貴妃の事を叙し、萬歲山の崩御の顛末にまで及ぼしたるもので、情も有れば、韻も有る、華も有れば、實も有る、白樂天の長恨歌に較べても、決して劣つてはゐない、その詩

楊州明月杜陵花、夾道香塵迎麗華、舊宅江都飛燕井、新侯關內武安家、雅步纖腰初召入、鈿合金釵定情日、豐容盛鬋固無雙、蹴鞠彈碁復第一、上林花鳥寫生綃、禁本鍾王點素毫、楊柳風微春試馬、梧桐露冷夜吹簫、君王宵旰無歡思、宮門夜半傳封事、玉几金床少晏眠、陳娥衛艷誰頻侍、貴妃明慧獨承恩、宜笑

宜○愁○慰○至○尊○、皓○齒○不○呈○微○索○問○、娥○眉○欲○蹙○又○温○存○、本○朝○家○法○修○清○醜○、房○帷○久○
 絕○珍○奇○薦○、勅○使○惟○追○陽○羨○茶○、內○人○數○減○昭○陽○膳○、維○陽○服○製○擅○江○南○、小○閣○爐○煙○沈○水○
 含○、私○買○瓊○花○新○樣○錦○、自○修○水○遞○進○黃○柑○、中○宮○謂○得○君○王○意○、銀○銀○不○妬○温○成○貴○、
 早○日○艱○難○護○大○家○、比○來○歡○笑○同○良○娣○、奉○使○龍○樓○買○佩○蘭○、往○還○偶○失○兩○宮○歡○、雖○
 云○樊○姬○能○辭○令○、欲○得○昭○儀○喜○怒○難○、綠○娣○小○字○書○成○印○、瓊○函○自○署○充○華○進○、請○
 罪○長○教○聖○主○憐○、含○辭○欲○得○君○王○慍○、君○王○內○顧○恤○傾○城○、故○劍○還○存○敵○體○恩○、手○
 詔○玉○人○蒙○詰○問○、自○來○階○下○拭○啼○痕○、外○家○官○拜○金○吾○尉○、平○生○游○俠○多○輕○利○、縛○客○
 因○催○博○進○錢○、當○筵○便○殺○強○拳○伎○、班○姬○才○調○左○姬○賢○、霍○氏○驕○奢○竇○氏○專○、涕○泣○微○聞○椒○
 殿○詔○、笑○譚○豪○奪○霸○陵○田○、有○司○奏○削○將○軍○俸○、貴○人○冷○落○宮○車○夢○、永○巷○傳○聞○去○玩○花○、
 景○和○門○裡○誰○倍○從○、天○顏○不○憚○侍○人○愁○、後○促○黃○門○召○共○遊○、初○勸○官○家○伴○不○應○、玉○
 車○早○到○殿○西○頭○、兩○王○最○小○牽○衣○戲○、長○者○讀○書○少○者○涕○、聞○道○群○臣○舉○定○陶○、獨○將○多○
 病○燐○如○意○、豈○有○神○君○語○帳○中○、漫○云○王○母○降○離○宮○、巫○陽○莫○救○蒼○舒○恨○、金○鎖○彫○殘○

玉○筋○紅○、從○此○君○王○慘○不○樂○、叢○臺○置○酒○風○蕭○索○、已○報○河○南○失○數○州○、况○輕○小○子○傷○零○
 落○、貴○妃○瘦○損○坐○匡○牀○、慵○髻○啼○眉○掩○洞○房○、葦○蕩○湯○温○水○簾○冷○、荔○支○漿○熱○王○魚○涼○、病○
 不○經○秋○淚○沾○臆○、裴○回○自○絕○君○王○鄰○、苦○沒○長○門○有○夢○歸○、花○飛○寒○食○應○相○憶○、玉○
 匣○珠○襦○啓○便○房○、薤○歌○無○異○葬○同○昌○、君○王○欲○製○哀○蟬○賦○、誅○筆○詞○臣○有○謝○莊○、頭○白○
 宮○娥○暗○嚙○蹙○、庸○知○朝○露○非○爲○福○、宮○草○明○年○戰○血○腥○、當○時○莫○向○西○陵○哭○、窮○泉○相○
 見○痛○倉○黃○、還○向○官○家○向○永○王○、幸○免○玉○環○逢○喪○亂○、不○須○銅○雀○怨○興○亡○、自○古○蒙○
 華○如○轉○轂○、武○安○若○在○憂○家○族○、愛○子○雖○添○北○渚○愁○、外○家○已○葬○驪○山○足○、夜○雨○椒○房○陰○
 火○青○、杜○鵲○啼○血○躍○龍○門○、漢○家○伏○后○知○同○恨○、止○少○當○年○一○貴○人○、碧○殿○淒○涼○新○木○拱○、
 行○人○尙○識○昭○儀○塚○、麥○飯○冬○青○問○茂○陵○、斜○陽○蔓○草○埋○殘○壠○、昭○邱○松○檟○北○風○哀○、南○內○春○
 深○擁○夜○來○、莫○奏○霓裳天寶曲、景陽宮井落秋槐。

吳梅村、名は偉業、字は駿公、梅村は其號で有る、沈博絶麗の才を擁いて、華瞻典實の詞を作つた、殊に其身生が亡國の恨を抱いてゐるので、中に無限の感慨を満し

てゐる、錢謙益より一頭地を抜いた作家といはねばならない、龔鼎孳も亦當時の作家で、錢吳と並び稱せられて、江左三大家の目が有る、聞けば千言立ろに成るやうな才で有つたそうだが、其詩格よりすれば、錢吳と三分鼎立の勢を取ることには兎ても出来ない。

施愚山の詩は、穩秀で有る清幽で有る、中にも五言律が長處で、其妙なるものは古詩十九首に比して遜色がないとの評が有る、宋荔裳の詩は、晚唐を師として、晚唐の氣味がない、蒼蒼たり、莽莽たり、並び稱して南施北宋といふ。

ついで起つたのが王士正で有る、王士正、字は貽上、號は漁洋山人、才力が薄いから李杜韓蘇のやうな排幕の氣はないが、神韻に富んでゐるから、句句清雅で、王孟韋柳に勝つた處も亦頗る多い、而かも絶句が尤も長處で人或は李供奉、王龍標以後の一人とまで推賞してゐるものさへ有る、その露筋詞

翠羽明璫尚儼然、湖雲祠樹碧于煙、行人繫纜月初墜、門外野風開白蓮。

靈譯夫人祠

朝氣江東久寂寥、永安宮殿草蕭蕭、渾將國家無窮恨、分付潯陽上下潮。

樊圻畫

蘆荻無花秋水長、澹雲微雨似瀟湘、雁聲搖落孤舟遠、何處青山是岳陽。

秦淮雜詩

十里清淮水蔚藍、板橋斜日柳毵毵、栖鴉流水空蕭瑟、不見題詩紀阿男。

冶春絕句

東風花事到江城、早有人家呼賣餠、他日相思忘不得、平山堂下五清明。

眞州絕句

江干多是釣人居、柳陌菱塘一帶疎、好是日斜風定後、半江紅樹賣鱸魚。

之れを要するに漁洋の詩は神韻を主としたが、弊の生ずる所は朦朧となる調子が有るので、之れを譏つたものも有る、しかし居然たる大家にはさうゐない。

朱竹垞も亦名家で有つた、學問は博い、才は多い、才と學とに任せ、篇を連ね、章を累ね、百言千語、滾滾として揮灑したので、貪多の譏を受けたので有るが、跌宕なるものは杜甫、韓愈に出で、冷峭なるものは皮日休、陸龜蒙に出で、往くとして可ならぬはない、此朱竹垞と王漁洋を訕つて、自ら地歩を占めたるものは趙秋谷、秋谷は傲慢な男で有つたゞけ、詩も亦前人の唾殘を拾はない、繼いで出たのが查初白、初白は蘇陸を稱へ、白描を以て知られてゐるので有る。

以上に列叙する所の諸家が、清初に於ける重なる詩人で有る、後の論者或は錢吳王朱を推して清初の四家と爲すものも有れば、或は王朱の二家に、施宋趙查を加へて六家と爲すものも有る、錢吳のやうな大家を何故に其中から除くかといふに、ソハ貳臣傳中の人物だからとのこと、清朝人の心としては怪むに足らないが、所謂人を以て言をすつるもので余輩は取らない。

乾隆年間に名を擅まゝにしたのは袁隨園で有る、唯だ博學鴻詞で有つたばかりでな

い、非常な天才で有つたので、天下は靡然として之れに従つた、而かも其詩の主とする所は性靈で、人の性情を發揮すれば、ソレで澤山といふのが主張で有つた、趙甌北、蔣麟園の詩は、其風格は相異にしてゐるが、いづれも史筆から出たもので、趙に較ぶれば、蔣の方が少し優つてゐるやうにおもはるゝ、後世の稱して乾隆三家といふのは、即ち此袁と趙と蔣とを並び稱したもので有る、三家の先輩として沈愚山といふのが有つた、愚山に次いで隨園に對抗し、一旗幟を翻したものに王昶といふが有つた、また詩傑。

此を外にし清朝の作家は尤西堂、錢鐸石、陳迦陵、黃辛田、厲樊榭、嚴海珊、吳澹川、吳穀人、張船山、陳碧城、吳蘭雪、郭頻伽などが其主なるもので有る、もし夫れ道光、嘉慶、同治を経て、光緒の今日に至つては、作家と稱すべきもの殆んどない、之れを概するに今日支那の地では、詩すでに亡んだといつてよろしい、さらば我日

本での詩運は如何なる有様で有るかといふに、ソレを述ぶるには、其順序として我國の詩史を述べねばならない。

我國の詩は、天智天皇の朝、大友皇子に始つてゐる、その後の作家としては、嵯峨天皇、菅原道真、小野篁、大江匡衡など有つたが、其詩には人の眼を驚かすほどのものもない、降つて足利氏の時、五山の僧に周興、義堂、絶海、良佐といふのが有つて、當時四傑と稱せられてゐた、中にも絶海と義堂とは尤も詩才が有つたらしい、後ち藤原惺窩、林羅山の出づるに及びて、文教の漸く興ると同時に、詩も亦發達し、木下順庵を始め、其門下の新井白石、室鳩巢、祇園南海、雨森芳州、三宅觀欄など、いづれも名を一時に擡まふにしたので有る、而かも其作れる所に就て之れを觀るに一般に唐詩を學んだものゝやうにおもはるゝ、また梁田悅巖、秋山玉山も、當時の詩人中で有名なもので、頼山陽は、木門の白石、南海を加へて正徳の四家といつた、亦その手腕を想ふべし。

物徂徠は、李王の古文辭を貴ぶるゝもに、詩も亦所謂る明の後七子を推賞した、而かも其門下の俊才たる服部南部、大宰春臺、山縣周南、平野金華の徒が、師の好尚を承けて一意に格調の詩を唱へたので、天下ために風靡し、口でこそ唐詩とはいつてゐるものゝ、其實質は、一として明詩ならぬはない。

後ち天明年間に至りて山本北山出で、袁中郎が性靈の説を唱道し、從來の明詩を偽唐詩として、極力排力したので、天下は復た彼れを棄てゝ此れに嚮ひ、宋詩を宗とするやうになつた、之れを願ふに徳川氏時代の前半期は明詩流行の時代で有る、また其後半期は宋詩流行の時代といはねばならない。

北山と時を同ふしての名家には大窪詩佛といふのが有つた、菊池五山といふのが有つた、柏如亭といふのが有つた、市川寛齋といふのが有つた、釋六如といふのが有つた、また別に一旗幟を翻へして唐詩を唱道したものでは葛西因是、皆川淇園。

文化、文政の頃には作家林のごとし、山陽の菅茶山、頼山陽、九州の廣瀬澹窓など

が尤も名高い、ソレに少し後れて出たのが梁川星巖で有る、星巖も初めは山本北山の門に遊び、詩佛、如亭の後に追隨してゐたから、一時宋詩にのみ沈溺してゐたので有るが、因是の説を聞くに及んで、大に唐詩に歸依し、後さらに清人の詩中でも、尤も浙西六家に依り、玉池吟社を設けて後進の子弟を誘掖し、以て明治詩運の基礎をくつたので有る。

明治の作家では、森春濤、大沼枕山、小野湖山、岡本黄石、江馬天江、鱸松塘、村上佛山、僧五岳、北川雲沼、鷺津毅堂、神波即山、丹波花南、伊藤聽秋、長三州、向山黄村、その他猶ほ多し、而かも此等諸家の中には、淡窓の流を汲めるものも亦多いが、多半は星巖門下の才子で、各の旗幟を翻へし、以て今日に至つたことは、誰れ知らぬものはない。

之れを要するに我日本にも、亦多數の作家を出したので有る、しかも其定數よりいへば、李、杜、韓、白、蘇、陸は勿論、王孟韋柳だけのものさへない、聞けば現今

佛敎大乘の奥義は、印度にもない、支那にもない、唯だ我日本に存してゐるばかりで有るさうな、佛敎すでに斯くのごとし、詩ひとり其起源の地を凌がれぬ道理はあ

るまい、我日本の詩はコレからだ、少年才子のもの加餐一番するがよい。

第三 詩の流、詩の派

其年號及び時代に依て命ぜるもの。 人名を以て命ぜるもの。 選體を以て命ぜるもの。

佛の宗旨に、禪宗が有る、天台宗が有る、眞宗が有る、眞言宗が有る、而して其禪宗の中に、さらに曹洞が有る、臨濟が有る、黃蘗が有るやうに、詩にも亦流派が有る、けだし詩は性情を道ふなりで、其本質は、みな一に歸するもので有るが、人人其心の同じからざるは、其面の同じからざるがごとし、發する所のものに、雄偉なものも、清婉なものも有る、後の調を同ふするもの、又は好向するものが、各の起つて相繼承するからには、其流派の出来るも、亦勢の免れない所で、詩の起つてより茲に三千年、ソレが非常に多いのも亦異しむを須ひない、其年號及び時代に依て命ずるものは。

建安體 漢末の年號で、魏の曹植父子及び鄴中七子の詩

黃初體 魏の年號、建安と相接してゐる、體は同じ

正始體 魏の年號で、阮籍、嵇康諸子の詩

大康體 晋の年號、左思、潘岳、二張二陸諸子の詩

元嘉體 宋の年號、顔鮑謝諸子の詩

永明體 齊の年號、齊朝諸家の詩

齊梁體 齊梁兩朝諸家の詩

南北朝體 魏周を通じて言つたもので、齊梁體に同じ

唐初體 唐の初、陳隋を併せて之れをいふ

盛唐體 景雲以後、開元天寶諸家の詩

大歷體 大歷十才子の詩

元和體 元白諸子の詩

晚唐體

元祐體 蘇黃陳諸子の詩
江西派 黄山谷
人名を以て命じたものでは

蘇李體 蘇武と李陵

曹劉體 曹子建と劉公幹

陶體 陶淵明の詩

謝體 謝靈運の詩

徐庾體 徐陵と庾信

沈宋體 沈佺期と宋之間

陳拾遺體 陳子昂の詩

王楊盧駱體 王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王

張曲江體 張九齡

少陵體 杜甫

太白體 李白

高逵夫體 高適の詩

孟浩然體

岑嘉州體 岑參の詩

王右丞體 王維

韋蘇州體 韋應物

韓昌黎體

柳子厚體

韋柳體 韋應物と柳子厚

李長吉體 李賀

李商隱體 即ち西崑派

盧同體

白樂天體

元白體 元微之と白樂天

杜牧之體

張籍王建體 樂府の體同じ

賈浪仙體 賈島

孟東野體 孟郊

杜荀鶴體

東坡體 蘇東坡

山谷體 黃山谷

后山體 陳后山

王荊公體 王安石

邵康節體

陳簡齋體

楊誠齋體

高楊張徐體 明初の四家

何李體 何景明と李夢陽

七才子體 前七子と後七子

李長沙體 李東陽

袁徐體 袁中郎と徐文長

また選體で名を命じたものは

選體 文選

栢梁體 演の武帝が栢梁臺の聯句、七言にして毎句押韻

玉臺體 漢魏六朝の詩

宮體 梁の簡文の詩

西崑體 李義山を主としてはゐるが、温飛卿及び宋の楊劉諸家も亦

香奩體 韓偓の詩、裾裙脂粉の語ならざるはなし

以上に列開する所の諸體の如何なるもので有るかは、前段詩の起原と詩の變遷と題する一章を讀めば、大略は了解することが出来るとおもふ。
また此等諸體の外、作法に依つて體を分つたものも有るけれど、ツハ體といふよりは寧ろ格と稱すべきもので有るから、後段絶句、律、古詩の部に於て詳論することにして、今こゝには述べない。

第四 詩學初歩の概念

詩は彫蟲の末技でない。 詩國の亂臣賊子。 詩界の革新は後進の子弟を待つ。 良師を擇ぶこと。 詩を學ぶものは汎く學問せねばならない。 杜詩の集めて大成する所以。 詩集では如何なるものを讀むが好いか。 蘇東坡の説。 嚴儀卿の説。 初學の徒に推擧する詩集、初學に適當なる韻本。 諸記する覺悟で讀すべし。 多作。 辭する所は潔情美情の増進。 いかにか金聲玉振の文字を並べても詩人でない。

今人ばかりでない、古人の中にも亦或は詩を目して彫蟲の末技なごゝ稱したのも有るやうだが、詩は決してソクならぬものではない。
すでに劈頭第一、詩と題する一篇中にも、精しく論じておいたやうに、詩は誠とに禮儀の本源、即ち潔情、美情を増進し、徳性を涵養する所以のもので有る、心學で有る、しかるを唯だ其形而上にあらはるゝ平仄と韻字とを指し、一般に詩を稱して紛々たる末技と爲すがときは、到底其輩が淺聞寡見にして、唯だ文學の字を知る、

心學あるを知らぬからのことで、彼の露店に算木と筮竹とを並べてゐる賣卜者流に觀て、易とは彼んなものかといふのに少しも異つた所はない、さらば此れ等の説を成すものは、まだ詩學の楷梯をだも踏んでゐない局外生ばかりで有るかといふに、さうでない、詩賦專問を以て自ら任じてゐる輩までが、斯る心掛けで有るから、之れを以て潔情、美情と増進して、徳義を涵養することの出來ないばかりか、韻字と平仄とを以て媚を權門に鬻ぐの資本とするやら、美酒佳肴を釣るの餌とするやら、彼の輩のためには、いかに憫然の至りで有るが、また詩國の亂臣賊子、誠に憤慨に堪へない。

余も斯る輩に對しては復た言はざるべし、詩界の一大革新を成すには、之れを後進の子弟に待たねばならない。

さらば後進の子弟たるものも、亦第一に此に注意し、直ちに詩學を指して心學と爲し、深く其道に入るやうに、明かに其理を究むるやうに、さうして邪逕に陥らぬやう

にせねばならない。

ソレに就ても、第一に注意せねばならないのは師を擇ぶことで有る、いかに文字を羅列することが巧みで有つても、其心術が腐敗しておれば、薰染される所は、唯だ其文字ばかりでない、人格にまで及ぼすもので有るから、師に就くには、氣韻の高低、見識のある人を擇ばねばならない。

また詩學に志すものは、汎く學問に涉らねばならない、むかしの人には、或は詩に別才あり、書に關するに非ず、詩に別趣あり、理に關するものに非ずなどいつたものも有るが、第一、多く書を読み、多く理を窮むるでなければ、到底その至る處に到ることは出來ない、普通學も修むべし、語學も修むべし、國文學も修むべし、其文學も修むべし、漢籍に在ては、經史百家に出入し、珍奇の小説、腐爛の時文をまです窮むべし、此れ所謂る書を読んで萬卷を破し、筆を下せば神あるがごとくといふ所で、杜詩の集めて大成する所以のものは、上は離騷より、下は齊梁にいたるまで、

其英華を咀ひ、其根本を討ぬ、さらに五經三史を以て、博綜貫穿してゐるからで有る、しかし此れは一朝一夕の能くすべき所でないから、行く修さむることとしておいて、サテ詩の書冊では如何なるものを讀んだが好いかといふに、蘇東坡は、毛詩の國風及び離騷を熟語せば、曲折ことごとく此に在りといつてゐる、また嚴儀卿は、詩を學ぶには、先づ楚辭を熟讀して以て之れが本をなし、李陵、蘇武、漢魂の五言みな熟讀すべし、李白と杜甫の二集は、枕籍之れを觀てから、盛唐の名家を取て胸中に醗釀すれば、自然に悟入する、よし學んで至らずとも亦正路を失はないといつてゐるので有る、いかにも名説ではあるが、此れは多少詩を學びたるものに向つて語るべきことで、初學の徒に益する所は少い、初學の徒の讀むべきものは、杜甫の詩は、如何うあつても除外することは出來ないが、其他の詩では、先づ選集より目を曝らす宜しい。而かも余の推舉するに躊躇せざるものは左のことし

五朝詩別裁集

唐詩別裁

宋詩別裁

元詩別裁

明詩別裁

本朝詩別裁 清朝の詩

唐詩選

唐宋詩醇

おのれ詩の進むとよもに、漸次に唐、宋、元、明、清の諸名家の全集を讀破するの
 有る、が、日本人の詩は、初學の中は斷じて讀まぬが宜しい。

また初學に適當なる韻本は、詩韻含英、詩韻珠璣、韻府一隅、圓機活法などで有う。
 よし此等古人の選集を讀むにした所が、多くは譜記する覺悟で讀むが好い、しかし
 唯だ暗記したばかりでは、筆に得る所が少いから、多く作らねばならない、多く作

る中には、いつとなく作例も能く判り、趣興も苦しまざるやうに爲つて、遂に習熟するものであるから、詩もさほど難しいものではない。
 しかし詩の本體本質は、前にも述ぶるやうに文字でない、平仄でない、即ち形でない、一大心學で有るから、ソコに悟入するには容易のことでない、初學の徒は、先づ一に潔情と美情とを増進して、彼の今時の俗詩人の汚毒に染まぬやうに、注意するが宜しい、さうでなければ、いかに金聲玉振の文字を羅列した所が、余はソレを目して詩人とはいはない、従つて其詩も亦千古に異彩を放つものでない。

第五 詩を作るの大意

詩を作るには先後する所を知らねばならぬ。 命意を先にすべし。 看題。 天地間のものとして詩題ならぬはない。 委氣、朝廷、宗廟、聖賢、師父等の題。 山嶽、河海、軍旅等の題。 山林、隱逸、仙釋等の題。 宴樂、觀娛、花月、遊賞等の題。 神仙、豪俠等の題。 景勝、宮苑、富貴、美人等の題。 登高、眺遠等の題。 晁市、送別等の題。 細別せる詩題。 登。 覽。 遊。 宴。 尋。 訪。 送。 別。 逢。 迎。 寄。 酬。 贈。 答。 題意を觀るは易し、文字にあらはすは難い。 古人と今人。 模擬蹈襲。 陳腐を化して斬新と爲す手段。 陳腐と斬新との比較。 山を詠するの例。 古人の詩意を偷むも亦作詩の一段。 觀察。 俗を化して雅と爲すの注意。 卑俗の中より雅致を探索すべし。 乞食の詩と文。 立意を越卓にすべし。 賦、比、興。 詩の意は言外に在るが宜しい。 古詩三百篇の含蓄。 先づ杜詩ぐらゐを標準とするが宜しい。 腹稿。 物と物との配合。 凝神。 氣象と體面と血脈と韻度。 釋皎然の詩式。 四不。 四深。 四離。 六迷。 六至。 改竄修飾。

凡て詩を作るには、先後する所を知るべし、彫金鏤玉の字を並べ、廻鳳舞鸞の筆を弄するは後のことで、篇に臨んでは、意を命じ、慮を綴ることを先きにせねばならない、此れ實に一篇の趨向たり、基礎たるもので有るから、もしもコレが立たねば、一篇の締構も従つて出来やう筈はない、將に射らんとするものは、必ず先づ標的を定むるではないか、將に戦はんとするものは、必ず先づ廟算を立つるではないか、詩に於ても亦同じ、命意を先に行ふことを知らねばならない、さらば其命意は、如何なる點に於て之れを定むるかといふに、ソハ所謂看題、即ち一篇の詩の題意を觀るが宣しい。

天の覆ふ所、地の載する所、之れを大にして坤輿の變化、國家の事變より、之れを小にしては、禽獸蟲魚の纖細、日間の瑣事に至るまで、目に接するものとして、耳に觸るゝものとして、一として詩題ならぬはなし、詩は實に此等遍滿なる題目に就て文字を屬するので有れば、勢ひ其命意も亦處に隨ひ、物に隨ひ、其趣を殊にせねば

ならない、隨つて其題意を觀ることの尤も必要で有るのは、判り切つたことであるのに、初學の徒に限り、觸目一遍するぐらいが普通一般の習ひだから、失體題外の過ちを致すもの比比みな然り、然らば如何に其題意を觀るかといふに、ソハ作者の詩思をして、其事、其物に切ならしむるまでのことで、之れを稱して養氣といふのである、今試みに天地間に於ける詩題の尤も大なるものを選択し、之れを分類し、配するに詩氣を以てすれば左のごとし。

朝廷、宗廟、聖賢、師父
ねばならない。 此等の題に臨めば、其氣凛然として嚴肅になければ

山嶽、河海、軍旅
ならない。 此等の題に臨めば、其氣巍然として雄壯になければ

山林、隱逸、仙釋
ならない。 此等の題に臨めば、其氣冷然として清逸になければ

宴樂、歡娛、花月、遊賞
ねばならない。

此等の題に臨めば、其氣温然として和諧になけれ

神仙、豪俠

此等の題に臨めば、其氣屹然として奇偉になけれねばならない。

景勝、宮苑、富貴、美人

此等の題に臨めば、其氣煥然として美麗になけれ

ねばならない。

登高、眺遠

此等の題に臨めば、其氣廓然として遠大になけれねばならない。

凭吊、送別

此等の題に臨めば、其氣黯然として悲愴になけれねばならない。

此八段は、一般に事に依り、物に依り、時に依り、地に依りて大別したもので有るが、猶ほ之れを細別すれば、朝省、懷古、風土、昇平、官情、風懷、遊宴、老壽、四季、節序、閒適、器物、陵廟、旅况、征戍、宮闈、忠憤、林泉、丘壑、遷移、疾病、感舊、詠史、俠少、釋梵、仙道、慶賀、傷悼、尋訪、登覽、贈答、送別、感慨、農桑、圖畫など、殆んど枚舉するに遑ない、皆時に臨み、感に依りて意を得、題

の本意を失はぬやうに作れば、ソレでよいので有るが、中に登と覽と遊と宴と尋と訪と送と別と逢と迎と寄と酬と贈と答とは、平生尤も多く作る詩題で有るから、さ

らに之れを左に詳解すべし。

登 所謂る登高眺遠で、險を経て山に入り峰に出で、臨眺する所のものを寫すの

だから、高遠に渉るだけ趣味が多い。

覽 景致を周覽し、古蹟をみるの類。

遊 其處の景と、其時の致とを叙ふるを本とするが宜しい。

宴 相歡樂するの意を本とし、亭邊の景色を叙ふるもよし、席上の美酒佳肴を賦

するも亦宜しい。

尋 行路の風景を叙し、村巷の模様、山溪の形状、原野の幽致を賦するなど、尋

ぬる趣によりて一様ではないが、次第のよきやうに作るべし。

訪 尋ね行く路の景色を叙し、併せて其人の居所、及び氣象などを詠すれば殊に

宜しい。

送 其行先の遠きをいひ、前路を下し、再會を期し、行路の景を叙ふるなど其類また多し。

別 從來相交るの情誼をのべて今別るの恨をつくすもの、他日相戀はんとの意を叙ふるもの、後來の音信を望むものなど、其類また多し。

けだし送別の詩は、一般に龍鍾として堪えざるの意をつくすが宜しい、例せば王維と許渾が詩

渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。

勞歌一曲解行舟、紅葉青山水急流、日暮酒醒人已遠、滿天風雨下西樓。

語語龍鍾にあるので、一讀の下、坐るに人を動かすので有る、しかし之れを古人の詩に徴するに、壯快な作もないではない、例せば高適が詩

十里黃雲白日曛、北風吹雁雪紛紛、莫愁前路無知己、天下誰人不識君。

格律必ずしも、王、許の下に在るといふではないが、餘りに壯快にあるので、却て人を感じしむるこゝろが薄い。

逢 離別の悲みの中に在て、乍ち相逢ふの樂みを叙べたものも有る、今逢ふの歡びのために、却て多年索居の愁情を感慨したものも有る、古人の作例、もとより一様でない。

迎 人の至るを欣び、或は謝し、或は樂む。

寄 眞實に安否を問ひ、相思の情をのぶ。また當座のことにも専ら用ゐて宜しい。

酬 さきの意趣をつぶさに知了し、能く聞了し、さきの旨をのこさぬやうに酬ひ

答ふるが宜しい。

贈 職祿官爵、學問、功業、何にても相應するやうに、ほめず、刺らず、情の厚きを以て主とするが宜しい。

答 人より問はれ、または尋ねられたるに對し、つぶさに答へて、餘り他事を雜

へぬが宜しい。

猶ほ此寄酬贈答の詩題に就て、一言注意しておかねばならないのは、凡そ人より寄贈せられたる詩があれば、先づ其詩の意味を咀嚼し、能く受けて外さぬやうに作爲し、中に就て、二三句だけ雄健、壯麗の語を工夫し、一句たりとも來詩の意に雷同することのないやうにするが宜しい、例せば高適が杜甫に寄するの詩

傳道招提客、詩書自討論、佛香時入院、僧飯屢過門、聽法還應難、尋經賸欲翻、草玄今已畢、此後更何言。

杜甫が之れに酬ゆるの詩

古寺僧牢落、空房客寓居、故人供祿米、隣舍與園蔬、雙樹容聽法、三車肯載書、草玄吾豈敢、賦或似相如。

此兩詩を對讀するに、杜が古寺僧牢落、空房客寓居の二句は、高が傳道招提客、詩書自論の二句に答へたので有る、杜が故人供祿米、隣舍與園蔬の二句は、高が

佛香時入院、僧飯屢過門の二句に答へたもので有る、杜が雙樹容聽法、三車肯載書の二句は、高が聽法還應難、尋經賸欲翻の二句に答へたもので有る、杜が草玄吾豈敢、賦或似相如の二句は、高が草玄今已畢、此後更何言の二句に答へたもので有る、杜甫が此詩、一句として高が來詩の意を外してゐない、余も詩は必ず斯くまでに嚴格にせよとはいはないが、初學の徒は、先づ就て贈答の法を見るが宜しい、猶ほ左に韋丹と僧靈轍と贈答の句を録すべし、即ち韋丹が詩

已爲平子歸休計、五老峰前必共君。

靈轍が之れに答ふる詩

相逢盡道休官去、林下何曾見一人。

此れも亦來詩の意を受けてゐるので有る、その他、古人の寄酬贈答、一として此例ならぬはない。

寄酬贈答といひ、尋訪といひ、遊覽といひ、山嶽の聳ゆる所、江河の流るる所、蟲

の啼き鳥の飛ぶ所、詩題は誠に廣大遍滿なもので有る、此廣大遍滿なる詩題はよし詩人でなくとも、眼あるものは必ず眼に映じ、心あるものは必ず心に印するにさうゐない、また余が前に述べたやうにすれば、題意を観ることも易い、詩思をして其事、其物に切ならしむることも易いにさうゐないが、さて其題目を採て、愈よ文字であらはずといふ段になると、多少の苦心を要する、決して漫然と筆を下されたものでない。

ソハまた何故かといふに、詩の起つてより茲に三千年、支那と我朝と歴代に輩出せる詩人雲よりも多し、而かも其詩題はといへば、何處までも遍滿に有るので、今人の採て以て之れを詩にすることの容易なることもに、古人も亦採て以て之れを詩にすることの容易にあつたにさうゐない、古人すでに採て以て詩にすることの容易で有つたとすれば、今人の今更ら取つて以て詩にせんと欲するものも、多くは既に古人のために叙べられてゐるといふことは、勢の免れざる所、もとより古人と今人と、轍

頭轍尾に同一境遇といふことは毛頭無いに定つてゐるが、其略は相類似した場合には、或は同一の趣向の浮ばぬにも限らない、其趣向を其まゝに作り出せば、其詩は古人の模擬踏襲と爲つて、殆んど人に示すに足らない、例せば明の趙廸と浦源が詩

幾家茅屋水邊村、花落春潮夕到門、溪上數峰青似染、居人說是武陵源
青山欲轉綠溪廻、古木春雲掩不開、借問桃源在何處、但看流水落花來

前詩は、王建が日暮數峰青似染、商人說是汝州山を踏襲したもので有る、後詩は劉長卿が桃源定在深處、流水泛落花一來を踏襲したもので有る、唯だ其意ばかりでない、文字をまで踏襲するに至つては、呼んで鈍賊といふより外はない、よし此等鈍賊でないにせよ、歴代すでに多數の詩人を出して、多數の詩の出來てゐること、有るから餘程注意せないと暗合するを免れない、此れ余が題意を観るは易いが、筆を下すには多少の苦心を経ねばならぬといふ所以で有る。

さらば如何にすれば、古人以外の地に一新面目を開くことが出来るかといふに、ソ

ハ陳腐を化して斬新と爲す手段を用ゐるより外に好い手段はない。

けだし前人の詩は、その當時に在つては斬新で有つたにさうゐないが、世を閱するの久しき後人之れを大家數の後に承けて、好意は説盡し、好語は道盡し、工うと酒を醸すやうに、前なるものは其醇を取り、後なるものは其醇を取り之れを取つて已まないで、今に至つてゐるので有るから、今から之れを觀れば、多くは陳腐に爲つてゐるといはねばならない、今一例を舉げて之れをいへば、支那で征戍の詩には、彼の詩にも此詩にも、黄草、白沙、胡笳、朔雲などの字が入つてゐる、此れ支那の戦争は、多くは北方に在つて、北方は黄草白沙の地で、別に花の咲く處でもなし、柳の緑る處でもないから、詩の材料としては、唯だ此れ等のものを取るより外に致方はあるまい、しかし獨り王陽明に至つては、賊を南方に伐つた男で有るから、其戦争の詩には、滿道春風颯三鼓角、半山斜日動三旌旗など、春風も入つてゐれば、花も入つてゐる、柳も入つてゐる、霧も夕立も入つてゐるので有る、一は北方、一

は南方、風物氣候の相異なるのが、則ち其詩の趣を殊にしてゐるので有るから、彼れは陳腐、此れは斬新とはいへないが、黄草、白沙の文字をのみ觀慣れた眼よりすれば、陽明の詩が非常に斬新にあるやうにおもはるので有る、此れ亦以て陳腐を化して斬新と爲すの工夫を悟るべし、即ち今こゝに山を詠すると假定せんに、前人すでに之を高いといつてゐるならば、我れは之れを深いといふので有る、前人すでに之れを白雲の中に聳へてゐるといつてゐるならば、我れは之れを青天の外に突立つてゐるといふので有る、前人すでに之れを花に宜いといつてゐるならば、我は之れを雪に宜いといふので有る、前人の體、我の雨、左よりし、右よりし、表よりし、裏よりすれば、いふべき節も亦多いから、一に古人の未だ嘗て説破してゐない點より觀察して、筆を下せば、新面目の下に山の眞を寫し出すことも亦困難でない。

詩は斯くのごとく、古人の未だ嘗て説破してゐない處を觀察して、筆を下すのを尤も好しとするので有るが、古人の詩意を偷むも亦作詩の手段で有る、一概に偷む

といへば、非常に悪いやうにも聞ゆるが、此れ詩家の所謂承襲で必ずしも僻事でない、ソレにしても句の並べかただけは、決して古人と同一軌に出づるを許さない、今其例として、左に諸家の詩

范石湖

吹[△]開[△]紅[△]紫[△]還[△]吹[△]落[△]、一[△]種[△]東[△]風[△]兩[△]樣[△]心[△]。

張公痒

夾[△]路[△]桃[△]花[△]新[△]過[△]雨[△]、馬[△]蹄[△]無[△]處[△]避[△]殘[△]紅[△]。

張公範

蠟[△]花[△]本[△]是[△]無[△]情[△]物[△]、特[△]向[△]人[△]前[△]也[△]淚[△]流[△]。

周 權

數[△]聲[△]樵[△]笛[△]人[△]何[△]處[△]、一[△]路[△]寒[△]山[△]晚[△]翠[△]深[△]。

此詩、范石湖の作は唐詩の春風堪^レ賞還堪^レ惜、纔見[△]開[△]花[△]又[△]落[△]花[△]といふのより來てゐるので有る、張公痒の作は唐詩の大堤欲^レ上誰相伴、馬踏[△]深[△]泥[△]半[△]是[△]花[△]といふのより來てゐるので有る、張公範の作は唐詩の蠟燭有^レ心還惜^レ別、替[△]人[△]垂[△]淚[△]到[△]天[△]明[△]といふのより來てゐるので有る、周權の作は唐詩の只在[△]此[△]山[△]中[△]、雪[△]深[△]不[△]知[△]處[△]といふのより來てゐるので有る、しかし此四首は、古人が花と、雲と、蠟燭とに

用ゐた意を、自家も亦花と、雲と、蠟燭とに用ゐてゐるから、何んもなく斧鑿の痕跡の見ゆるので有るが、こゝは少し氣轉を利かせて、古人が花に用ゐた意ならば、我は之れを雲に用ゐる、古人が蠟燭に用ゐた意ならば、我れは之を花に用ゐるといふやうな調子に遣つて退けたくおもふので有る、例せば唐詩

打[△]起[△]黃[△]鶯[△]兒[△]、莫[△]教[△]枝[△]上[△]啼[△]、啼[△]時[△]鶯[△]妾[△]夢[△]、不[△]得[△]到[△]遼[△]西[△]。

宋の蘇東坡は、此詩の意を取り、黃鶯兒に代ゆるに鷄を以てし、一詩を作つてゐる、其詩

爲[△]報[△]隣[△]鷄[△]莫[△]驚[△]覺[△]、更[△]容[△]殘[△]夢[△]到[△]江[△]南[△]。

また唐詩

始[△]憐[△]幽[△]竹[△]山[△]窓[△]下[△]、不[△]改[△]清[△]陰[△]待[△]我[△]歸[△]。

明の高青邱は、此詩の意を取り、竹に代ゆるに花を以てし、一詩を作つてゐる、其詩

莫[△]入[△]鄉[△]園[△]使[△]花[△]落[△]一[△]枝[△]留[△]待[△]我[△]歸[△]看[△]。
また元詩

如何十二金人外、猶有民間鐵未銷。

清の陳恭尹は、此詩の意を取り、博浪の鐵槌に代ゆるに圯上の書を以てし、一詩を作つてゐる、其詩

夜半橋邊呼[△]孺子[△]、人間猶有[△]未[△]燒書[△]。

もし夫れ、蘇東坡が初冬の詩

荷盡已無[△]擎[△]雨蓋[△]、菊殘惟有[△]傲[△]霜枝[△]、一年好處君須[△]記[△]、正是橙黃橘綠時[△]。

此れ韓愈が早春の詩、天街小雨潤如酥、草色遙看近却無、最是[△]一年春好處、絶勝煙柳滿[△]皇都[△]といふと同意で有るが、一は之れを早春に用ゐる、一は之れを初冬に用ゐる、辭までが全然相異つてゐるので、兩兩對照しても猶ほ分らぬほどで有る、此れ實に偷意の妙を極めてゐるもので有るから、詩を學ぶものは潛心翫味するが宜し

い。

また腐を化し新と爲す手段として翻案といふのが有る、例せば神仙は美稱で有るのに、古人が丈夫生命薄、不幸作[△]神仙[△]といへるがごとき、楊花は飄蕩の物で有るのに、古人が我比[△]楊花[△]更飄蕩、楊花只有[△]一春忙[△]といへるがごとき、いづれも翻案ならぬはなし、また杜牧が寄[△]隱者[△]の詩

無[△]媒[△]逕[△]路[△]草[△]蕭[△]蕭、自[△]古[△]雲[△]林[△]遠[△]市[△]朝、公[△]道[△]世[△]間[△]唯[△]白[△]髮、貴[△]人[△]頭[△]上[△]不[△]曾[△]饒[△]。

宋の葉茵、此詩の轉結を取て翻案し、白髮の詩を作つてゐる、其詩

半世持[△]竿笠[△]澤濱、鬢邊留[△]得[△]幾[△]莖[△]春、近來白髮無[△]公道、暗把[△]黑頭[△]饒[△]貴人[△]。

所謂る翻案とは、古人の詩または語に就て、さらに一步を進めて之れをいふのである。

以上に述ぶる所で、大略し陳腐を化して斬新と爲す手段は分るで有うから余は更らに進んで初學のために、俗と化して雅と爲すの注意を促さねばならない。

その作る所の詩、いかに陳腐でないにもせよ、其着想が卑淺なるか、其文字が俚俗なるかすると、復た讀まれたものでないから、詩を作るものは常に此點に注意し、詩題として尋常一様に見れば、本來卑俗なものでも、詩を作る時には、巧みに其中より雅致を模索し出さねばならない、例せば陶淵明が乞巧の詩

感三子漂母惠、愧我非韓才、銜賊知何謝、冥報以相貽。

此詩の意味は、丐食を以て韓信が漂母に一飯を惠まれたるに比し、其語を借りて君の惠を受くれども、我に韓信の才がないから、御恩に酬ゆることは出来ない、しかし此御恩は、深く肝に銘じておいたから、いつれ來世で酬ゆるで有うといふのに在る、げだし乞巧は一般に人の目して賤と爲し卑と爲すもので有るが、詩に入れても、斯ういへば、何處までも溫柔敦厚の思で、少しも卑賤と見るべき所のものがない、また袁石公に乞兒丐僧と貴人とを引較べて書いた一篇の短文が有る、その文

長安風雪夜、古廟冷舖中、乞兒丐僧、駒駒如雷吼、而白髭老貴人、擁錦下帷、

求一合眼不得、嗚呼松間明月、檻外青山、未嘗拒人、而人人自拒者何哉。

松間の明月、檻外青山、いづれも乞兒丐僧の所有で有る、乞兒丐僧も、斯ういはるれば、なかく氣品が高い、此れ以て俗を化して雅と爲すの手段を悟るべし。

作者すでに俗を化して雅と爲し、腐を變じて新と爲すことが容易に出来るやうになれば、さらに進んで其立意を超卓にし、自家の特色を發揮し、免ても他人の模擬することの出来ないやうな詩を作ること勉強せねばならない、例せば宋の陸放翁が舟中の詩。

舟中一雨掃飛蠅、半脫綸巾臥翠藤、清夢初回窓日晚、數聲柔櫓下巴陵。

此詩の轉結は、もと佳句で有つたにさうゐないが、元、明、清を経て、後出の詩人が頻りに模倣したので、今では熟路を成し、復た顧る人さへない、また唐の李嶠が汾陰行の詩。

山川滿目淚沾衣、富貴榮華能幾時、不見祇今汾水上、唯有年年秋雁飛。

明皇傳信記に依れば、明皇將に蜀に幸せんとする時、花萼樓に此詩を聴き、凄然涙を流されたさうな、誠に其の當時に在つては、絶調で有つたにさうゐないが、後ち宋、元、明、清を経て、人みな此意を道つたので、今では熟路と爲つてゐる、斯くも詩の熟路と爲るのは、本と甚だ工にないからの致す所である、唐の絶句の工みなるもの、李白が白帝、王維が渭城、王昌齡が奉帚と寒雨、王之煥が黄河遠上、杜牧が長空澹澹、劉夢得が山圍故國の諸篇のごときは、千歳を経るといへども新たに酬を發するがやうに有つて、後人の一言半句だも指を染むるものがない、しかし此等を以て尋常一様の作家に望むは、少し酷であるが、亦一證として以て篇に臨み、意を命ずることの如何に鄭重でなければならぬかが判るで有らう、誠に詩を千歳の後に傳へて、人口に膾炙せしめんと欲するものは、先づ其命意をして時流に卓出せしむるより外はない。

詩意すでに命ずれば、如何にして之れを詩篇に出すかといふに、ソハ賦で出すも宜

しい、比で出すも宜しい、興で出すも宜しい、イナ詩は必ず此賦、比、興に依つて出るもので有る。

賦とは何んで有る、比とは何んで有る、興とは何んで有るかといふに、此れ皆な詩の用で、詩經には、風、雅、頌の三類を併せて詩の六義と稱してある、けれど風と雅と頌とは、詩の聲樂部分の名で、一般に作る所の詩體は、みな此三類の範圍内に在るのだから、詩の經ともいつて宜しい、然るに今此賦と比と興とは、實に其風と雅と頌とを制作する所以のもので有るから、稱して詩の法ともいはねばならない、緯ともいはねばならない、猶ほ之れを左に詳解すべし。

賦 賦とは、目に見る所、耳に聞く所のものを、見たまゝに、聞いたまゝに詠出するので有る。

李白 衆鳥高飛盡、孤雲獨去閒。

柳宗元 江碧鳥愈碧、山青花欲燃。

杜甫 錦城歌管日紛紛、半入江風半入雲。

錢起 谷口春殘黃鳥飛、辛夷花盡杏花飛。

いづれも賦で有る、さらに例を卑近に取れば、我邦の俗謠

琉球におしやるなら、草鞋はいておじやれ

琉球は石原、小石原。

君に別れて松原行けば

松の露やら涙やら。

此れも亦賦たるを免れない。

比 比とは物に因て志を喩ふるもので、其指す所の事は、常に言外に在る、例

せば杜甫が堂成の詩

暫止飛鳥將數子、頻來語燕定新巢。

此れ杜甫が我子を携へて、新たに成れる居所に來た時の作で、其喜は、飛鳥及び

語燕の樂みに似たものが有るので、其鳥其燕をいふて自家に比したので有る、また白樂天が女道士の詩

姑山半峰雪、瑤水一枝蓮。

此れ花を以て美人に比したもので有る、また蘇東坡が海棠の詩

朱唇得酒暈生臉、翠袖卷紗紅映肉。

此れ美人を以て花に比したもので有る、斯くのごとく、彼れを以て之れに比するも宜しい、此れを以て彼れに比するも宜しいが、詩には尊題といふことが有るか、先づ題の方を本とせねばならない、猶ほ毎句比擬を以て作つた詩では、杜甫が慈恩寺の塔に登るの詩

泰山忽破碎人君道を失ふ、涇渭不可求賢不肯入り難しつて清濁を分つことが出来な、俯

仰但一氣、焉能辨皇州、天下に紀綱なし禮樂なし、上都も亦同じ、回首叫虞舜、蒼梧

雲愁こゝに於て往古の聖君容易に得べからざるをおもふ、惜哉瑤地上、日飲崑崙丘、この時、

玄宗まことに淫樂に耽て已まない、黄鶯去不_レ息、哀鳴何所_レ投賢人君子、多く朝庭を去る、君
看隨陽鴈、各有_二稻梁謀_一 緑位に飽くものは皆な小人

その他、楚の屈原が作つた離騷などは、殊に比喩を用ゐるので有る、即ち善
鳥香草を以て忠貞に比し、惡禽臭物を以て讒佞に比し、靈修美人を以て君に比し、
宓妃佚女を以て賢臣に比し、虬龍鸞鳳を以て君子に比し、鸞風雲霓を以て小人に
比するなど、殆んど枚擧するに遑なし、猶例を卑近に取つていへば、我邦の俗謠
仇に吹寄るいたづら風に

うかど靡かぬ女郎花

此れも亦所謂る比たるを免れない。

興 興とは、耳に觸れ目に觸るる所の物に依て感發するもので、詞は此に在れ
ども意は彼れに寄るので有る、例せば唐詩

渭水東流去、何時到_二雍州_一

雍州は作者の故郷で有る、渭水の東流を觀て、故郷の思を起した、此れ即ち所謂
る興で有る、猶を例を卑近に取れば我邦の俗謠二節

富士の白雪や朝日で融ける

娘島田は寐て解ける

竹に雀は品よく止まる

止めて止まらぬ戀の道

此れも亦興たるを免れない。

されば詩は、境に隨ひ、其心の適する所は、賦で作つても宜しい、比で作つても宜
し、興で作つても宜しいので有るが、唯だ其意は、出来るだけは言外に在るやうに
作るが宜しい、例せば杜甫が詩

國破山河在、城春草木深、感_レ時花濺_レ淚、恨_レ別鳥驚_レ心

すでに山河在といへば、餘物のないことが明かにある、草木深といへば、人のない

ことが明かにある、花と鳥とは平時に在ては、心を樂しむもので有るのに、今ソレに對して涙を灑ぎ、心を驚かすといへば、當時の時勢も推して知らるゝので有る、けだし、詩は一般に言語で求むることは出來ない、將さに其意を觀んとするもので有るから、其意は何處までも此詩のやうに言外に在るやうに作らねばならない、もしもコレを言語でふも現はさうとしたものなら、寥寥二十字はさておき、數十字に涉つても満足に寫すことは出來ない。

ついで茲に一言注意しておかねばならないのは、古詩三百篇のことで有る、杜甫の詩、いかに其意言外に在りといふても、之れを三百篇に比すれば、猶ほ露骨で有る、即ち其淫亂を刺るがごときも、唯だ離離鳴鴈、旭日始旦といつてゐるばかりで、必ずしも杜甫のやうに慎莫近前丞相嘆とまで露骨にはいはない、其流民を憫むがごときも、唯だ鴻鴈于飛、哀鳴嗷嗷といつてゐるばかりで、必ずしも杜甫のやうに千家今有百家存とまでに露骨にはいはない、其暴斂を傷むがごときも、唯だ維南

有箕、載翁其舌といつてゐるばかりで、必ずしも杜甫のやうに哀哀寡婦誅求盡とまでに露骨にはいはない、其饑荒を叙ふるにも、唯だ群羊羶首、三星在罽といつてゐるばかりで、必ずしも杜甫のやうに但有牙齒存、可堪皮骨乾とまでに露骨にはいはない、けだし詩の尤も含蓄あるものはと問へば、先づ指を三百篇の中でも變風變雅に屈するより外なかるべし、しかし今の人が、一に詩意は言外に在るから、何處までも含蓄させねばならぬといふのを丸呑にし、直ちに古詩三百篇をまねるは悪い、まねて出來ぬことはないが、餘りに古るいから今の時にあはない、先づ杜甫ぐらゐるを標準とするが宜しい。

斯くのごとくにして一篇の基礎、大略し定まれば、次は腹稿で有る、腹稿とは、腹の中で草稿を定むるの謂ひで、首めには何んで言ひ起し、尾りには何んで言ひ結んだら好いかといふことを、先づ腹中に締構するので有るが、此れは一に全篇に陸離たる光彩を放たしむるやうに注意せねばならない。

全篇に陸離たる光彩を放たしむるには、先づ物と物との配合といふことに注意せねばならない、而かも其配合の具合は、相類似したもののよりも、なるべく相離れたものを把つて相配合せしむのがよろしいやうにおもはるゝ、即ち静といへば動、炎といへば涼、黒といへば白、甘といへば酸、此等の配合その宜しを得れば、一篇の光彩は自ら生ずるので有る、坡下の戦ひに、尤も目につくものは楚帳の虞美人ではないか。萬緑叢中に、尤も目につくものは紅一點ではないか、此れ皆な證すべし、例せば權徳興が長城の詩

秦築長城比鐵牢、蕃戎不敢逼臨眺、焉知萬里連雲色、不及堯階三尺高。

此時、萬里の長城を以て三尺の堯階に比して、猶ほ及ばぬといつてゐる、此れ全く大と小との配合で有る、また宋の周端臣と林季謙の詩

一巷自隱古城邊、不是山林不市塵、落月半窓霜滿屋、臥聽宰相去朝天。燒城燈市又新年、壁月樓臺萬管絃、獨有廣文窮相眼、一尊燈火照殘編。

此れ皆な閑と忙、喧と静との配合に外ならない。

今日文を屬し、詩を賦するの輩が常に詩趣といふことを口癖のやうにいつてゐる、即ち彼の事には詩趣の有るか、此事には詩趣のないかいつてゐるので有るが、之れを要するに趣味なるものは、天地自然の景であれ、人事であれ、一に物と物との配合の宜しを獲たる結果に起れるものにさうゐないから、詩を作るものは、尤も此點に着眼せねばならない。

斯くのごとくにして腹稿すでに定れば、次は凝神で有る、凝神とは、筆を執るに方り、一切の紛慮雜念を退け、わが精神を作詩に集注するの謂ひで有るが、もし此一事をおろそかにすれば、詩氣もために雄なることが出來ない。

けだし詩には、一般に氣象といふものが有る、體面といふものが有る、血脈といふものが有る、韻度といふものが有つて、其氣象は渾厚になければならないが、もし失すれば俗に爲り易い、其體面は宏大になければならないが、もし失すれば狂

に爲り易い、其血脈は貫穿せなければならぬが、もし失すれば散に爲り易い、其韻度は飄逸になければならないが、もし失すれば輕忽に爲り易いもので有るから、所謂凝神の時には、尤も此四つのものに注意せねばならぬ、ソレについて釋皎然に詩式といふのが有つて、其好とする所と陋とする所とを精しく述べてゐるから、潜心玩味して其式を守るが宜しい。

皎然の詩式に四不といふことが有る、四不とは

氣高ふして而かも怒らず、怒れば則ち風流に失ふ

力勁くして而かも露はさず、露はせば則ち斤斧に傷る

情多くして而かも暗からず、暗ければ則ち拙鈍につまづく

才富にして而して疎ならず、疎なれば則ち筋脈にそこのふ

また四深といふことが有る、四深とは

氣象氤氳は體勢に深きによる。

意度盤礴は作用に深きによる。

律を用ゐて滯らざるは聲對に深きによる。

事を用ゐて直ならざるは義類に深きによる。

また四離といふことが有る、四離とは

道情を期すといへども而かも深僻を離る。

經史を用うといへども而かも書生を離る。

高逸を尙ふといへども而かも迂遠を離る。

飛動を欲すといへども而かも輕浮を離る。

また六迷といふことが有る、六迷とは

虚誕を以て高古と爲すは迷。

緩漫を以て冲澹と爲すは迷。

詭怪を以て新奇と爲すは迷。

爛熟を以て穩約と爲すは迷。

用意を誤るを以て獨善と爲すは迷。

氣少く力弱きを以て容易と爲すは迷。

また六至といふのが有る、六至とは

至險にして僻せず。

至奇にして差はず。

至麗にして自然。

至苦にして跡なし。

至近にして意遠し。

至放にして迂ならず。

六迷四離と四不とは避けねばならないが、四深と六至とは、何處までもつかねばならない。

斯くのごとくにして神すで疑れば、次は篇法、句法、字法、語法、韻法、平仄法、及び故事故典を用ゐるの法に依つて字を下すのである、尤も此故事故典を用ゐるの法と、平仄法と、韻法と、語法と、字法と、句法と、篇法とは、別に篇を分ち、逐次に之れを論じてゐるから、今こゝには略して述べない。

斯くのごとくにして一篇の詩すでに成れば、次は改竄修飾に力をいたすので有る、朝に一疵を驅り、夕に一瑕を除き、一點の非の打ちやうもないやうに爲るまでは、慘憺苦心して已めないもので有る、例せば蘇東坡が蝸牛の詩

腥液不[△]滿[△]穀、聊足[△]以[△]自濡、升[△]高不[△]知[△]疲、竟作[△]粘[△]壁枯。

此詩の上の二句は、初め中弱不[△]勝[△]觸、外堅聊自邪に作つてゐたのを、後ちに今の句に改めたので有るさうな、之れを顧ふに改竄修養は、朝成暮毀して、已まなければ、その中、自ら好い工夫も出て、詩も亦倍す清絶と爲るもので有るのに、初學の徒に限り、井底の癡蛙、好詩自ら許すの念は、字句愛惜の情と相投合し、此字惜む

べし。此句誦すべしとして、終に大豁眼を開いて大疵を見つけ出すことの出来ないもの比比みな然りのやうにおもはるゝアレは悪いことで、第一、進學の道でない、深く警めねばならない。

第六 篇法

篇法とは詩の締構法。 曲折。 照應。

ここに所謂篇法とは、詩の締構法で有る、詩の締構法にも種種あつて、古詩ならば古詩のやうに締構せねばならない、樂府ならば樂府のやうに締構せねばならない、律ならば律のやうに締構せねばならない、絶ならば絶のやうに締構せねばならない、唯だソレばかりでない、體に依り、格に依り、各の其趣を殊にするので、一概に之れを論ずることは出来ないから、余も亦下段に之れを分類し、絶句の締構法は絶句の部に、律の締構法は律の部に、古詩の締構法は古詩の部に詳論することにし、今こゝには省いて述べないが、唯だ一事注意しておかねばならぬのは曲折と照應、詩は及ぶだけは曲折の有るやうに作らねばならない、例せば方蒙章が訪友の詩

輕舟一路繞煙霞、更愛山前滿澗花、不爲尋君也留住、那知花裏是君家

此詩、もし花裏即ち君家たるを知るといへば曲でない、直で有る、直では趣味がない。

また詩は首尾相照應するやうに作らねばならない、今例を昇近に取れば、我が今様の秋の夜

秋の夜は、ながいものとはまんなまるの、月見ぬ人の心かも、ふけて待てども來ぬ人の、おとづるものは鐘ばかり、數ふる指のねつおきつ、わじやてらされておるわいな。

此一篇、結末に、てらされての一言は、全く起首の月といふに字面に照應してゐるもので、詩の照應も、亦こゝに依準せねばならない、韓翎が宿石色山中

浮雲不共此山齊、山靄蒼蒼望轉迷、曉月暫飛千樹裏、秋河隔在數峰西。

轉結、山の高大なるを見るべし、故に起句に浮雲不共此山齊の七字が點出されてゐるので有る、五七言古詩などには、殊に此照應を用ゐぬと、一結不掉の憾みを生じ

て、全篇ために振はない。

第七 句法

句法總論。 初學の徒は先づ句法の變化を悟るべし。 二句を以て一句を成せるの例。 三句を以て一句を成せるの例。 問答句。 散句と對句。 所謂六對。 所謂八對。 朱飲山か對法の分類。 袁石公が中聯琢句の法。 就句對。 折句對。 上應下呼の句。 上呼下應の句。 行雲流水句。 顛倒綜錯句。 倒裝句。 上二下五の句。 上五下二の句。 一字四字の句。 句中對。 互體。 懸體。 象外句法。 影略句法。 秘府論の二十九對。 奇對。 假對。 偏枯は避くべし。 合掌は思むべし。 一聯の句同じやうなのは悪い。 一篇の中、同じやうな句體のあるのは悪い。 唐人の對句。 句勢の種類。 奇句險語の人を驚かすもの。 句勢は強きを貴ぶ。 偷勢。 古句襲用の作例。 集句。 聯句。

其句法、巧絶なる時は、通篇の詩も勢ひ偉麗に爲るので有る、其句法、精絶なる時は、通篇の詩も勢ひ飛動するので有る、が、不幸にして疎凡なれば、通篇は爲めに本板に、復た一讀の價なし、故に詩を學ぶものは、先づ多く古人の詩を讀んで、句

法の變化を悟らねばならない。

凡そ詩中の句は、絶句ならば、合して之れをいへば、七言は七字、五言は五字を以て一句と爲してゐるので有るが、句讀を以て分析して之れをいへば、七字五字の中、また一字を以て句を成してゐるものも有る、二字を以て句を成してゐるものも有る、三字、四字、五字、六字を以て句を成してゐるものも有るから、混讀しては悪い、混讀すれば、輕重斷續の處を辨することが出来ないやうに爲る、しかし此れは詩語として、後段に一節を設けて述べておるから、茲には述べないが、また之れを大にして、一連讀下すれば、詩中の二句、五言なれば十字、七言なれば十四字を以て一句を成してゐるものがある、例せば莫道古來多計策、功成唯有李將軍のごとし、しかし此例は澤山にあるから、敢て珍らしとするにも足りないが、中には詩中の三句、即ち五言なれば十五字、七言なれば二十一字で一句を成してゐるものも有る、即ち李白が越中懷古と、劉夢得が送周使君歸郢中別莊の詩

越王句踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛。
 君思鄧上吟歸去、故自渝南到郡章、野戍岸邊留畫舸、綠蘿陰下到山莊。

李白の詩は、越王より春殿まで一氣に讀下して、句踐が凱旋の模様を寫してゐるの
 で有る。劉夢得の詩は、渝南より山莊まで一氣に讀下して、起句吟歸の意を發して
 ゐるので有る、宜しく細讀して一連貫串の妙を知るべし。

また詩句の中に、問答を用ゐたものが有る、例せば錢起が歸雁
 瀟湘何事閒廻、水碧沙明兩岸苔、二十五絃彈夜月、不勝情怨却飛來。

此詩は、前の二句が問で有る、後の二句が答で有る、また二句の中、上句を問とし、
 下句を答として作つたものも有る、例せば唐詩

松下問童子、言師采藥去。

また一句の中に問と答との詞を用ゐたものが有る、例せば古謠
 丈夫何在西擊胡

此句、丈夫何在の四字が問の詞、西擊胡の三字が答の詞、此れを稱して問答句法といふ。

けだし句には散句と、對句と有る、對句の句法頗る多し、散句の句法も亦多いので
 有るが、對句も之れを分つて一句に爲せば散句たるを免れない、故に其句法のごとき
 も、對句を詳述すれば、散句は自ら分明することと思ふから、余は直ちに對句の句
 を述ぶることとし、散句は略して述べない。

しかし對句の句法に就ては、古人の述ぶる所も一樣でないから、余は今諸書の中よ
 り抄出し、左に其一斑を示すべし、先づ上官儀に示せる六對は

- 正名對 天地、日月のごときもの
- 同類對 花葉、草芽のごときもの
- 連珠對 蕭蕭、赫赫のごときもの
- 雙聲對 黃槐、綠柳のごときもの

疊韻對 彷徨、放曠のごさまもの
雙擬對 春樹、秋池のごさまもの

また八對といふのは

作 的名對 例せば送酒東南去、迎琴西北來のごとし
異類對 例せば風織池間樹、蟲穿葉上文のごとし
雙聲對 例せば秋露香佳菊、春風馥麗蘭のごとし
疊韻對 例せば放蕩千般意、遷延一個心のごとし
連綿對 例せば殘河若帶、秋月如眉のごとし
雙擬對 例せば議月眉欺月、論花頰勝花のごとし
廻文對 例せば情新因意得、意得爲情新のごとし
隔句對 例せば相思復相思、夜夜淚沾衣、空歎復空歎、朝朝君未歸のごとし

朱飲山が五言近體には

また其七言近體には

流水對 將余去國淚、灑子入鄉衣のごとし
句中對 江流天地外、山色有無中のごとし
分裝對 屢將心上事、相對夢中論のごとし
倒裝對 亂雲低薄暮、急雪舞廻風のごとし
反裝對 好武寧論命、封侯不計年のごとし
走馬對 野老來看客、河魚不用錢のごとし
折腰對 不寢聽金鑰、因風想玉珂のごとし
層折對 遠水兼天湧、孤城隱霧深のごとし
背面對 暴藥能無婦、應門自有兒のごとし

折腰對 不貧夜識金銀氣、遠害朝看麋鹿遊のごとし
三折對 風急天高猿嘯哀、水清沙白鳥飛廻のごとし

例裝對

紅稻啄殘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝のごとし

分裝對

旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高のごとし

流水對

已知白髮非春事、且盡芳樽戀物華のごとし

走馬對

晝漏稀聞高閣報、天顏有喜近臣知のごとし

錯綜對

楊花細逐桃花落、黃鳥時兼白鳥飛のごとし

句中對

孤雲獨鳥川光動、萬井千山海色秋のごとし

就句對

白首丹心依紫禁、一麾伍部淨三邊のごとし

對句の句法は、あらまし斯くのごとし、また袁石公は、七言中聯琢句の法と稱して、就句、折句、上應下呼句、上呼下應句、行雲流水句、顛例錯綜句、上二下五句、上五下二句の八法に分つて、句を煉るの特異なるものを示してゐるが、初學の徒に益ありとおもふから、左に詳解すべし。

就句對、朱飲山は此對法を稱して錯綜對といつてゐる、句中の二字乃至四字が對

しながら、相疊ねてあるもので有る、例せば唐詩

楊花細逐桃花落、黃鳥時兼白鳥飛。

東澗水流西澗水、南峰雲起北峰雲。

花花、鳥鳥、澗水澗水、峰雲峰雲のごとき、説明を待つほどのものでも有るまい。

折句對 一句を折て兩句として讀むべきもの、その上三字にして下四字なるは

靜愛竹時來野寺、獨尋春偶過溪橋。

上四字にして下三字なるは

金馬朝回門似水、碧鷄天遠路如絲。

上應下呼の句 上の四字を下三字で解くので有る、例せば唐詩

素鍊抹林雲氣薄、明珠穿草露華新。

此句、素鍊の林に掛つてゐるやうに見ゆるのは雲氣の薄いので有る、明珠の草を穿つたやうに見ゆるのは露光の新しいので有ると、一句の中、下の三字を以て上の四

字を解いてゐる、此れ所謂る上應下呼の句法。

上呼下應の句。上應下呼の句法の反對で、上四字を以て呼びかけ、下三字にして

之れに應ずるので有る、例へば唐詩

林花着雨臙脂落、水荇牽風翠帶長。

此句、林花が雨をつけておる、つけておるが故に臙脂のやうに落つると應じ、水草が風を引いておる、引いておるが故に帶のやうに長いと應じてゐる、此れ所謂る上呼下應の句法。

行雲流水句。朱飲山が流水對と稱してゐるものと異つた點はない、一聯兩句をス

ラリと一續きに言ひ下し、分けて見えないやうにするもので、古來此例尤も多し。

不辨風塵色、安知天地心。

不知風信到、頓使旅魂驚。

欲爲聖明除弊事、肯將衰朽惜殘年。

已知白髮非春事、且盡芳樽戀物華。

春日鶯啼修竹裡、仙家犬吠白雲中。

いづれも行雲流水。

顛倒錯綜句。一順に言ひ下す句を。却て字を分けて上下に交へおくもので有る、

例せば杜甫か詩

紅稻啄殘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝。

此句にした所が、尋常にいへば、鸚鵡啄殘紅稻粒、鳳凰棲老碧梧枝といふ所だが、

ソレでは事が錯綜せないから、文章を成さない、猶ほ此例を擧ぐれば鄭谷か詩

林下聽經秋苑鹿、江邊掃葉夕陽僧。

朱飲山は此句法を稱して倒装といつてゐるが、倒装と此句法とは少し違つてゐるやうにおもはるゝ、けだし此句法では、字を上と下とに分け交へて仕立てるので有るけれども倒装に至つては、すぐなるものを面白く見立て、倒まにいふまでのこと、

たへば杜子美の句に芹泥隨燕鶯とあるがごとし。

此句は、燕の巢を營む時、芹の根に附着せる泥を取りに下るので有るから、全く燕か泥に隨ふといふのが當然で有るのを、却て泥か燕に隨ふといつてゐる、こかし其意に至ては倒でない、即ち燕が芹の中より飛擧がるを見れば、泥も同じく燕について行く故に、泥にも心のあるやうにいふたので有る、此れ余が所謂の倒裝、また幽意忽不愜、歸期無奈何とあるが如きも、歸期のいかんともするなき故に、幽意の忽ちに愜はないと、上句と下句とを倒裝したもので、古人の詩には此類頗る多し。

上二下五の句 此句法は、朱飲山が所謂の折腰對といふので、五言に在て不寢聽金鑰、因風想玉珂とあるのと其貌を異にして其質を同ふしてゐる、倒せば唐詩

不食夜識金銀氣、遠害朝看麋鹿遊。
世亂鬱鬱久爲客、路難悠悠長傍人。

世が亂るゝ故に、鬱鬱として他郷の客と爲つてゐる、路か塞る故に、悠悠して人に倚つて故郷に歸らずにゐるといふ處、此れ上が二字で下が五字の句。

上五下二の句 此句法は、上二下五の句法の反對で有る、例せば唐詩
永夜角聲悲自語、中天月色好誰看。

角聲の悲むのを聞くので有るが、ともに語る人はない、月色の好いのに對するのて有るが、同じく賞する人はないといふ處、此れ上が五字で下が二字の句。

袁石公が所調る中聯琢句の法といふのは、以上に列開せるだけで有るが、此外、初學の徒の記臆しておらねばならないものが猶ほ三ツ四ツある、さらに左に列開すべし。

一字四字の句 此句法は五言に於て、上の一字を下の四字で解説せるもので、例せば杜甫が放船の詩

青惜峰巒過、黃知橘柚來。

此句、疾く行く船の中より兩岸の景色を望んだる處を叙したもので、青、彼れは峰巒の過ぎるので有る、黄、此れは橘袖の來るので有ると、先づ青、黄の一字を點し、下の四字にてことわりてゐる、もし此法を七言にでも用ゐれば、一字六字の句とでもいふべきか、例せば苑石湖が贈別

事如[△]夢[△]斷[△]無[△]尋[△]處[△]、人似[△]春[△]歸[△]挽[△]不[△]留[△]。

句中對 一句の中、さらに對句のあるもの、例せば唐詩

小院廻廊春寂寂、浴鳥飛鷺晚悠悠。

孤雲獨鳥川光暮、萬井千山海氣秋。

小院と廻廊とか對、浴鳥と飛鷺とか對、孤雲と獨鳥とか對、萬井と千山とか對。

互體 例せば唐詩

風含[△]翠[△]篠[△]娟[△]娟[△]淨[△]、雨裊[△]紅[△]蕖[△]冉冉[△]香[△]。

この一聯、上句は風中に雨あり、娟娟として淨いのは、翠篠の雨に濕ふてゐるので

有る、下句は雨中に風あり、冉冉として香いのは紅、蕖の風に動いてゐるので有る、斯くのごとく、句中に字をかくじ、兩句もち合ひに作るのが所謂互體。

蹉對 例せば

春殘葉密花枝少、睡起茶多酒盞疎。

此一聯、多少疎密の四字を兩句に分ち入れてゐる、而かも上句第四字の密は、下句第七字の疎に對し、下句第四字の多は、上句第七字は少に對す、かやうにもちりて對するものが所謂蹉對。

象外句法 此句法は物を比擬するに、物をおいてはいはないで、意を以て比するもの、例せば眞山氏の詩

聞^レ雨寒更盡、開^レ門落葉深

此一聯、もし唯だ門外の落葉雨聲のごとこいへば、物を指して比するので有るから、象外句法にならない、また唯だ前句の聞^レ雨寒更盡ばかりにても、實の雨を聞

いたやうに爲るから悪い、即ち下句をまで讀んで始めて落葉を雨に比したことが知れるので有る、此れ所謂る象外句法、意を迎へて味ふべし。

影略句法 此句法は、何にても題を設けて詩を作るに、其名もいはない、其體もいはない、唯だ其影をいふて、言外に名も體も聞ゆるやうに作るのて有る、例せば

落葉の詩の一聯

返蟻難尋穴、歸禽易見巢。

此聯、蟻の穴を尋ぬることが出來ないといへば、落葉の地に満ちてゐるといふことが知らるゝ、鳥の巢が見ゆるといへば、木葉の落て、林が空で有るといふことが知らるゝ、猶ほ散向にも皇甫冉が柳の詩に、高拂紅樓低拂塵、霸橋樊折一何頻ほど、詠物の作には此類頗る多し。

對句の句法を、一一精査して類別すれば殆んど枚擧するに違ないが、大略し幾種ぐらゐあるかといふに秘府論には二十九種の對を擧げてゐる、即ち左のごとし。

- 的●名●對
- 隔●句●對
- 雙●擬●對
- 聯●綿●對
- 互●成●對
- 異●類●對
- 賦●體●對
- 雙●聲●對
- 疊●韻●對
- 迴●文●對
- 平●對
- 奇●對

- 同對
- 字對
- 聲對
- 側對
- 隣近對
- 交絡對
- 當句對
- 含鏡對
- 背體對
- 偏對
- 雙虛實對
- 假對

- 切側對
- 雙聲側對
- 疊韻側對
- 總不對對

此對法二十九種の中、**的名對、雙擬對、聯綿對、互成對、隔句對**の外、十五六種は、すでに前に述べてゐる、また隣近對、含鏡對などは、必ずしも初學の徒の知るを要せないもの、しかし唯だ**奇對と假對**に至つては、其詩をして奇警ならしめ、筆をして自在ならしむるもので有るから、猶ほ一言辨じておかねばならない。

奇對 奇對とは字を對して、意も奇特なるを稱するもの、例せば

見說騎[△]鯨遊汗漫、亦會捫[△]虱話[△]辛酸。

此一聯、鯨を以て虱の對としてゐる、大小甚だ異にして、また奇、また傑。

假對 假對とは、**的對**ではないけれども、借り用ゐて對を取る、例せば杜子柱の

一聯

飲子頻通汗、懷君想報珠。

厨人具鷄黍、稚子摘楊梅。

飲子の懷君にける、鷄黍の楊梅に於けるがごとし、また字は對せないけれども、聲音の同じきを借りて對せしむるのが有る、例せば左の諸聯

五峯高不下、萬木幾經秋。

殘春紅藥在、終日子規啼。

下は夏と同音なる故、秋字に對せしむ、子は紫と同音なる故、紅字に對せしむ、此れ所謂る假對、また借對ともいふ。

對聯に於て尤も避けねばならないのは偏枯である、偏枯とは、人身に在つては、的切半身不隨で、一句は能く言ひ慚へたけれども一句がソレに副はないといふのである、之れを古人の詩に徴するに、山如仁者靜と論語の句より得たものには、對句

にも矢張り孟子中より文字を拈出し、風似聖之清とせるがごとき、三杯軟飽後と、酒に酔ふことに軟飽といへる俗語を用ゐたから、一枕黑甜餘と、晝寝のことに黑甜といへる俗語を取つて對せしめたるがごとき、以て標準とすべし、五代の末のこと
で有つた、吳越錢氏の宰相に皮光業といふのがゐて、行人折柳和輕絮、飛燕啣泥帶落花といふ一聯を作つて傑句と爲し、楊楊自得としてゐた、人も亦賞してゐた、中に一少年が、柳に絮あれども、泥に花なし、此れ偏枯だ、巧とするに足りないといつたさうな、我朝廷喜の時にも、嘗て内宴觀菊の詩に、三善相公は、鄜縣村闌皆富貨、陶家朱子不垂堂といふ一聯を作つて、頗る自負の色が有つた、が、昔公ひとり賞めない、三善公は不滿におもひ、後ち建春門に於て、其所以を尋ねると、昔公は富貨の二字が悪い、潤屋の二字に改むべしとの説で有つたさうな、此れも亦後句すでに史記中の千金之子不垂堂といふ語より來てゐるから、前句も大學の富潤屋の字に照して思付いたもので有うが、いかにも面白い、また許氏の子が虞氏の

子を尋ねて、つねに逢はないから、戯れに壁に夜夜出遊、知^レ虞公之不可^レ諫の十一
 字を書いた、虞氏歸つて一見し、直ちに時時來擾、何許^三子之不^レ憚^レ煩とつけたさ
 うな、此手柄は、孟子の語で嘲つたものを、孟子の語で對へたのに在る、いづれも
 味ふべし、しかし初學の徒は、餘りに斯る點にのみ拘泥してゐると、或は進取の防
 と爲るから、先づ閉議論、不急察に付してゐるが宜しい。
 また對句で忌むのは合掌といふので有る、合掌とは、字の換つて意の換らないのを
 稱したものの、晋宋間の詩、造語は奇抜だけれども、大抵此病を免れてゐないやうに
 おもはるゝ、例せば

魚戲新荷動、鳥散餘花落

蟬噪林愈靜、鳥啼山更幽

いづれも然らざるなし、さらば王安石は鳥啼山更幽の句に對せしむるのに、風定花
 猶落の句を以てした、上句、靜中に動あり、下句、動中に靜あり、始めて合掌の病

なしといはねばならない。

一聯の句、同じやうなるは悪い、たとへば燕と鴈とを用ゆるに、燕に、來るいへば、
 鴈は去るといふが宜しい、到^レ江吳地盡、隔^レ岸越山多の類、味ふべし。

對句でないものに、句體の對句のやうに並ぶのは悪い、しかし對句は、却て對せぬ
 やうに見えて、能く見れば一字一字對してゐるやうに作るが宜しい、杜少陵が一聯
 に酒債尋常行處在、人生七十古來稀の類、味ふべし。

絶句にても、律詩にても、一篇の中に、同じやうな句體のあるのは悪い、一の句は
 一の句、四の句は四の句と、たじかに別に開こゆるやうに作らねばならない、同意の
 句に至つては、對聯に在つては所謂合掌で、散句に在つては重複だから猶悪い。

對句を作るは誠に容易でない、例せば唐詩

崔顥 晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲。

李白 三山半落青天外、二水中分白鷺洲。

崔顥は鸚鵡洲を漢陽樹に對させてゐる、李白は白鷺洲を青天外に對させてゐる、杜甫は一腐儒と思歸客に對させてゐる、いづれも確對とはいへないが、氣格超然として、律のために束縛されないで、固より自ら餘味の存してゐるのを認むる、後世に至つては、或は青を以て白に嫌し、花を以て柳に配し、一に對偶を以て功と爲すもの比比皆然りであるから、此輩をして此詩を作らしめたことなら、鸚鵡洲、白鷺洲のごときも、亦必ず鸚鵡堰、黄牛峽に配するで有う、字と字との間は、自ら切なるにさうゐないが、神味索然、朗誦の値なし、しかし此等の文字は、崔、李、杜のやうな手腕が有つて、始めて爲すべきことで、尋常一様の作家の筆を下すべき所でない、ソハ何故かといふに、凡そ對句を作るに、對の字が疎遠にあると、あらくして悪い、さらばとて日に月、天に地、馬に牛、猫に犬といふやうに、句ごとに對すれば、餘り接近し過ぎて俗にも聞こゆる、故にソコは前に述べておゐた假對、奇對などを用

杜甫

江漢思歸客、乾坤一腐儒。

かて、調子能くせねばならないが、初學の徒は先づ法を守ることにするが宜しい。凡そ對句にもせよ、散句にもせよ、句勢に依て之れを分つに、其種類頗る多し、一健、一麗、一壯、一婉、今左に其一般。

雄犬

吳楚東南析、乾坤日夜浮。

雄壯

氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城。

悲壯

萬里悲秋常作客、百年多病獨登臺。

壯勁

船危神女峽、馬瘦鬼門關。

壯快

中間一束高腰峽、直放三篙濤一出海門。

豪健

三山巨鼉湧、萬里大鵬飛。

豪放

我來萬里駕長風、絕壑層雲許盪胸。

清健

曉月暫飛高樹裏、銀河隔在數峰西。

蒼勁

秋天曠野行人絕、馬首東來知是誰。

雄渾 隴頭流水關山月、泣上龍堆望故鄉。

眞孽 小弟南莊向漁獵、一封書寄數行啼。

溫藉 邊將皆承主恩澤、無人解道取涼州。

溫和 自是人心隨境到、艤聲帆色盡君恩。

溫雅 洞簫聲裏當時月、應照千年化鶴歸。

溫麗 醉後不知新月上、滿身花影倩人扶。

穩秀 誰道空廻君恨切、未應如我到家時。

穩巧 白沙難認月、黃葉易爲霜。

清爽 午夜江聲推月上、浪花如雪寺門前。

清警 清空一鶴排雲上、便引詩情到碧霄。

清微 幽磬蟬聲下、閒窓竹翠陰。

清婉 惆悵詩魂呼不起、只將明月照梅花。

深婉 吳姬緩舞留君醉、隨意青楓白露寒。

凄婉 桃葉傳情竹枝怨、水流無限月明多。

婉麗 釀花深巷五更雨、吹面小樓三面風。

流麗 洞簫吹上花間月、十二珠簾不下鉤。

明麗 水清明白鷺、花落失青苔。

穠麗 月麗鴛鴦水、春生葦蕩枝。

偉麗 騶吏忽傳丞相至、火城如畫曉寒銷。

警拔 月殿影開聞夜漏、水精簾捲近銀河。

巧緻 棠醉風扶起、柳眠鶯喚醒。

細緻 袖單嫌翠薄、杯淺怯金寒。

澄澹 疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏。

蕭散 日暮鳥歸山寺遠、野溪流水獨歸僧。

此外、高雅なるもの、閒雅なるもの、古澹なるもの、古峭なるもの、沈鬱なるもの、幽玄なるもの、流爽なるもの、忍俊なるもの、深酷なるもの、率直なるもの、遺秀なるもの、歴落なるもの、殆んど枚擧するに暇ないが、此等の句勢は、いづれも學ぶべし、しかし奇句險語に至つては、讀んで人の眼を驚かすには足るが、作るものは容易のことでない、例として其二二を擧げんに、先づ杜の詩

堂上不_レ合_レ生_二楓樹_一、怪底江山起_二煙霧_一。

斫_二却月中桂_一、清光應_二更多_一。

白樂天が詩

逢憐天上桂華飛、爲問姮娥更寡無、月中幸有_二閒天地_一、何不_二中央種_二兩株_一。

韓子蒼

故人來_二自_二天柱峰_一、手提_二石廩與_二祝融_一、兩山陂陀幾百里、安得_レ置_二之行李中_一。

蘇東坡

我持_二此石歸_一、袖中有_二東海_一。

杜牧之

我欲_二東召_二龍伯公_一、上天揭取北斗柄、蓬萊頂上澣_二海水_一、水盡見_レ底看_二海空_一。

李賀

女鍋鍊_レ名補_二天處_一、石破天驚迸_二秋雨_一。

李白

一日十風吹_二倒山_一、白浪高_レ於_二臨江館_一。

これ學んで悪いとはいはないが、到らざれば所謂る虎を畫いて成らず、却て猫に類するやうなものに爲るから、初學の中は、餘り近寄らぬが宜しい。

けだし詩は、其句を甚だ工みにせんとすれば、意足らずして、句の勢力までが弱く爲り易い、一般に工みにして格力の強いのは、古人も亦難事とした所で有るから、初學の徒は、少しは拙くとも、勢の強いやうに作るが宜しい。

句勢は古人の詩を偷むも宜しい、之れを稱して偷勢といふ、偷といへば、何んだか悪いやうにも聞ゆるが、此れ全く承襲で、必ずしも尤むべきことでない、例せば歐陽修が送人の詩

酌君以荆州魚枕之焦、贈君以宣城鼠鬚之管、酒如長虹飲滄海、筆若駿馬馳平阪。

此句勢を偷んでゐるのは、黄山谷が送人の詩

酌君以蒲城桑拓之酒、泛君以湘纍秋菊之英、贈君以駭川點漆之墨、送君以陽開墮淚之聲、酒澆胸中之磊塊、菊制短世之頽齡、墨以傳千古文章之印、歌以寫從來兄弟之情。

近時の學者は、此格は魯直が此詩に始つたとしてゐるけれども、實は魯直も歐陽修の句勢を偷んだものに外ならない、また梅聖俞の詩

南隴鳥過北隴叫、高田水入低田流。

歐陽修三歎し、常に之れを誦してゐた、今魯直の詩

野水自添田水滿、晴鳩起喚雨鳩來。

此句も亦恐らく梅が句勢を承襲したもので有う、しかし語意の高妙なる一に斯くのごとし、能く前人を祖述したものといはねばならない。

また古人の一二句を、そのまゝ襲用して詩を作つたものも有る、例せば李嘉祐が句

水田飛白鷺、夏木嘯黃鸝。

王摩詰の句

漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木嘯黃鸝。

此れ漠漠、陰陰の四字を加へて七言と爲したばかりで有るが、前句に比すれば倍す

生動の妙が有るやうにおもはるゝ、また蘇東坡が人を送る古詩中の一節

峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、請君見月時登樓。

此詩、上二句は、李謫仙が峨眉山月歌なる峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜

發清溪向三峽、思君不見下渝州の上二句で有るから、つぐに謫仙此語以下の二句を以てしたので有る、而かも此詩格は、もと謫仙に出でたもので、今左に謫仙の詩

解道澄江淨如練、令人還憶謝玄暉。

此句中、澄江淨如練の五字は、けだし謝玄暉の句で有る、後人此格を襲用し、愈よ變じて愈よ巧みに爲つたので有るが、其祖は即ち李太白。

また徹頭徹尾、古人の句のみを集め、自家の語は、一字も着けないで、一篇の詩を成すものが有る、之れを名けて集句と稱する中に、陶淵明の句のみを集めたものを集陶といひ、杜子美の句のみを集めたものを集杜といふ、また唐人の句のみを集め、宋人の句のみ集めるなど、其類例も一樣ではない、けだし集句は、通常宋の王安石に始つたものゝやうに言傳へてゐるが、傳咸が七經の詩中、毛詩一篇のこときは、みな詩經の語を集めたもので有るといへば、其淵源せる所も亦遠い、清の康熙中、

僧中洲といへるもの、黄山に住みし時、成語を集めて、黄山の賦といふのを作つた、全篇八千七十三言、此れ集句の尤も長いもので有る、之れを要するに集句は萬卷の詩集を讀破し、涉筆輒ち成るものでなければ、勞多くして益なし、無論初學の徒の試むべきものでない、今其作例として僧元政が筆に成れる集句を左に録すべし、その詩

不説有爲法、永懷塵外蹤、鳥窺新罽栗、雲白久晴峰、遠路獨歸寺、深山何處鐘、悠悠無一事、何得世人逢

此詩、第一句は王貞白の詩、第二句は孟浩然の句、第三句は包佶の句、第四句は曹松の句、第五句は周賀の句、第六句は王維の句、第七句は杜荀鶴の句、第八句は賈島の句、よし他人の句で有つても、首尾一貫して、自家の手に成つたやうに集めねばならない。

次に聯句といふのが有る、聯句は、二人以上にて句を聯らねて一詩を成すもので、

其源は柏梁體聯句で有る、聯句の體は多い、毎句用韻、一人一句を賦するのが即ち此柏梁體で、多數、人を集めた詩會の席上などにて多く此體を作るやうにおもはるゝ、また韓愈孟郊の聯句は、初め二句づつを賦して八句に至り、更らに四句づつを賦して三十六句を重ね、結末の八句は孟郊が筆を下してゐる、此體は餘り行はれない、尤も行れてゐるのは、高啓張憲が舞劍聯句の體で、其作法は、張憲先づ起一句を賦し、高啓之を承けて第二第三の句を作り、張はついで第四第五、高は更らに第六第七と錯綜篇を成し、終の一句は張之れを作る、即ち其詩

晚陌息鳴鑣、張秋城起嚴析、登堂欣有會、高願坐歎無樂、豪賓奉觴壽、張壯士掉節作、韻生鸚鵡、高文綴星輝、鏗拭土色纒動、張映火光轉燦、寒瀉走澗泉、高明懸溜檐澤、徒誇刀瑩膏、張漫詫七淬藥、腥疑人血乾、高威攝鬼踪、雄聞莊子說、張醉想玉郎斫、聯翩倏鴻鶩、高奮迅仍雀躍、來如龍出淵、張去若蛇赴壑、疾驚雷破山、高怒訝風捲漠、初馳帆縱張、張忽注弩弛躡、陰

陽變開闔、高朝汐隨進卻、高步赴節同、張奇形分狀各、斜回象翼蔽、高曲踊肖擎攫、欸驚西方帝、張懍怖東海若、屋翻影紛綸、高地殷勢揮霍、亂思突騎奔、張低見飢隼掠、旁分萬矢斷、高前拉千槍拓、出堪劫齊壇、張立可當蜀閣、澤聞蛇蝠啼、高路遇猿翁搏、斬關豁然判、張擊柱鏗爾着、陸疑濤湧牀、高宵駭虹闔幕、警栖已翻翻、張墜槁俄索索、顛旭曾悟書、高俠軻記爭博、目花匪酒酒、張膚粟似裘薄、忠義氣盡張、高姦邪膽俱落、不從玉玦計、張欲定銅盤約、未數大娘強、高終勝處女弱、季路袖手欽、張斐晏汗顏作、疾視誰敢當、高不戒我暫學、勇夫怒生嬰、張恐僕戰成虐、功收刺虎奇、高志感聞鷄惡、暫停月徘徊、張既罷天寂寞、崆峒詎必倚、高氛殺行可廓、馘妖正思今、張斷佞猶慕昨、會合固有期、高死生良欲託、寧憂武庫火、張但俟兇門鑿、慷慨勿悲歌、高淋漓且酣酌、張

また清の陳基が其妻金氏と聯句して成せる七言律

談何容易說レ工レ詩、陳事在三千秋一筆一枝、人道菰蘆依三故様、金天生三花葉一竟誰
師、性情以外無三傳作、陳唐宋之間有二等差、今日放言狂不レ諱、金識レ君已恨十年
遲、陳

聯句に於て、七言の作は多く律絶なれども、長篇は五言に多し、しかし柏梁體は七
言にて作るが宜しい。

第八 字法

一字は一篇一章の元素。 一字のために大失體を來せるの例。 黃鶴樓の詩と鳳凰臺の詩。
 王貞白と釋貫休。 一字だも増減の出來ないやうに作らねばならない。 文字の照應。 畜字
 點出に就て注意。 一句中に於て兩字の映照。 地名を用ゐるについて。 字、字を生む。
 析字。 疊字。 詩中に同字を用ゐるは悪い。 双字の用法。 倒字法。 聯綿の字。
 分け字の種類。 一字の工即ち字眼。 蘇東坡と黃山谷及び東坡の妹。 字眼の例。 一句
 の中の縫目には一字の工を求む。 詩席に於ける時の注意。 虛字と實字。 蘇東坡の字法。
 結論。

語にも、章を改むるは篇を代へるよりも難し、字を代へるは句を代へるよりも難し
 と有るやうに、字を置くのは容易のことでない、故に古人の中には、吟三安一個字、
 撚斷數莖鬚とまで叫んだものさへ有る、ソレはさうで有う、一般に篇といひ、章と
 いふのは、句を積んで成つたもので有る、而かも其句は字を積んで成つたもので有
 る、いはゞ一字は一篇一章の元素で有るから、其元素にして悪ければ、妙詩佳句の